

教育課程表（目次）

保健医療学部 リハビリテーション学科 理学療法専攻

科目区分	授業科目名	配当 学年・学期	必修・選択	単位数	担当者	頁
教養科目	コミュニケーション	英語コミュニケーションⅠ（英会話初級）	1 前 必	2	近藤未奈	1
		英語コミュニケーションⅡ（英会話中級）	1 後 選	2	近藤未奈	2
		英語コミュニケーションⅢ（英文抄読）	1 後 選	2	近藤未奈	3
		国語表現学	1 前 必	2	岡崎昌宏	4
		論理学	1 後 必	2	辻虎志	5
		人間関係学	1 前 選	2	吉富千恵	6
		コミュニケーション・リハビリテーション学	2 後 必	2	山口忍・森岡悦子	7
		心理学	1 前 選	2	黒崎優美	8
		言語学	2 前 選	2	松井理直	9
	情報分析とその応用	情報処理学	1 前 必	2	宮本頼和	10
		医療情報学	1 後 必	2	星雅丈	11
	科学／自然と人間	物理学	1 前 必	2	（非常勤講師）	13
		生物学	1 後 必	2	林 研	14
		生活科学（福祉住環境論）	2 前 選	2	山田隆人	15
		自然科学概論	2 後 選	2	岡本摩耶	16
		栄養学	1 前 選	2	野田康子	18
医療人づくりの教育科目	保健・医療・福祉 の理解	基礎ゼミナール	1 通 必	2	中山広宣 他	19
		医の倫理（医療倫理学・生命倫理学）	1 前 必	1	小野啓郎	21
		スポーツ医学	2 前 必	1	中村憲正	23
		リハビリテーション概論	1 前 必	1	佐藤秀紀	24
		リハビリテーション医学	1 後 必	1	阿部和夫	25
		疫学・公衆衛生学	1 後 必	1	白井文恵	26
		障害者福祉論	2 前 必	1	橋本卓也	27
		健康科学・開発	1 後 必	1	佐藤秀紀	28
	専門基礎科目	基礎解剖学	1 前 必	1	渡辺正仁	29
		解剖学基礎実習	1 前 必	1	渡辺正仁	31
		運動器系の解剖学	1 後 必	1	渡辺正仁	33
		神経系の解剖学	1 後 必	1	渡辺正仁	35
		内臓系の解剖学	1 後 必	1	渡辺正仁	37
		生理学	1 通 必	2	岡崎祐香	39
		生理学実習	2 前 必	1	岡崎祐香	41
		運動生理学	1 後 必	1	中江悟司	42
		運動学総論	1 後 必	2	境隆弘	43
		運動学各論	2 前 必	2	境隆弘	45
		運動学実習	2 後 必	1	境隆弘	47
		人間発達学	2 前 必	1	横田浩子	48
	疾病と障害の成り立ち 及び 回復過程の促進	病理学概論	2 前 必	1	富田裕彦 他	49
		一般臨床医学（泌尿器・外科）	2 後 必	1	弓場健義 他	50
		内科学	2 通 必	2	横山建二 他	51
		整形外科	2 通 必	2	中村憲正	53
		臨床神経学	2 通 必	2	阿部和夫	55
		臨床運動学	2 後 必	1	境隆弘	57
		精神医学	2 前 必	1	小畔美弥子	61
		精神科リハビリテーション学	2 後 選	1	中山広宣	62
		小児科学	2 前 選	1	仲野由季子	66
		老年医学	2 後 選	1	横山建二	67
専門科目	基礎理学療法	高次脳機能障害学	2 前 必	1	森岡悦子	68
		理学療法概論	1 前 必	1	石倉隆	69
		理学療法障害学	2 後 必	1	洲崎俊男	71
	理学療法評価学	理学療法研究法	2 後 必	1	後藤昌弘	72
		理学療法評価学Ⅰ（概論）	1 後 必	1	今井公一	73
		理学療法評価学Ⅱ（測定と評価）	1 後 必	1	今井公一	74
		理学療法評価学Ⅲ（評価プロセス）	2 前 必	1	今井公一	75
		理学療法評価学演習	2 後 必	1	野村卓生	76
	理学療法治療学	運動療法学Ⅰ	2 後 必	2	佐藤睦美	78
		物理療法学	2 後 必	1	洲崎俊男	80
	臨床実習	臨床実習Ⅰ	1 前 必	1	理学療法専攻教員	81
		臨床実習Ⅱ	1 後 必	1	理学療法専攻教員	82
		臨床実習Ⅲ	2 後 必	1	理学療法専攻教員	83

保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

科目区分		授業科目名	配当 学年・学期		必修・選択		単位数	担当者	頁
教養科目	コミュニケーション	英語コミュニケーションⅠ（英会話初級）	1	前	必		2	近藤未奈	1
		英語コミュニケーションⅡ（英会話中級）	1	後		選	2	近藤未奈	2
		英語コミュニケーションⅢ（英文抄読）	1	後		選	2	近藤未奈	3
		国語表現学	1	前	必		2	岡崎昌宏	4
		論理学	1	後	必		2	辻虎志	5
		人間関係学	1	前		選	2	吉富千恵	6
		コミュニケーション・リハビリテーション学	2	後	必		2	山口忍・森岡悦子	7
		心理学	1	前		選	2	黒崎優美	8
		言語学	2	前		選	2	松井理直	9
	情報分析とその応用	情報処理学	1	前	必		2	宮本頼和	10
		医療情報学	1	後	必		2	周藤俊治	12
	科学／自然と人間	物理学	1	前	必		2	（非常勤講師）	13
		生物学	1	後	必		2	林 研	14
		生活科学（福祉住環境論）	2	前		選	2	山田隆人	15
		自然科学概論	2	後		選	2	岡本摩耶	16
		栄養学	1	前		選	2	野田康子	18
医療人づくりの教育科目	保健・医療・福祉 の理解	基礎ゼミナール	1	通	必		2	中山広宣 他	19
		医の倫理（医療倫理学・生命倫理学）	1	前	必		1	小野啓郎	21
		スポーツ医学	2	前	必		1	中村憲正	23
		リハビリテーション概論	1	前	必		1	佐藤秀紀	24
		リハビリテーション医学	1	後	必		1	阿部和夫	25
		疫学・公衆衛生学	1	後	必		1	白井文恵	26
		障害者福祉論	2	前	必		1	橋本卓也	27
		健康科学・開発	1	後	必		1	佐藤秀紀	28
専門基礎科目	人体の構造と機能 及び 心身の発達	基礎解剖学	1	前	必		1	渡辺正仁	29
		解剖学基礎実習	1	前	必		1	渡辺正仁	31
		運動器系の解剖学	1	後	必		1	渡辺正仁	33
		神経系の解剖学	1	後	必		1	渡辺正仁	35
		内臓系の解剖学	1	後	必		1	渡辺正仁	37
		生理学	1	通	必		2	岡崎祐香	39
		生理学実習	2	前	必		1	岡崎祐香	41
		運動生理学	1	後	必		1	中江悟司	42
		運動学総論	1	後	必		2	境隆弘	43
		運動学各論	2	前	必		2	境隆弘	45
		運動学実習	2	後	必		1	境隆弘	47
		人間発達学	2	前	必		1	横田浩子	48
	疾病と障害の成り立ち 及び 回復過程の促進	病理学概論	2	前	必		1	富田裕彦 他	49
		一般臨床医学（泌尿器・外科）	2	後	必		1	弓場健義 他	50
		内科学	2	通	必		2	横山建二 他	51
		整形外科学	2	通	必		2	中村憲正	53
		臨床神経学	2	通	必		2	阿部和夫	55
		臨床運動学	2	後		選	1	境隆弘	59
		精神医学	2	前	必		1	小畔美弥子	61
		精神科リハビリテーション学	2	後	必		1	中山広宣	64
		小児科学	2	前		選	1	仲野由季子	66
		老年医学	2	後		選	1	横山建二	67
		高次脳機能障害学	2	前	必		1	森岡悦子	68
専門科目	基礎作業療法学	作業療法概論	1	前	必		1	中山広宣	84
		基礎作業療法学Ⅰ	1	前	必		1	福井信佳	86
		基礎作業療法学Ⅱ	1	後	必		1	福井信佳	87
		基礎作業療法学Ⅲ	2	前	必		1	吉田文	88
		基礎作業療法学Ⅳ	2	後	必		1	吉田文	89
	作業療法評価学	作業療法評価学Ⅰ（概論）	1	後	必		1	早坂友成	90
		作業療法評価学Ⅱ（測定と評価）	2	前	必		2	早坂友成	91
		作業療法評価学Ⅲ（評価プロセス）	2	後	必		2	早坂友成	93
	作業療法治療学	作業療法技術論Ⅰ	1	前	必		1	山田隆人	95
		作業療法技術論Ⅱ	1	後	必		1	山田隆人	96
		作業療法技術論Ⅲ	2	前	必		1	山田隆人	97
		臨床ゼミナールⅠ	2	前	必		1	吉田文	98
		臨床ゼミナールⅡ	2	後	必		1	吉田文	99
	臨床実習	臨床見学実習	1	後	必		1	作業療法学専攻教員	100

言語聴覚専攻科

科目区分	授業科目名	配当 学年・学期		必修・選択		単位数	担当者	頁
教養科目	理学療法学概論	1	後		選	1	石倉隆	102
	作業療法学概論	1	後		選	1	中山広宣	103
専門基礎科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）	2	後	必		1	松井理直 ほか	104
	解剖学	1	前	必		1	渡辺正仁	105
	生理学	1	前	必		1	秦順一	106
	病理学	1	前	必		1	橋本和明	107
	内科学（老年医学含む）	2	前	必		1	宮井潔	108
	小児科学	2	前	必		1	仲野由季子	109
	精神医学	1	後	必		1	小畔美弥子	110
	リハビリテーション医学	1	前	必		1	阿部和夫	111
	耳鼻咽喉科学	1	前	必		1	石田稔 ほか	112
	臨床神経学	1	後	必		1	小倉光博	113
	形成外科学	2	後	必		1	大倉正也	114
	臨床歯科医学	1	前	必		1	小原浩	115
	口腔外科学	1	後	必		1	中嶋正博	116
	呼吸発声系医学（呼吸発声発語系の構造、機能、病態）	2	前	必		1	本多知行・楯谷一郎	117
	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）	2	前	必		1	金丸眞一 ほか	118
	神経系医学（神経系の構造、機能、病態）	1	前後	必		1	西林宏起 ほか	119
	臨床心理学	1		必		2		
	臨床心理学 1		前	必		(1)	藤井章乃	120
	臨床心理学 2		後	必		(1)	藤井章乃	121
	生涯発達心理学	1		必		2		
	生涯発達心理学 1		前	必		(1)	井崎基博	122
	生涯発達心理学 2		後	必		(1)	森田喜治 ほか	123
	学習・認知心理学	1		必		2		
	学習・認知心理学 1		前	必		(1)	平田佐智子	124
	学習・認知心理学 2		後	必		(1)	平田佐智子	125
	心理測定法	1	後	必		1	松井理直	126
	言語学（言語心理学含む）	1		必		2		
	言語学 1		前	必		(1)	松井理直	127
	言語学 2		後	必		(1)	松井理直	128
	音声学	2		必		2		
	音声学 1		前	必		(1)	松井理直	129
	音声学 2		前	必		(1)	松井理直	130
	音響学（聴覚心理学含む）	1		必		2		
	音響学 1		前	必		(1)	松井理直	131
	音響学 2		後	必		(1)	松井理直	132
	言語発達学	1	後	必		1	齋藤典昭	133
	リハビリテーション概論	1	後	必		1	澤井里香子	134
	社会保障制度	2	前	必		1	山本永人	135
	医療福祉教育・関係法規	2	前後	必		1	山本永人 ほか	136
	言語聴覚障害学概論	1		必		2		
	言語聴覚障害学概論 1		前	必		(1)	吉機俊雄 ほか	137
	言語聴覚障害学概論 2		前後	必		(1)	吉機俊雄・福山智子 ほか	138
	言語聴覚障害診断学	2		必		2		
	言語聴覚障害診断学 1		前後	必		(1)	齋藤典昭 ほか	139
	言語聴覚障害診断学 2		後	必		(1)	大塚佳代子 ほか	140
	失語症Ⅰ	1		必		3		
	失語症Ⅰ -1		前	必		(1)	大西環	141
	失語症Ⅰ -2		後	必		(1)	吉機俊雄	142
	失語症Ⅰ -3		後	必		(1)	林正弘	143
	失語症Ⅱ	2	前	必		1	吉機俊雄・大西環	144
	高次脳機能障害	1	前後	必		2		
	高次脳機能障害 1		前	必		(1)	森岡悦子	145
	高次脳機能障害 2		後	必		(1)	森岡悦子	146
	言語発達障害Ⅰ	1		必		4		
	言語発達障害Ⅰ -1		前後	必		(1)	齋藤典昭・江頭智香子 ほか	147
	言語発達障害Ⅰ -2		前後	必		(1)	吉田紀子・齋藤典昭 ほか	148
	言語発達障害Ⅰ -3		前後	必		(2)	齋藤典昭 ほか	149
	言語発達障害Ⅱ	2	前後	必		2	井崎基博・齋藤典昭 ほか	151
	音声障害	2	通	必		2	藤田邦子・大西環	153

専門基礎科目

構音障害Ⅰ	1		必		4		
構音障害Ⅰ-1		前	必		(1)	松本治雄	155
構音障害Ⅰ-2		前	必		(1)	吉田紀子	156
構音障害Ⅰ-3		後	必		(1)	藤原百合	157
構音障害Ⅰ-4		後	必		(1)	熊倉勇美	158
構音障害Ⅱ	2	前後		選	1	福永真哉・山本一郎 ほか	159
嚥下障害Ⅰ	1		必		2		
嚥下障害Ⅰ-1		前後	必		(1)	前田留美子・高木卓司	160
嚥下障害Ⅰ-2		後	必		(1)	戸倉晶子・田上恵美子 ほか	161
嚥下障害Ⅱ	2	後		選	1	田上恵美子・糸田昌隆 ほか	162
吃音	1	後	必		1	福永真哉 ほか	163
小児聴覚障害	1	後	必		2	福田章一郎 ほか	164
成人聴覚障害Ⅰ	1	前	必		1	山口忍・矢吹裕栄	166
成人聴覚障害Ⅱ	2	前	必		2	田中美郷・山口忍 ほか	167
補聴器・人工内耳	2	後	必		1	竹田利一 ほか	169
視覚聴覚二重障害	2	前後	必		1	吉機俊雄 ほか	170
臨床実習Ⅰ	1	前	必		1	吉機俊雄 ほか	171
臨床実習Ⅱ	1	後	必		5	吉機俊雄 ほか	172
臨床実習Ⅲ	2	後	必		6	吉機俊雄 ほか	173

授業科目	英語コミュニケーションⅠ	担当者	近藤 未奈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

この授業では、語彙、リスニング、リーディング、ライティングの各技能の演習をバランス良く行い、実用的かつ総合的な英語力の養成をはかります。ロールプレイ方式によるペアワークにより英会話力のアップも目指します。

■ 目 標

医療専門分野に関係した基礎的な英語表現に慣れ、現場で英語が必要とされた際にも対応できる英語運用能力を養成することを目標とします。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション／Unit 1 First Visit（初診&問診表）
第2回 Unit 2 At the Examination Room（診察室での基本会話）
第3回 Unit 3 Flu Symptoms（インフルエンザの症状）
第4回 Unit 4 Pain Problems（痛みへの対処）
第5回 Unit 5 Stomachache（胃痛）
第6回 Unit 6 Abdominal Pain（腹痛）
第7回 Unit 7 Urinalysis（尿検査）
第8回 Unit 8 Cholesterol（コレステロール）
第9回 Unit 9 Anemia（貧血）
第10回 Unit 10 Injury（けが）
第11回 Unit 11 Operation Period（手術の準備）
第12回 Unit 12 Alcohol Poisoning（アルコール中毒）
第13回 Unit 13 Ultrasound Examination（超音波検査）
第14回 Reading Exercises 1（読解演習）
第15回 Reading Exercises 2（読解演習）

■ 評 価 方 法

出席および受講態度（40% 予習や授業中の発表も含める）、小テスト（20%）、試験（40%）の結果を総合的に評価します。

■ 教 科 書

『Medical English Clinic（やさしい医療英語）』（西原俊明，西原真弓，Tony Brown 著／センゲージラーニング）
『ネイティブ感覚でわかる医療動詞』（飯田恭子 著／医学書院）

■ 参 考 書

『大学生のための英文法ビフォー & アフター』（豊永 彰 著／南雲堂）
『骨単（ホネタン）語源から覚える解剖学英単語集』（河合良訓 監修／エヌ・ティー・エス）
他、適宜授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。教科書と辞書のいずれかでも持ってきていない場合、出席とは認めません。

授業科目	英語コミュニケーションⅡ	担当者	近藤 未奈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

この授業では、医療分野で使われる英語を正確に聞き取り、話す演習を重点的に行い、実用的な英語力の養成をはかります。適宜、英文法の解説やリーディングの演習も行いながら進行します。

■ 目 標

「英語コミュニケーションⅠ」の内容を発展させ、特にリスニング・スピーキングを中心とした医療英語の運用能力を養成することを目標とします。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション／Unit 1 What's Your Major?
- 第2回 Unit 2 At the Reception Desk
- 第3回 Unit 3 In the Outpatient Department
- 第4回 Unit 4 In the Rehabilitation Room
- 第5回 Unit 5 In the ADL Laboratory
- 第6回 Unit 6 Deaf Culture Awareness
- 第7回 Unit 7 Refraction Test for a Child
- 第8回 Unit 8 Radiological Technologists
- 第9回 Unit 9 The Job of Medical Records Administrator
- 第10回 Unit 10 Non-verbal Communication in a Social Work Interview
- 第11回 Unit 11 New Types of Pharmacists
- 第12回 Unit 12 International Activities
- 第13回 Hospital Directions and Instructions
- 第14回 Drugs and Medications
- 第15回 Reading Exercises

■ 評価方法

出席および受講態度（40% 予習や授業中の発表も含める）、小テスト（20%）、試験（40%）の結果を総合的に評価します。

■ 教 科 書

『Clinical Scenes for a New Age – Perspectives for Health Professionals（医療福祉系学生のための実践英語コース）』（田中美子、南井紀子、宮崎路子、千葉礼子 著／マクミランランゲージハウス）

■ 参 考 書

『医療スタッフのための英会話ハンドブック』（ルーサー・リンク、カート・リンク、村瀬 忠 著／研究社）他、適宜授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。教科書と辞書のいずれかでも持ってきていない場合、出席とは認めません。

授業科目	英語コミュニケーションⅢ	担当者	近藤 未奈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

この授業では、医療の現場で使われている英語表現や基本的用語、専門用語の成り立ちを学びます。また、英語文献・論文の内容を正確に読むために必要な文法項目を復習します。英語論文の抄録を読む演習も適宜行います。

■ 目 標

医学英語に特有の英語表現に慣れ、国際的な学術雑誌やデータベースに掲載されている英語文献の内容を正確に理解できる力を身に付けることを目標とします。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション／医学用語の基本構造
- 第2回 接尾辞
- 第3回 接頭辞
- 第4回 身体部位の用語
- 第5回 英語論文に関する基礎知識（1）
- 第6回 骨の用語
- 第7回 筋肉の用語
- 第8回 神経の用語
- 第9回 英語論文に関する基礎知識（2）
- 第10回 運動学の用語
- 第11回 症状に関する用語
- 第12回 英語論文に関する基礎知識（3）
- 第13回 英文読解演習（1）
- 第14回 英文読解演習（2）
- 第15回 英文読解演習（3）

■ 評価方法

出席および受講態度（30% 予習や授業中の発表も含める）、小テストおよびレポート課題（30%）、試験（40%）の結果を総合的に評価します。

■ 教 科 書

『ネイティブ感覚でわかる医療動詞』（飯田恭子 著／医学書院）
※「英語コミュニケーションⅠ」から継続使用

■ 参 考 書

『英語文献なんて怖くない！—スイスイ読むための18の技』（森實敏夫，マーティン・ピーターズ 著／中山書店）
『アタマとオシリでわかる医療英単語』（飯田恭子，平井美津子 著／医学書院）
『大学生のための英文法ビフォー & アフター』（豊永 彰 著／南雲堂）
他、適宜授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。持ってきていない場合、出席とは認めません。

授業科目	国語表現学	担当者	岡崎 昌宏		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

レポートの作成など、大学では、自身の考えを練り、それを正確に、過不足なく表現する能力が一層求められる。そしてそれは、社会の様々な場面でも必要となる能力である。この授業では、正確な表現のために必要な知識や技術を習得するとともに、レポートの作成方法を実践的に学ぶ。また、優れた文章を読み、表現技術への意識を高める。

■ 目 標

自身の考えを整理し、それをレポートなどの形で正確に表現できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 概説―正確な表現の重要性
- 第2回 文章を書くための知識 (1) ― 表記など
- 第3回 文章を書くための知識 (2) ― 原稿用紙の使い方、段落など
- 第4回 正確な文章のために (1) ― 説明不足の文をなくす
- 第5回 正確な文章のために (2) ― 過度な説明、重複説明をなくす
- 第6回 正確な文章のために (3) ― 長くなってしまった文を、短くする
- 第7回 正確な文章のために (4) ― 句読点への意識を高める、語彙力を高める
- 第8回 論文・レポートの文章を読み、その表現の特徴を学ぶ
- 第9回 レポートを書く (1) ― 様々な事実を集める
- 第10回 レポートを書く (2) ― 意見の方向を定める
- 第11回 レポートを書く (3) ― 自説の明確な根拠を考える
- 第12回 レポートを書く (4) ― 基本的な展開方法を知る
- 第13回 レポートを書く (5) ― レポートを書き、推敲する
- 第14回 様々な文章に接し、表現への意識を高める
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

平常点（授業中の課題への取り組みも含む）100%

■ 教 科 書

授業中に配布するプリントを用いる。

■ 参 考 書

必要に応じて授業中に紹介する。

■ 留 意 事 項

授業科目	論理学	担当者	辻 虎志		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

大学の講義やゼミでは、レポート・意見の発表・ディベート・卒業論文などが課されます。この講義では、こうしたこと全体に必要な「考える」技術、および「読む・書く」技術の習得を目指します。特に、この「論理学」では、①問題解決に必要な資料や文献を分析し、それらを活用して発信する技術（コミュニケーション・リテラシー）と、②文章作成に関わるより実践的な技術や知識、つまり「論証のテクニック」といった論理的で説得力のある文章を書くためのスキル（ロジカル・コミュニケーション）を身につけることが目標となります。

■ 目 標

現代社会において、どのような仕事もコミュニケーションなくしては成り立ちません。将来社会人になった際、友人・知人・上司・部下・同僚と、実に様々な相手とのコミュニケーションが必要になってきます。こうした多様な相手にたいして、自分の考えを分かりやすく伝え納得してもらい、実行を意思決定してもらうことが今まで以上に求められるようになります。この講義で紹介する技術は、大学生活を有効に使うために役立つのはもちろんのこと、将来社会人となっても、自分自身の問題解決のためや、社会に貢献するために役立つでしょう。

■ 授 業 計 画

- 第1回 はじめに
- 第2回 「メッセージ」とは何か
- 第3回 「メッセージ」を見抜く (1) — 内田樹を読む
- 第4回 「メッセージ」を見抜く (2) — 村上龍を読む
- 第5回 「メッセージ」を作る
- 第6回 「要約」とは何か
- 第7回 論理的な文章を書こう — 論文・レポートの「形」
- 第8回 わかりやすい文章を書くために (1) — 接続詞
- 第9回 わかりやすい文章を書くために (2) — パラグラフ・ライティング
- 第10回 思考の整理術 — MECE と So What? / Why So?
- 第11回 説得力を上げるために (1) — 論証とは何か
- 第12回 説得力を上げるために (2) — 妥当な論証形式（演繹）
- 第13回 説得力を上げるために (3) — ちょっと弱い論証形式（帰納など）
- 第14回 注の付け方、引用・参考文献の挙げ方
- 第15回 論文・レポートを書いてみよう

■ 評 価 方 法

平常点：30%（出席点・課題を含む）、筆記テスト：70%

■ 教 科 書

特になし

■ 参 考 書

特になし

■ 留 意 事 項

特になし

授業科目	人間関係学	担当者	吉富 千恵		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

人間関係とは、すなわち「対人コミュニケーション」に他ならない。普段何気なく行なっているコミュニケーションの構造、機能、影響について説明する。また実践的なコミュニケーションスキルを習得するべく、ワーク形式を取り入れた講義を行なう。

■ 目 標

対人援助職にとって必要なコミュニケーションスキルを、具体的な事例を通して習得することを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コミュニケーション論とは
- 第2回 コミュニケーションの構造と機能
- 第3回 非言語的コミュニケーションの理解①
- 第4回 非言語的コミュニケーションの理解②
- 第5回 アクティブリスニング
- 第6回 受容と共感
- 第7回 コミュニケーションスキル①
- 第8回 コミュニケーションスキル②
- 第9回 リーダーシップ
- 第10回 人間関係
- 第11回 会話分析
- 第12回 他者からみた自分
- 第13回 自己開示
- 第14回 自他の肯定
- 第15回 総まとめ

■ 評 価 方 法

平常点（40％）：出席、受講態度、提出物により評価
試験（60％）Ⅰ

■ 教 科 書

特に指定しない

■ 参 考 書

適宜、紹介します

■ 留 意 事 項

以下の項目を守れる学生は、受講してください。

- ①授業中は静かに話を聞くこと、②意見を求められた際には発言すること、③ワークに取り組むこと

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学	担当者	山口 忍・森岡 悦子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前半では、リハビリテーションにおけるコミュニケーション技術について学ぶ。後半では、コミュニケーション障害を生じる失語症、認知症、右半球損傷、脳外傷についての障害メカニズムと症状を理解し、障害理解に基づいたコミュニケーション方法について学ぶ。

■ 目 標

リハビリテーションの臨床場面において、臨床的なコミュニケーション態度がとれ、患者および家族と対話ができるようになることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーションにおける「聴く」とは、どういうことか
- 第2回 リハビリテーションにおける「声をかける」とはどういうことか
- 第3回 リハビリテーションにおける「話す」とはどういうことか
- 第4回 クリアスピーチの演習
- 第5回 障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことば、悲しかったことばの抽出
- 第6回 障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことばのまとめ（脳の本能）
- 第7回 相手の顔を見ることが、応答性について（発達から考える）
- 第8回 障害をもつ方々とその家族とのコミュニケーションについて
- 第9回 失語症のコミュニケーション障害について（1）
失語症の発症メカニズムと症状を理解する。
- 第10回 失語症のコミュニケーション障害について（2）
失語症の症状に基づき、適切なコミュニケーションがとれるようになる。
- 第11回 認知症のコミュニケーション障害について（1）
認知症の症状を理解し、簡単な評価ができるようになる。
- 第12回 認知症のコミュニケーション障害について（2）
評価に基づき、適切なコミュニケーションがとれるようになる。
- 第13回 脳外傷・右半球損傷のコミュニケーション障害について（1）
障害の症状や特徴を学び、社会参加における問題について考察できるようになる。
- 第14回 脳外傷・右半球損傷によるコミュニケーション障害について（2）
症状を理解し、医療従事者として良好な対応ができ、適切なコミュニケーションがとれるようになる。
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

前半のレポート40%、後半の小テストとレポート40%、出席20%

■ 教 科 書

なし

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	心理学	担当者	鈴木 暁子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

心理学は人間の心や行動を客観的に理解する為の学問である。人間の心というブラックボックスを科学的に解き明かしていく心理学の研究方法は、私たちの身の回りの事象を客観的に理解する事にも役立つ。この広く深い学問の魅力をできる限り伝えたい。

■ 目 標

人を援助する職業に必要な人間理解の糸口となる心理学の基礎知識を学習するとともに、国家試験科目である臨床心理学の基礎となる知識も身につける事を目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理学とは何か①
- 第2回 心理学とは何か②
- 第3回 人の性格①
- 第4回 人の性格②
- 第5回 知能と記憶①
- 第6回 知能と記憶②
- 第7回 学習①
- 第8回 学習②
- 第9回 動機づけと情動①
- 第10回 動機づけと情動②
- 第11回 動機づけと情動③
- 第12回 社会の中の人①
- 第13回 社会の中の人②
- 第14回 人と音楽
- 第15回 心理学まとめ

■ 評 価 方 法

期末試験70% 提出課題20%、出席・授業態度10%

■ 教 科 書

改訂版 はじめて出会う心理学 長谷川寿一 他著 有斐閣アルマ

■ 参 考 書

「心理学概論」 山内弘継・橋本宰監修 ナカニシヤ出版

■ 留 意 事 項

授業科目	言語学	担当者	松井 理直		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

「ことば」とは何か、コミュニケーションとは何か、自閉症に見られるコミュニケーションとはどういうものかといった疑問を通して、「人のこころのあり方」を学ぶ。

■ 目 標

「ことばの意味」を具体的に考えられるようになること、コミュニケーション障害について理解を深める事が授業の目標です。

■ 授 業 計 画

- 第1回 ことばとは何か。
- 第2回 論理学の復習。
- 第3回 ことばと論理の関係。
- 第4回 「こころの理論」について。
- 第5回 論理では捉えられない「ことば」の意味。
- 第6回 [実習]「ことば」とはどういうものか。
- 第7回 [実習]「こころ」とはどういうものか。
- 第8回 [実習] ことばはどのように理解されているか。
- 第9回 [実習] 音声から直接生起するイメージ (1)
- 第10回 [実習] 音声から直接生起するイメージ (2)
- 第11回 ことばとコミュニケーション。
- 第12回 ことばと社会性。
- 第13回 「ことば」から見た自閉症 (1)
- 第14回 「ことば」から見た自閉症 (2)
- 第15回 授業の総復習。

■ 評 価 方 法

出席点：10% 授業中の課題（発表・議論等を含む）：50% 最終テスト：40%

減点対象：授業中の私語、無断退席等、授業を妨害する行為に対し、1回の注意につき大幅な減点を行う。

■ 教 科 書

使用しない。プリントを配布する。

■ 参 考 書

「ことばの科学ハンドブック」（研究社）ほか、適宜授業中に紹介する。

■ 留 意 事 項

分からない点があれば、すぐその場で質問をすること。積極的な授業参加を望む。

授業科目	情報処理学	担当者	宮本 頼和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ① ネットワークコンピュータの基本的な仕組みの理解と操作習得
- ② Office を中心とした各種アプリケーションの操作習得と応用
- ③ インターネットの理解と活用
- ④ コンピュータセキュリティの理解と実際

■ 目 標

- ① ネットワークコンピュータの基本的な仕組みの理解と操作習得
自身でネットワーク接続の設定ができる。
コンピュータの仕様をある程度理解して購入等に際して有効に活用できる。
- ② Office を中心とした各種アプリケーションの操作習得と応用
ワープロ等を駆使して論文やプレゼン資料等の作成がスムーズにできる。
- ③ インターネットの理解と活用
インターネットを使用したデータ共有やインターネットメール、moodle を自由に使いこなす。
インターネットがプライバシーに及ぼす影響を理解して適切な行動や対応を行う。
- ④ コンピュータセキュリティの理解と実際
ウィルスや防御ソフトやファイアウォールの設定が正しくできる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 パソコンの操作とネットワーク接続（コンピュータと OS、TCP/IP、周辺機器の概要）
OS がないと何が困るの
- 第2回 Office・Word 入門（基本操作と簡単な文書の作成）
メールアクセス方法とパスワードの変更
メールアドレスの秘密
- 第3回 Office・Word の活用①（IME、作業を効率化するリボン、ファイル形式）
Moodle 操作（学生ログイン方法）と活用
スマートフォンは携帯電話と何が違う
- 第4回 Office・Word の活用②（目次作成機能・印刷）
RFC、@、SMTP
- 第5回 Office・Excel による初めてのブック作成（基本操作と簡単なブックの作成）
無線 LAN と学内無線 LAN（WiFi）の設定
- 第6回 Office・Excel を活用する（リボン・計算・参照・関数）
マウスでクリック・パソコン操作を容易にしたインターフェース（GUI、USB、ユニバーサルデザイン）
- 第7回 Office・Excel のピボットテーブルとグラフの作成（ピボットテーブルの活用とグラフの作成・変更・基本的な用語）
動画配信の秘密（onDemandCDNcompress）
- 第8回 Office・Excel を活用する（罫線、マクロ、印刷）
インターネットはなぜ話し中にならないの（パケット、TCP/IP、分散型ネットワーク）
- 第9回 OfficeSystem のセキュリティ機能
携帯電話が移動してもつながるのはなぜ（ハンドオーバー、CDMA、移動体通信）
- 第10回 Office・PowerPoint による初めてのプレゼンテーション作成と活用（スライド作成、画像他のコンテンツ挿入、テーマ、配布・印刷、スライドショー、ファイル形式）
世界最大の百科事典ウィキペディアの秘密
- 第11回 Office・PowerPoint による高度なプレゼンテーション作成と活用①（スライドレイアウト、テーマのカスタマイズ）
タダでテレビ会議ができるわけ
- 第12回 Office・PowerPoint による高度なプレゼンテーション作成と活用②（SmartArt、サウンド効果）
切れると困る！インターネット安定化の秘密
- 第13回 Office・Outlook の機能と活用（インターネットメール、予定表、連絡先、仕事）
メールは盗み見られないのか（暗号化、公開鍵暗号、クラック）
- 第14回 その他の Office ツール（Access、OneNote、InfoPath、クリップオーガナイザ）
クラウドコンピューティング
- 第15回 インターネットの活用とセキュリティ（ファイアウォール、アンチウィルス、検索他）
Bot、CCC、Filtering

■ 評価方法

定期試験の実施結果で評価する

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	医療情報学	担当者	星 雅丈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

現代の保健・医療・福祉の分野において ICT の活用は必須となっており、将来、医療・福祉現場で働く者として、最低限習得が必要とされる基礎知識がある。本講義では医療情報システムが現場で如何に利用されているかについて解説し、さらに今後の調査研究活動に必要なデータ解析の基礎知識についても講義する。

■ 目 標

- ・ ICT の活用に必要な基礎知識を修得する。
- ・ 医療情報システムが実際にどのように利用されているかを理解する。
- ・ 調査研究におけるデータ解析の基礎知識について学ぶ。

■ 授 業 計 画

- 第1回 情報学（Ⅰ） 情報の表現と処理について
- 第2回 情報学（Ⅱ） ネットワーク技術について
- 第3回 医療情報システム（Ⅰ） オーダーエントリーシステムについて
- 第4回 医療情報システム（Ⅱ） 電子カルテシステムについて
- 第5回 医療情報システム（Ⅲ） 医用画像システムについて
- 第6回 医療情報システム（Ⅳ） リハビリテーション関連情報システムについて
- 第7回 医療情報システム（Ⅴ） 医療ネットワークシステムについて
- 第8回 医療情報の倫理 情報倫理・関係法規について
- 第9回 医療統計（Ⅰ） 医療評価指標について
- 第10回 医療統計（Ⅱ） 尺度と度数分布・基本統計量について
- 第11回 医療統計（Ⅲ） 仮説検定について
- 第12回 調査研究（Ⅰ） 精度と真度について
- 第13回 調査研究（Ⅱ） コホート研究とケースコントロール研究について
- 第14回 調査研究（Ⅲ） 因果関係について
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

出席状況・出席態度・小テスト等により総合的に判定する。

■ 教 科 書

適宜資料を配布

■ 参 考 書

医療情報 医療情報システム編（第2版） 日本医療情報学会編集 篠原出版新社
医療情報 情報処理技術編（第2版） 日本医療情報学会編集 篠原出版新社

■ 留 意 事 項

授業の進捗状況により授業計画を適宜変更することがある。

授業科目	医療情報学	担当者	周藤 俊治		
学 科 名		学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

現代の保健・医療・福祉の分野において欠かせない ICT の活用に必要な基礎知識として①デジタルデータがどのように発生しネットワーク上を流れているのか、②医療機関にどのようなシステムが導入・利用されているのか、③情報の収集や活用に関して講義を行なう。

■ 目 標

医療に関する情報がどのように発生し記録・活用されているのか、ICT の発展により医療環境がどのように変わったのか理解する力と、これからの技術の進展や医療環境の変化に対応して最適な医療環境の構築に向けて発想する力を身につけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 情報学（Ⅰ）情報の表現と処理について
- 第2回 情報学（Ⅱ）ネットワーク技術について
- 第3回 保健医療情報システム（Ⅰ）電子カルテについて
- 第4回 保健医療情報システム（Ⅱ）オーダーエントリーシステムについて
- 第5回 保健医療情報システム（Ⅲ）医用画像システムについて
- 第6回 保健医療情報システム（Ⅳ）医療ネットワークシステムについて
- 第7回 医療統計（Ⅰ）尺度・度数分布について
- 第8回 医療統計（Ⅱ）代表値・散布度について
- 第9回 医療統計（Ⅲ）評価指標について
- 第10回 医療統計（Ⅳ）仮説検定について
- 第11回 評価・検査・測定（Ⅰ）精度と妥当性について
- 第12回 評価・検査・測定（Ⅱ）効果判定について
- 第13回 調査研究（Ⅰ）コホート研究とケースコントロール研究について
- 第14回 調査研究（Ⅱ）因果関係について
- 第15回 医療情報の倫理 医の倫理・情報の倫理・関連法規について

■ 評 価 方 法

筆記試験及び授業への参加状況より総合的に判断する。

■ 教 科 書

適宜資料を配布する

■ 参 考 書

医療情報医療情報システム編 日本医療情報学会編集（篠原出版社）
医療情報情報処理技術編 日本医療情報学会編集（篠原出版社）

■ 留 意 事 項

授業の進捗状況により授業計画を適宜変更することがある。
<http://www.medbb.net> に講義情報を掲載しています

授業科目	統計学	担当者	武川 公		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

実際のデータ処理に役立つ統計学を行いたい。そのため数学的厳密さは必要最小限とする。
離散確率過程のみを取り扱い、問題を解くことによって内容を理解させる。

■ 目 標

実験、現場などにおいて得られるデータをどのように処理すればよいかの実際を学ぶ。

■ 授 業 計 画

- 第1回 確率と統計
- 第2回 統計学の基礎 1
- 第3回 統計学の基礎 2
- 第4回 統計学の基礎 3
- 第5回 相関係数、回帰直線演習 (1)
- 第6回 相関係数、回帰直線演習 (2)
- 第7回 統計学の基礎 4
- 第8回 中心極限定理演習
- 第9回 統計学の基礎 5
- 第10回 正規検定演習 (1)
- 第11回 正規検定演習 (2)
- 第12回 t 検定演習 (1)
- 第13回 t 検定演習 (2)
- 第14回 区間推定演習
- 第15回 予備

■ 評 価 方 法

筆記試験 (約80%)、出席状況 (約20%) を総合的に評価する。

■ 教 科 書

プリント講義

■ 参 考 書

概説確率統計 [第2版]、前園宣彦、サイエンス社

■ 留 意 事 項

授業科目	文学	担当者	蘆田 耕一		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

平安時代の短編物語の『堤中納言物語』を読みます。10編から成ります。おのこの作品は小品ですが、なかなか味わいのあるものばかりです。10編のうち、「このついで」「貝合」「花桜折る少将」を取り上げます。

■ 目 標

短編物語ですので、話の内容は簡単ですが、どういう点がおもしろいのかをまず理解することです。また、物語には必ず和歌を伴います。和歌が物語の中でどのように機能しているのかを理解することです。

■ 授 業 計 画

第1回 平安時代および物語の概要
第2回 「このついで」①
第3回 「このついで」②
第4回 「このついで」③
第5回 「このついで」まとめ
第6回 「貝合」①
第7回 「貝合」②
第8回 「貝合」③
第9回 「貝合」④
第10回 「貝合」まとめ
第11回 「花桜折る少将」①
第12回 「花桜折る少将」②
第13回 「花桜折る少将」③
第14回 「花桜折る少将」まとめ
第15回 『堤中納言物語』のまとめ

■ 評価方法

出席点（20％。無断欠席や遅刻はマイナス評価）、筆記試験（80％）で評価する。

■ 教 科 書

なし。プリントを配付する。

■ 参 考 書

なし。

■ 留 意 事 項

特になし。

授業科目	教育学	担当者	加藤 啓一郎		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

本人の主体性の尊重、関係性の重視という視点に立って、発達、成長の過程を捉えなおし、教育的な働きかけについて実践研究を通して検討する

■ 目 標

教育についての問題を、社会とのかかわりの中で捉えなおすことを通して、医療関係者に必要とされる教育学的思考や手法を身につけることを目的とする

■ 授 業 計 画

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 主体性、関係性の重視と教育
- 第3回 生涯発達の視点と障害について1
- 第4回 生涯発達の視点と障害について2
- 第5回 生涯発達の視点と障害について3
- 第6回 生涯発達の視点と障害について4
- 第7回 生涯発達の視点と障害について5
- 第8回 教育における主体性の問題を捉えなおす
- 第9回 家族、地域の問題について
- 第10回 実践的検討1
- 第11回 実践的検討2
- 第12回 実践的検討3
- 第13回 実践的検討4
- 第14回 実践的検討5
- 第15回 これからの課題

■ 評価方法

レポート100%

■ 教 科 書

--

■ 参 考 書

--

■ 留 意 事 項

--

授業科目	法学概論	担当者	家 正治		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

「社会あるところに法あり」と言われるが、他規範に対する法規範の特徴を把握し、今日の国内法および国際法が当面する主要問題および諸課題を考察する。

■ 目 標

本講義を通じて、国内社会における「人の支配」に対する「法の支配」また国際社会における「力の支配」に対する「法の支配」を理解して、「法的ものの考え方」に接近する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 法学を学ぶにあたって
- 第2回 法とは何か
- 第3回 法の発展と法の体系
- 第4回 近代国家と憲法
- 第5回 日本国憲法と国民主権主義
- 第6回 日本国憲法と基本的人権尊重主義
- 第7回 日本国憲法と平和主義
- 第8回 日本国憲法と権力分立
- 第9回 法と裁判
- 第10回 国内法と国際法
- 第11回 戦争の違法化と安全保障
- 第12回 人民の自決権とその発展
- 第13回 国際人権保障とその発展
- 第14回 地球環境の保護とその発展
- 第15回 国内社会・国際社会と「法の支配」

■ 評 価 方 法

筆記試験（100％）

■ 教 科 書

末川博編『法学入門〔第6版〕』有斐閣

■ 参 考 書

家正治他共著『国際紛争と国際法』嵯峨野書院

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学の努力を望みます。

授業科目	国際社会と日本	担当者	家 正治		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

国際社会の構造の特徴を踏まえ、現代国際社会に山積みしている全人類的課題のいくつかをとり上げながら、その中で占める日本の位置と関わりについて考察する。

■ 目 標

国際社会の構造や実態を知り、国際社会を規律している原則や規範を理解するとともに、国際社会における日本の役割について理解できるようにする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 国際社会の成立と近代国際社会
- 第2回 国際社会の発展と現代国際社会
- 第3回 国際社会を動かす主要なアクター
- 第4回 戦争の違法化と国際紛争の平和的解決
- 第5回 勢力均衡政策から集団安全保障へ
- 第6回 平和維持活動（PKO）の位置と役割
- 第7回 軍縮の現状と阻害要因
- 第8回 日米安全保障体制の展開
- 第9回 先進国と発展途上国をめぐる国際経済問題①
- 第10回 先進国と発展途上国をめぐる国際経済問題②
- 第11回 人権の国際的保障とその発展①
- 第12回 人権の国際的保障とその発展②
- 第13回 難民問題とその庇護・保護
- 第14回 地球環境保護と国際協力
- 第15回 今後の国際社会と日本

■ 評 価 方 法

筆記試験（100％）

■ 教 科 書

家正治編『新版国際関係』世界思想社

■ 参 考 書

家正治・小畑郁・桐山孝信編『国際機構〔第四版〕』世界思想社』

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学の努力を望みます。

授業科目	物理学	担当者	(非常勤)		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

力学と電磁気学分野の演習を中心に学び、医療機器の基本的取り扱いにも触れる。

■ 目 標

革新的リハビリテーション技術の開発が出来る人材を育成するために、物理的における課題解決と研究開発のスキーマを習得させる。

医療系専門科目への移行をスムーズにさせる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 物理学の発想と方法 (P.1～14)
- 第2回 ベクトルと力のつり合い (P.15～19)
- 第3回 運動の解析 (P.19～24)
- 第4回 力と運動の法則 (I) (P.24～28)
- 第5回 力と運動の法則 (II) (P.28～34)
- 第6回 運動量とエネルギー (P.35～42)
- 第7回 モーメントと応力、回転運動 (P.42～55)
- 第8回 流体とまとめの問題 (P.189～200)
- 第9回 熱とエネルギー (P.175～188)
- 第10回 音と聴覚 (P.137～152)
- 第11回 電気力と電場 (P.59～79)
- 第12回 電場のエネルギー (P.71～80)
- 第13回 コンデンサー (P.81～94)
- 第14回 電流回路 (P.95～110)
- 第15回 電流と磁気、医療への応用 (P.111～136)

■ 評 価 方 法

試験70%、提出課題30%

■ 教 科 書

生命科学のための基礎シリーズ 物理

■ 参 考 書

実教「基礎物理」1, 2

講談社「新版 理工系のための力学の基礎」「新版理工系のための電磁気学の基礎」

■ 留 意 事 項

授業科目	生物学	担当者	林 研		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

動物を中心に、生物の成り立ちと生命現象の基本原理について学ぶ。

■ 目 標

「生きている」ことをシステムとして理解し、体と健康について幅広く知ること目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 生物とは何か
- 第2回 細胞（1）細胞の構造
- 第3回 細胞（2）分裂と分化
- 第4回 特殊な細胞（1）幹細胞
- 第5回 特殊な細胞（2）神経と筋
- 第6回 遺伝子（1）遺伝の法則
- 第7回 遺伝子（2）DNA と遺伝子
- 第8回 遺伝子（3）タンパク質の合成
- 第9回 代謝（1）酵素と物質の代謝
- 第10回 代謝（2）エネルギー代謝
- 第11回 代謝（3）生態系の物質循環
- 第12回 生体の維持（1）ホルモンと自律神経
- 第13回 生体の維持（2）免疫
- 第14回 バイオテクノロジーと生命倫理
- 第15回 まとめと復習

■ 評価方法

出席10%、小テスト20%、期末試験70%

■ 教 科 書

『ZERO からの生命科学』 木下勉、小林秀明、浅賀宏昭 著 南山堂

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	生活科学（福祉住環境論）	担当者	山田 隆人		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

OT・PTの職能の一つとして、生活活動の支援が存在する。環境因子である居住環境を改善することで、生活活動の改善を行う方法がある。本講義では、居住環境の改善に関連する制度や施策、関連する職能との連携を行う為の基礎知識を学びます。

■ 目 標

高齢者や障害者の暮らしの状況を理解する
障害の特性を理解し、環境支援の方法を理解する

■ 授 業 計 画

第1回 高齢者を取り巻く社会状況と住環境
第2回 介護保険制度の概要
第3回 高齢者向けの住宅施策の変遷と概要
第4回 障害者を取り巻く社会状況と住環境
第5回 障害者福祉施策の概要、障害者向けの住宅施策の変遷と概要
第6回 高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備1 脳血管障害1
第7回 高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備2 脳血管障害2
第8回 高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備3 脊髄損傷1
第9回 高齢者に多い疾患別に見た福祉住環境整備4 脊髄損傷2
第10回 住環境整備とケアマネジメント
第11回 福祉住環境整備の進め方
第12回 福祉住環境整備の共通基本技術1
第13回 福祉住環境整備の共通基本技術1
第14回 住居改善の実例
第15回 まとめ

■ 評価方法

定期テスト10割で判定します。
講義の欠席は、原点対象とします。

■ 教 科 書

改訂版 福祉住環境コーディネーター検定試験 2級 公式テキスト 東京会議所編（2011年発行）

■ 参 考 書

OT・PTのための住環境整備論 三輪書店

■ 留 意 事 項

出席の代筆等不正行為があった場合は、相当の対処を行います。
講義のまとめ用紙等提出物の作成する場合があります。
受講時は学生証を必ず携帯すること。他の学生の迷惑になる行為は慎むようにして下さい。
外部講師の依頼を予定しています。その為、講義日程や内容を変更する場合があります。
15回の講義では、教科書すべての内容を網羅することはできません。検定試験を受ける予定の方への対応は、別途で行う予定です。

授業科目	自然科学概論	担当者	岡本 摩耶		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

環境・エネルギー・健康をテーマに、幅広い自然科学の知識について分かりやすく解説する。

■ 目 標

身近な環境問題や健康被害についての理解を深め、その原因と対策について考察できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 「宇宙船地球号」と危機に直面する地球環境
- 第2回 地球環境の生い立ち
- 第3回 生態系
- 第4回 エネルギー問題 1
- 第5回 エネルギー問題 2
- 第6回 放射線の利用と環境・健康問題
- 第7回 大気汚染と酸性雨
- 第8回 地球の温暖化
- 第9回 オゾン層破壊と健康
- 第10回 騒音と健康
- 第11回 地震と環境
- 第12回 水質汚濁と健康
- 第13回 環境ホルモンと健康
- 第14回 廃棄物とリサイクル
- 第15回 研究発表会・演習

■ 評 価 方 法

出席（20%）、レポート（20%）、研究発表（20%）、試験（40%）の総合評価

■ 教 科 書

適宜講義資料を配布する

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	栄養学	担当者	野田 康子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

幅広い栄養学の分野の中で、栄養素栄養学・ライフステージ別の応用栄養学と生活習慣病を中心とした臨床栄養学を学ぶ。また、自分の食事を記録して評価していく。

■ 目 標

『食べる』ことは疾病の回復や治療の上で重要な要素となるだけでなく、精神面にも大きく貢献する。栄養指導の事例を紹介しながら『食』の重要性を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 『栄養』の概念
- 第2回 基礎栄養学；三大栄養素とエネルギー代謝①
- 第3回 基礎栄養学；三大栄養素とエネルギー代謝②
- 第4回 基礎栄養学；微量栄養素とその代謝
- 第5回 基礎栄養学；食品と栄養素 消化と吸収
- 第6回 栄養アセスメント；食事記録の評価①
- 第7回 栄養アセスメント；食事記録の評価②
- 第8回 応用栄養学；乳幼児から学童期
- 第9回 応用栄養学；特に食物アレルギー
- 第10回 応用栄養学；思春期から成人期・高齢期
- 第11回 臨床栄養学；糖尿病
- 第12回 臨床栄養学；脂質異常症・高血圧
- 第13回 臨床栄養学；メタボリックシンドローム
- 第14回 栄養指導と栄養管理①
- 第15回 栄養指導と栄養管理② まとめ

■ 評 価 方 法

試験；80％ 提出課題；20％

■ 教 科 書

ヌーヴェルヒロカワ；わかりやすい栄養学 ～臨床・地域で役立つ食生活指導の実際～

■ 参 考 書

日本食品標準成分表2010 ⇒ 現在改訂作業中と思われます。(来年度には発売される予定)

■ 留 意 事 項

授業科目	基礎ゼミナール	担 当 者	専任教員（多数）		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

医療人としての基本的資質，チーム医療，療法士としての将来像，対象者の理解，研究方法，プレゼンテーション方法，論文の書き方などについて，グループディスカッションを中心に学ぶ。

■ 目 標

1. 医療人の倫理観や構えを学び，かつ，自分の将来像をイメージし，学習意欲を高める。
2. 他者の意見を理解する能力，自分の考えを整理して表現する能力，問題解決能力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力を高める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 合同講義；大阪保健医療大学の学び
 第2回 第1回の講義内容についてディスカッションすることで理解を深める。
 第3回 合同講義；医療者のコミュニケーション技能（山口教授）
 第4回 第3回の講義内容についてディスカッションすることで理解を深める。
 第5回 合同講義；チーム医療（石倉教授）
 第6回 第5回の講義内容についてディスカッションすることで理解を深める。
 第7回 合同講義；リスク管理（福山講師）
 第8回 第7回の講義内容についてディスカッションすることで理解を深める。
 第9回 入学前教育で読んだ本を基に「障害と人生（生活）；障害によって失うものと得るもの」をテーマに，障害者やその周りの人（家族）の両者の視点からディスカッションし，障害に対する理解を深める。
 第10回 入学前教育で読んだ本を基に「患者や家族が求めるリハビリテーションとは」をテーマに，障害者や家族の視点から考え，リハビリテーションにおける支援についてディスカッションする。
 第11回 テーマ「自分が目指す療法士とは」についてのディスカッション
 第12回 テーマ「自分が目指す療法士になるために必要なことは」についてのディスカッション
 第13回 発表会（プレゼンテーション）の準備；第11,12回のディスカッションの内容をまとめて，発表会の準備（発表原稿とパワーポイントの作成，役割決めなど）をする。
 第14回 発表会（1～7グループ）
 発表時間；1グループ10分（発表7分，質疑応答3分）
 第15回 発表会（8～13グループ）
 発表時間；1グループ10分（発表7分，質疑応答3分）
 第16回 合同講義；リハビリテーション分野における研究（阿部教授）
 第17回 研究計画の立案（その1）
 各グループで研究計画書の書式や内容を調べる。研究テーマを出し合い，決定する。
 第18回 研究計画の立案（その2）
 決定した調査・研究テーマについての目的や方法を検討する。
 第19回 研究計画書の作成
 研究計画書を書式に基づいて作成し，担当教員の指導を受ける。
 第20回 調査・研究の実施1 研究計画に従って実施する（情報やデータの収集）。
 第21回 調査・研究の実施2 研究計画に従って実施する（情報やデータの収集）。
 第22回 調査・研究の実施3 研究計画に従って実施する（結果の整理）。
 第23回 調査・研究の実施4 研究計画に従って実施する（結果のまとめ）。
 第24回 調査・研究の実施5 研究計画に従って実施する（考察）。
 第25回 調査・研究報告書作成（その1）
 発表会に備えて，調査・研究で知り得たことを論文形式にまとめる。
 第26回 発表会（プレゼンテーション）の準備（その1）
 前回の調査・研究報告書作成を基に，発表原稿とパワーポイントの作成をして，役割を決める。
 第27回 発表会（プレゼンテーション）の準備（その2）
 発表原稿とパワーポイントの作成，デモンストレーション，
 第28回 調査・研究発表会（1～7グループ） 発表時間；1グループ10分（発表7分，質疑応答3分）
 第29回 調査・研究発表会（8～13グループ） 発表時間；1グループ10分（発表7分，質疑応答3分）
 第30回 調査・研究報告書作成・提出（その2）
 各グループでの調査・研究を所定の書式（論文形式）にまとめて提出する。

■ 評価方法

出席状況，受講態度，レポート，発表などを総合して評価する．ペーパー試験は行わない．

■ 教科書

なし．

■ 参考書

グループによって，参考書を推薦することがある．

■ 留意事項

8名前後のグループワークにより進行するため，他人任せにすることなく，主体的かつ積極的に参加すること．

評価は各講義の出席状況，受講態度を中心とした1年間の平均で，再試験は実施しない．よって，欠席すればその講義は零点となるので注意すること．

授業科目	医の倫理 (医療倫理学・生命倫理学)	担当者	浦上 秀一		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内容と目標

「介護職による吸引作業」が行われるようになった。医療システムに関わる専門職の在り方は、社会システムの変化と共に変容している。リハビリテーション科にも気道吸引の作業が加わろうとしている。あなたは他の職種との協働において、患者との立ち位置を、専門家としての自分で決めてゆかねばならない時代にいる。

その変容の中心には、一昔前のパターナリズムが暗黙の了解であった医療領域が、インフォームド・コンセントの原則の確立、すなわち「患者の権利」を中核とした新しい関係構造で置き換わろうとしていることを示している。医療に関わる専門職は、現存する法文上の制約に縛られながら、より納得できる合理的な人間社会の医療の提供を求められ続ける。多職種のコメディカルとの協業なく医療の提供は不可能である。それぞれの専門職は、決められた業務だけを、マニュアルに則って行う作業員中心の在り方では不十分である。多様なチーム医療の効率的、合理的な協働が不可欠である。医療者－患者関係モデルを創造してゆくことが求められている。

具体的な事例を考えてみよう。

- ・卒業後にすぐに関わり合う高齢者医療の一面である。一義的には余命の改善にはつながらないが、QOL改善に関わると考えられる例に、人工関節置換術がある。歩行訓練を担当している患者さんから、手術の適応について相談を受けた。

- ・認知症が進行している患者さんがいる。経口摂取が次第にお世話にくく、感じられるようになってきた。胃瘻造設して経管栄養を奨めることも、選択肢として考えられるが、患者さんにとって受け入れられケアの選択肢か？

あなたは余命と QOL の改善の面から、どの様に比較・評価して意見をのべるか。その合理的説明の基盤となる知識や考え方を医療倫理の講座に参加し、ディスカッションの中で培うことが目標である。

■ 授業計画

第1回 日常診療の記録（診療録、カルテ等）は、誰のものか？遺族が、生前の治療に不満を訴えて、診療録の開示を求めてきた、拒否できるのか？

第2回 臨床倫理と倫理的問題と倫理意識について

第3回～第15回 以降：医療倫理の四原則、ジョンセンらの四分割表、守秘義務、臨床実験や治験、安楽死、臓器移植、などをテーマとしてインフォームド・コンセントが確立されつつある歴史も考えたい。

■ 評価方法

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	スポーツ医学	担当者	中村 憲正		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

スポーツ医学の急性および慢性の内科的・整形外科的疾患について学ぶ。スポーツ選手の健康管理、トレーニングによる生理的適応現象、トレーニングによる病的現象、外傷、スポーツによる内科的・整形外科的障害とその対策。生活習慣病、フィットネスについて知識を得る。

■ 目 標

スポーツ活動の場において、医療スタッフ、教育者、指導者として必要なスポーツ医学の知識を体得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 スポーツ医学概論 スポーツと健康、エイジングについて学ぶ
- 第2回 運動の生理、病理学 力学刺激による生体反応を学ぶ
- 第3回 スポーツ障害総論1 内科的なスポーツ障害について学ぶ
- 第4回 スポーツ障害総論2 外科的なスポーツ障害について学ぶ
- 第5回 部位別スポーツ障害 頭頸部・体幹
- 第6回 部位別スポーツ障害 上肢
- 第7回 部位別スポーツ障害 下肢
- 第8回 アンチドーピング
- 第9回 スポーツにおけるメディカルサポートシステムの構築 その理論と実際
- 第10回 フィジカルトレーニングの理論と実践 その最先端を学ぶ
- 第11回 アスレティックトレーナーとは
- 第12回 スポーツ現場とスポーツ医学1 スポーツ現場で発生しやすいスポーツ医学的問題について学ぶ。
- 第13回 スポーツ現場とスポーツ医学2 スポーツ現場におけるコンディショニングについて学ぶ。
- 第14回 スポーツと栄養
- 第15回 予備日

■ 評 価 方 法

試験 100%

■ 教 科 書

1. 新板スポーツ外傷・障害の理学診断・理学療法ガイド 編集 臨床スポーツ医学編集委員会 文光堂
2. アルレティックリハビリテーションガイド 競技復帰・再発予防のための実践的アプローチ 編集 福林 徹 文光堂

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	リハビリテーション概論	担当者	佐藤 秀紀		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本授業では、リハビリテーションに対する理解と正しい知識をもって各専門分野に活用できるようにする。

■ 目 標

リハビリテーション本来の理念を歴史的背景から理解でき、その上でリハビリテーション医療の対象や治療手段について基本的な知識を深めるようにする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーションの理念
- 第2回 リハビリテーションの諸段階
- 第3回 リハビリテーションの過程
- 第4回 障害の種類とその様相
- 第5回 障害と障害分類
- 第6回 高齢障害者の現状
- 第7回 高齢者の身体的特徴
- 第8回 高齢者の機能障害
- 第9回 高齢者の心理的特徴
- 第10回 障害と心理
- 第11回 障害の受容とノーマライゼーション
- 第12回 障害者とリハビリテーション
- 第13回 発達と発達障害
- 第14回 地域におけるリハビリテーション
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

小テスト50%、学期末試験 50%

■ 教 科 書

特に指定しない。必要な資料はその都度配布する。

■ 参 考 書

中村隆一編『入門 リハビリテーション概論』 医歯薬出版 2008

■ 留 意 事 項

授業科目	リハビリテーション医学	担当者	阿部 和夫		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーション医学の講義では、リハビリテーション医学の目的である、「障害を持つ人々を身体的、精神的、社会的、経済的にできる限り自立させる」ことをどのように達成したら良いのかを考える機会を受講者に提供したいと思います。講義を参考にして、リハビリテーションに対する自分の考えを持つことができ、理学療法士あるいは作業療法士を目指すための明確な動機付けができることを期待します。前半では概論、後半では各論を講義します。

■ 目 標

理学療法士および作業療法士としての臨床活動に最低限必要なリハビリテーション医学の知識を習得します。後半では、疾患の基礎的な概念についても概説します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーションとは（リハビリテーションの定義、目的）
- 第2回 疾病と障害について
- 第3回 リハビリテーションにおける障害の評価（障害の捉え方）
- 第4回 心理学（神経心理学、臨床心理学、など）とリハビリテーション
- 第5回 発達とリハビリテーション
- 第6回 リハビリテーションの段階
- 第7回 リハビリテーションの実際
- 第8回 各論のための概説（評価法、検査法）
- 第9回 脳血管障害
- 第10回 脳外傷における高次脳機能障害
- 第11回 脊髄損傷
- 第12回 変性疾患
- 第13回 筋疾患
- 第14回 末梢神経疾患
- 第15回 補遺、まとめ

■ 評 価 方 法

試験 100%。小テストやレポートも含みます。

■ 教 科 書

なし

■ 参 考 書

書名 医学生・コメディカルのための手引書（改定2版）
 著者名 上好昭孝、土肥信之
 出版社 永井書店

■ 留 意 事 項

私語など、他の受講者および講義をしている私の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。

授業科目	作業療法概論	担当者	中山 広宣		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 人（身体機能，精神機能）における作業活動の意義（活動分析）.
2. リハビリテーションにおける作業療法の役割と機能.
3. 身体障害，老年期障害，精神障害，発達障害の作業療法.

■ 目 標

1. 作業活動の意義や作業療法の機能と役割を理解する.
2. 身体障害，老年期障害，精神障害，発達障害の作業療法を理解する.
3. 上記を理解することで，対象者中心のチームリハビリテーションのあり方を考える.

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法の歴史と作業活動の意義
- 第2回 リハビリテーションおよび作業療法に関する定義
- 第3回 国際生活機能分類（ICF）における作業療法の機能
- 第4回 作業活動と人生（生活）
- 第5回 活動分析（作業活動に必要な身体機能と精神機能）の実際
- 第6回 集団活動と作業療法
- 第7回 集団活動（デイケア）における作業療法
- 第8回 作業療法の領域（医療・福祉・教育・就労）
- 第9回 身体障害の作業療法
- 第10回 高次脳機能障害の作業療法
- 第11回 老年期障害の作業療法
- 第12回 発達障害の作業療法
- 第13回 精神障害の作業療法
- 第14回 地域における作業療法
- 第15回 職業リハビリテーション

■ 評 価 方 法

ペーパー試験（小テスト含む）100%
欠席は1回につき5点，遅刻・早退および受講態度不良は1回につき3点減点

■ 教 科 書

なし

■ 参 考 書

標準作業療法学作業療法学概論. 岩崎テル子編集. 医学書院

■ 留 意 事 項

リハビリテーションの歴史において，理学療法と作業療法は共に発展してきた. 真のチームリハビリテーションは他の専門職の理解と尊重が大切である. 専門領域外ではあるが興味を持って受講して欲しい.

授業科目	理学療法概論	担当者	石倉 隆		
学 科 名		学 年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法や理学療法士の概略を理解し、その資質向上と業務把握を目的とする。「理学療法学」は学問体系が構築されつつあるが、人を対象とする医療では、学問としてだけでなく実際の臨床も意識できるように工夫しながら教授し、実学としての「理学療法学」理解を目指す。

■ 目 標

理学療法は、医学であり医療である。学問であり臨床である。この二つをバランスよく習得し、学問としての理学療法学を evidence として使え、実学としての理学療法を技術として使える理学療法士を目指せる素養を身に付ける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション 理学療法とは 理学療法士に関連する法律 理学療法士の活動分野 医療・保健福祉・教育 病期 理学療法の組織：現在の理学療法を取り巻く問題点も教授しながら、今後学んでいく理学療法の何に着眼して学習していくのかを考えて講義に臨む。
- 第2回 理学療法の対象疾患1：脳疾患、脊髄疾患、リウマチ、小児疾患、末梢神経障害、関節疾患、外傷の各対象疾患について、疾患の概要と理学療法の特徴を解説する。
- 第3回 理学療法の対象疾患2：神経筋疾患、脊椎疾患、内部疾患、抹消循環障害、切断、高齢者、その他の各対象疾患について、疾患の概要と理学療法の特徴を解説する。
- 第4回 理学療法評価1（理学療法過程）：過程、理学療法評価の目的、方法、時期、処方・指示、情報収集、問診、検査・測定に至るまでの理学療法過程とその方法を詳細に教授する。
- 第5回 理学療法評価2（スクリーニングバッテリーと検査・測定概論）：SIASやUPDRSに代表される障害を多方面から簡潔に評価できるスクリーニング方法と各障害を詳細にとらえる検査・測定方法の概略を解説する。
- 第6回 理学療法評価3（検査・測定方法の選択と結果の読解、統合・解釈と問題点抽出）：対象者の障害を正しくとらえるには、検査・測定の方法を正しく選択し、情報、問診、検査・測定結果がなぜそのような結果を示したのかを、一つの結果のみでなく複数の結果を踏まえて考察することが重要である。この点を十分に理解する。
- 第7回 理学療法評価4（目標設定、予後・帰結予測と治療計画・プログラム立案、再評価の重要性、臨床診断の重要性）：目標の設定やプログラム立案には予後・帰結予測が重要であることを説く。
- 第8回 EBMの実践、シングルケーススタディ：科学的根拠に基づいた客観的な機能予後予測や治療方針の決定を行っていく必要がある。また、EBMに活用したいのが、1例を客観的に深く追求するシングルケーススタディ。これらの重要性和関係を解説する。
- 第9回 リハビリテーションカンファレンス：リハビリテーションカンファレンスの重要性和必要性を、実際の医療現場で行われたリハビリテーションカンファレンスを題材に解説する。
- 第10回 運動療法1（関節可動域運動、筋力トレーニング）：関節可動域運動、筋力トレーニングの解剖学的、生理学的根拠、運動学的視点から臨床への応用と方法、適応について、最新の資料をもとに概観する。
- 第11回 運動療法2（バランストレーニング、ストレッチ）：バランストレーニング、ストレッチの解剖学的、生理学的根拠、運動学的視点から臨床への応用と方法、適応について、最新の資料をもとに概観する。
- 第12回 運動療法3（基本動作練習、有酸素運動）：基本動作練習、有酸素運動の解剖学的、生理学的根拠、運動学的視点から臨床への応用と方法、適応について、最新の資料をもとに概観する。
- 第13回 物理療法、日常生活活動、装具の基礎知識、環境整備の基礎知識：物理療法を専門とする医師、理学療法士が著した論文をもとに、物理療法の概略を説明する。また、補装具、環境整備の基礎、日常生活活動を、事例を通して概観する。
- 第14回 クリニカルパス、地域連携パス、理学療法（士）の今日の問題：理学療法（士）が抱える今日の問題を、過去を振り返ったうえで、なぜ今日のような問題が起こってきたのかを考え、今後、理学療法士として活躍する学生諸君が、どのように直面する問題を打開していくのかのヒントを与えたい。
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

単位修得試験（定期試験）受験資格のある者に対して、試験のみで評価する。

■ 教科書

教科書を使用しない。開講当初に資料を配布する。

■ 参考書

細田多穂・他「理学療法入門テキスト」南江堂

■ 留意事項

講義では、個人情報に係る資料も提示する。その取り扱いには十分注意し、学外でみだりに他言しないように心がけること。

授業科目	言語聴覚概論	担当者	山口 忍		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚の障害に関して、1, 2年でんだ領域以外の障害について講義を行い、基礎的な知識を習得する。加えて、実際の言語・聴覚障害の方とフリートークし、臨床において、どのような話し方やアプローチが適切か、実戦的に学ぶ。

■ 目 標

臨床場面での言語聴覚障害の方の実際について知り、良好なコミュニケーションをとる方策を学び、実践できるようになる

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児領域：発達遅滞
- 第2回 小児領域：発達障害
- 第3回 嚥下障害：基本的なメカニズム
- 第4回 嚥下障害：実際の対応
- 第5回 聴覚障害：聴覚障害者の聞こえ
- 第6回 聴覚障害：補聴機器の仕組みと実際の聞こえ
- 第7回 コミュニケーション：上記総括
- 第8回 失語症者との会話場面の VTR 視聴と、実技訓練
- 第9回 話そう会事前授業
- 第10回 話そう会事前授業
- 第11回 話そう会
- 第12回 話そう会
- 第13回 話そう会
- 第14回 話そう会事後授業
- 第15回 まとめ・レポート

■ 評価方法

出席 特に「話そう会」の出席を重視 レポートと合せて評価する

■ 教 科 書

授業中に資料を配布する

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

話そう会は土曜日に実施する 日程は開講後連絡する

授業科目	看護学・介護学概論	担当者	福山 智子・橋本 卓也		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

看護歴史、看護機能と役割、活動範囲、様々な看護師免許と資格の種類を通して看護の概略が理解できる内容とする。また、看護は胎児から老人まで全ての発達段階（年齢）の急性期から看とり（終末期）までのあらゆる健康の段階にある人間を対象にするため、看護学で捉える人間論について学ぶ。同時に本科目では“命の始まり”について考え、命を尊重する態度を養い、患者の命を守るための安全管理について学ぶ内容とする。また、キュア（cure）からケア（care）へという医療・保健・福祉領域における患者・利用者に対する支援の流れは、「治療から看護・介護」へという狭義の意味ではなく、「治療から全人的ケア」へ、また、「医療中心の治療」から「多職種連携によるチームアプローチケア」という視点を含んでいる。この講義では、介護の歴史や理念および介護を通して関わる対人援助の価値、知識、方法について学ぶとともに、介護を必要とする人の尊厳を支えるケア、自立支援を目指すケアについて理解を深める。

■ 目 標

- ①看護学の概説を学び、チーム医療の一員である看護師と看護の役割について理解する。
- ②生命の尊厳と患者の安全について考えることができる。
- ③リハビリテーションの視点にたった介護のあり方を学ぶとともに「ケアをする」「ケアをうける」という相互行為としての介護・ケアの本質を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 看護の原点
有史以来看護は“祈り”と“世話”であったが、19世紀にナイチンゲールが登場し、看護を“科学”へと発展させた。ナイチンゲールの素顔と功績を知る
- 第2回 看護理念1
①看護の定義、役割、機能を学び、様々な看護専門職の存在を知る。
②“看護学”の理論や概念を知る。
③実際の看護業務について知る。
- 第3回 看護理念2
看護理念の一つである人間論を学ぶ。看護学では人間を全人的に捉え、人間は人間社会の中で造られる存在と考えられている。“オオカミに育てられた子”から人間について考える。
- 第4回 生命倫理1（人の誕生に関わる倫理）
生命の始まりはいつか、受精の瞬間か、胎児の心臓の鼓動が始まった時か、誕生か？ VTRを見て生命の始まりについて考える。
- 第5回 生命倫理2（命に関わる技術）
①生命を創造する技術－生殖補助医療の現状と課題
②生命を選択する技術－着床前診断、出生前診断、減数（胎）手術、人工妊娠中絶の現状と課題
- 第6回 生命倫理3（命に関わる技術）
③人体を創造する技術（再生医療）－凍結受精卵は命だろうか
④姉の命を救うために生まれてきた少女の物語
- 第7回 リスクマネジメント 1
ヒューマンエラーとは、医療事故と医療過誤、インシデントとアクシデント
- 第8回 リスクマネジメント 2
医療従事者の法的責任と根拠、SHELモデルからリスク回避の考察
- 第9回 日本が抱える介護問題の背景（日本の近代化が少子化・高齢化および家族構造に与えた影響を概観する）
- 第10回 介護に関する保健・福祉政策の動向と我が国の介護制度の流れ
- 第11回 介護の原理性（介護の本質を知るとともに相互関係および全人的視点からケアという行為を考察する）
- 第12回 介護を必要とする人たちの理解（健康の概念から自立の概念へ－自立（自律）的に生きるということ－）
- 第13回 利用者中心の視点にたった連携のあり方（チームアプローチの実際的方法と阻害要因）
- 第14回 生活自立を支える介護（介助）技法およびリハビリテーションの視点にたった介護について考える
- 第15回 介護及びケアワークを感情労働の視点から考察するとともに家族へのケア／ケアを支える仕組みについても言及する

■ 評価方法

授業参加（出席）20%、課題レポート30%、試験50%

■ 教科書

なし

■ 参考書

なし

■ 留意事項

他の学生の邪魔になる態度をとる学生は退席させる。

授業科目	疫学・公衆衛生学	担当者	白井 文恵		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

地域で生活する人々の健康の維持・増進・向上のために必要な公衆衛生学について学ぶ。

■ 目 標

- ①健康を守る社会の仕組みを理解する。
- ②健康に関する研究手法である疫学について理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 公衆衛生の意義
- 第2回 疫学
- 第3回 統計（人口統計）
- 第4回 健康の保持・増進（母子保健）
- 第5回 健康の保持・増進（高齢者保健）
- 第6回 健康の保持・増進（精神保健・学校保健）
- 第7回 健康の保持・増進（産業保健・生活環境）
- 第8回 健康の保持・増進（感染症①）
- 第9回 健康の保持・増進（感染症②）
- 第10回 健康の保持・増進（感染症③）
- 第11回 健康の保持・増進（感染症④）
- 第12回 健康の保持・増進（感染症⑤）
- 第13回 健康の保持・増進（感染症⑥）
- 第14回 関係法規
- 第15回 関係法規

■ 評価方法

試験結果により評価します。

■ 教 科 書

厚生統計協会 「厚生の指標 増刊 国民衛生の動向 2011/2012」

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	障害者福祉論	担当者	橋本 卓也		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

障害者福祉に関する理念・価値・法制度、および障害構造等を体系的に理解する。また、障害をもつ人たちの生活・教育・雇用等の実態を通して彼らを排除する社会構造への関心と支援のあり方を模索する。各自が障害者福祉の現状を把握し、「医学モデル」という狭義の捉え方ではなく「生活モデル」「社会モデル」の視点からもこの問題を自らの課題として把握できることを目標とする。

■ 目 標

- ① 「生活モデル」「社会モデル」にたった障害者支援のあり方を理解する。
- ② 重い障害をもつ人たちが地域で生活できるための条件をPT・OTの視点から考えることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション。障害者福祉の理念と価値。
- 第2回 障害構造の理解（医学モデル、生活モデルおよび社会モデルの考え方とリハビリテーション）
- 第3回 障害者の法的定義（手帳制度を含む）と実態
- 第4回 障害者福祉の史的展開（国際的動向および日本の動向）
- 第5回 障害施策の法・制度体系（身体・知的・精神に関する各障害福祉法から支援費制度まで）
- 第6回 障害者自立支援法Ⅰ（概要と課題）
- 第7回 障害者自立支援法Ⅱ（概要と課題）
- 第8回 障害児教育の歴史と特別支援教育について
- 第9回 障害者の雇用・就労の現状と課題（所得保障・各種減免制度を含む）
- 第10回 障害者福祉領域における専門職の役割と機能
- 第11回 生活環境改善とまちづくり
- 第12回 障害者施設の課題（脱施設化および地域移行支援の視点から）
- 第13回 障害者運動の歴史と権利擁護活動
- 第14回 障害者ケアマネジメントとソーシャルワーク
- 第15回 ゲストスピーカー（障害当事者）による講義と交流

■ 評 価 方 法

授業参加（出席）30%、試験70%

■ 教 科 書

使用しない

■ 参 考 書

小澤 温編「よくわかる障害者福祉」ミネルヴァ書房

■ 留 意 事 項

まじめな授業態度を望む。特に他の学生の邪魔になるような授業態度をとる学生は退席させる。

授業科目	健康科学・開発	担当者	佐藤 秀紀		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本授業では、健康と人間の生活にかかわる心身の諸問題を課題として、生涯にわたり積極的な健康を保持増進させていくという Positive Health の観点から多様化した現代社会に対応できる健康処方について説明する。

■ 目 標

現代社会における人（ヒト）の適応とライフスタイルについて理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 健康科学とは何か がんを科学する
- 第2回 健康に影響する因子 喫煙の科学
- 第3回 健康に影響する因子 アルコール依存症の科学
- 第4回 生活習慣病と健康 メタボリックシンドロームの科学
- 第5回 生活習慣病と健康 血圧の科学
- 第6回 精神の健康 うつ病の科学
- 第7回 精神の健康 不安障害の科学
- 第8回 栄養と健康 ダイエットの科学
- 第9回 運動の身体的効果 ①筋力トレーニングの科学と中高年のための運動法
- 第10回 運動の身体的効果 ②骨粗しょう症の科学
- 第11回 各種疾患に対する運動処方 ①首の痛み・肩の痛み
- 第12回 各種疾患に対する運動処方 ②腰の痛み・膝の痛み
- 第13回 各種疾患に対する運動処方 ③股関節の痛み
- 第14回 各種疾患に対する運動処方 ④呼吸器・循環器
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

小テスト50%、学期末試験50%

■ 教 科 書

特に指定しない。必要な資料はその都度配布する。

■ 参 考 書

・山崎喜比古 朝倉隆司編『生き方としての健康科学』第4版 有信堂 2008

■ 留 意 事 項

授業科目	感染症学	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

感染症と人・微生物との関わり、感染防御機構、感染症の検査と診断、治療、そして感染予防策について学習する。理学療法、作業療法の領域においても、感染症については特に注意が必要であり、各種感染症について基本的理解ができるように解説する。

■ 目 標

1. 微生物と感染症、感染防御機構について基本的理解ができる
2. 代表的な感染症について、病原微生物とその感染経路、臨床像、診断と治療法を理解する
3. 院内感染および感染予防策について説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 感染症総論(1) 微生物と感染症、感染防御機構
- 第2回 感染症総論(2) 感染症の検査と診断、感染症の治療
- 第3回 感染症各論(1) 呼吸器感染症、結核
- 第4回 感染症各論(2) 消化器感染症、食中毒
- 第5回 感染症各論(3) 肝炎
- 第6回 感染症各論(4) 尿路感染症、性感染症
- 第7回 感染症各論(5) 皮膚、粘膜の感染症
- 第8回 感染症各論(6) 人獣共通感染症、寄生虫感染症
- 第9回 感染症各論(7) 小児の感染症、母子感染
- 第10回 感染症各論(8) 高齢者の感染症、日和見感染症
- 第11回 感染症各論(9) 新興感染症、感染症トピックス
- 第12回 感染制御学(1) 院内感染、標準予防策、感染経路別予防策
- 第13回 感染制御学(2) 術後感染症、カテーテル関連感染症、針刺しと感染症
- 第14回 感染制御学(3) 薬剤耐性菌による感染症、その他
- 第15回 総復習

■ 評 価 方 法

定期試験 80% 出席、態度 20%

■ 教 科 書

「臨床微生物、医動物 (NURSING GRAPHICUS EX 5)」 MC メディカ出版 (2004年)

■ 参 考 書

「微生物学 第2版 (新クイックマスター)」 (2010年)

■ 留 意 事 項

授業科目	医療安全学	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頻発する医療事故を概観し、医療職を取りまく社会的環境と医療現場の現状を理解する。次に、事故発生のメカニズムと事故分析、事故対策について学習する。また、事故事例の分析を通して医療機関における安全対策のありかたについて考える。

■ 目 標

1. 医療事故の実際を知り、安全対策の必要性について理解する
2. 事故の発生要因について説明できる
3. 医療機関における安全対策を説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 医療事故の疫学、医療事故事例の紹介
- 第2回 医療事故の定義、分類、医療事故の報告制度
- 第3回 事故発生のメカニズム
- 第4回 事故分析、事故対策
- 第5回 医療機関における安全対策（1）
- 第6回 医療機関における安全対策（2）
- 第7回 医療事故後の対応、医療事故に関する法的責任
- 第8回 リハビリテーション業務における安全対策
- 第9回 事例検討（1）（講義）
- 第10回 事例検討（2）（講義）
- 第11回 事例検討（3）（発表）
- 第12回 事例検討（4）（発表）
- 第13回 事例検討（5）（発表）
- 第14回 事例検討（6）（発表）
- 第15回 総復習

■ 評 価 方 法

定期試験 60%、提出課題 20%、出席、態度 20%

■ 教 科 書

「医療安全（NURSING GRAPHICUS EX 1）」 MC メディカ出版（2009年）

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	基礎解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

人体を構成している細胞・組織、骨、筋および神経の基本構造と循環器系について学ぶ。

■ 目 標

人体の構成単位の基本を理解することにより、今後の各論への理解を容易にする。

■ 授 業 計 画

第1回 解剖学総論

1. 細胞・組織・器官・系
2. 肉眼解剖と組織学
3. 系統解剖と局所解剖学
4. 発生学
5. 体表解剖学
6. 人体の正常・異常・個体差
7. 解剖学的姿勢
8. 基本的な解剖学用語

骨学総論 1. 骨の肉眼的構造 2. 髄腔と骨髓 3. 体腔

第2回 関節靱帯学総論

1. 線維性連結
2. 軟骨性連結
3. 滑膜性連結
4. 関節の一般構造（関節包、滑膜、滑液）
5. 関節の特殊構造（関節円板、関節半月、関節靱帯、関節唇）

第3回 筋学総論

1. 筋の分類（平滑筋と横紋筋）
2. 随意筋と不随意筋
3. 骨格筋の基本形態
4. 腱と腱膜
5. 筋の付着（起始と停止）

第4回 筋学総論

1. 筋の形
2. 筋の作用（屈曲・伸展、内転・外転、内旋・外旋）
3. 主動筋、拮抗筋、協力筋
4. 骨格筋の補助装置（筋膜、支帯、筋間中隔、筋滑車、滑液包、腱鞘）

第5回 神経学総論

1. 中枢神経系と末梢神経系
2. 求心性神経と遠心性神経
3. 白質と灰白質
4. 神経細胞（神経細胞体、樹状突起、軸索、髄鞘）
5. 神経線維と神経

第6回 神経学総論

1. 脊髄の白質と灰白質（前柱、後柱、前索、側索、後索）
2. 脊髄の区分（頸髄～尾髄）
3. 脊髄髄節と脊髄神経（髄節、前根と後根、前枝と後枝）

第7回 脊髄神経

1. 神経線維と神経
2. 前枝と後枝の分布領域
3. 皮枝と筋枝
4. 皮節
5. 脊髄神経後枝

第8回 神経叢の意味と腕神経叢

1. 神経叢の意味を理解する。
2. 腕神経叢の構成と、腕神経叢から出る神経について理解する。

第9回 循環器系総論

1. 血管系の役割
2. 血管（動脈・毛細血管・静脈の構造）
3. 動脈・静脈と動脈血・静脈血
4. 吻合
5. 終動脈

第10回 心臓

1. 心筋細胞
2. 心臓の位置
3. 心臓を包む膜
4. 心臓の内腔（心房と心室）
5. 肺循環と体循環

第11回 心臓

1. 房室弁（腱索と乳頭筋、左房室弁・右房室弁）
2. 動脈弁（肺動脈弁・大動脈弁）
3. 心臓の血管（冠状動脈、冠状静脈洞）

第12回 動脈系

1. 大動脈
2. 大動脈弓（腕頭動脈、左総頸動脈、左鎖骨下動脈）
2. 頭頸部に分布する動脈
3. 上肢帯と上肢に分布する動脈
4. 胸部内臓・腹部内臓に分布する動脈

第13回 静脈系

1. 右心房に注ぐ静脈
2. 頭頸部からの静脈
3. 上肢帯と上肢からの静脈
3. 奇静脈
4. 門脈

第14回 胎児循環

1. 胎盤
2. 臍静脈と臍動脈
3. 静脈管（アランチウス管）
4. 卵円孔
5. 動脈管（ボタロー管）

リンパ系 1. リンパ管とリンパ節 2. 胸管 3. 右リンパ本幹 4. 脾臓

第15回 総復習

■ 評価方法

定期試験 60% 小テスト・レポート 40%

■ 教科書

渡辺正仁 監修 「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のための解剖学（第4版）」 廣川書店
相磯貞和 訳 「ネッター解剖学アトラス」 南江堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	解剖学基礎実習	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

上肢の骨・関節・筋・体幹の骨・関節・筋について、骨実習、組織実習、体表解剖学などを通して学ぶ。

■ 目 標

人体の各種の運動は骨と筋との共同作業であり、骨格を理解することにより、筋学への理解を容易にし、運動器系への理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 全身骨格とその分類
 1. 骨の標本を使って全身骨格を作る。 2. 全身骨格を軸骨格と付属性骨格に分ける。
 3. 付属性骨格をさらに分類する。 4. 海綿骨と緻密骨を区別する。 5. 顕微鏡で骨組織を観察する。
- 第2回 脊柱と体表解剖学
 1. 椎骨の基本構造。 2. 頸椎・胸椎・腰椎・仙骨・尾骨について観察する。
 3. 自分自身の体で椎骨を触知する。 4. 脊柱のレントゲン写真を読影する。
- 第3回 上肢帯骨と体表解剖学
 1. 肩甲骨の各部を観察する。 2. 鎖骨の各部を観察する。 3. 肩甲骨と鎖骨を触知する。
 4. 肩甲骨と鎖骨の動きを理解する。 5. 肩甲骨と鎖骨のレントゲン写真を読影する。
- 第4回 胸郭と体表解剖学
 1. 胸骨の各部 2. 胸骨角 3. 肋硬骨と肋軟骨 4. 真肋と仮肋 5. 肋骨の各部
 6. 第一肋骨（前斜角筋結節と鎖骨下動脈溝） 7. 頸肋と腰肋 8. 胸骨と肋骨の触知
- 第5回 自由上肢と体表解剖学
 1. 上腕骨の各部 2. 橈骨の各部 3. 尺骨の各部 4. 手の骨 5. 手根溝
 6. 自由上肢骨の触知
- 第6回 脊柱と胸郭の連結
 1. 椎骨間の連結 2. 椎間板 3. 環軸関節（正中環軸関節と外側環軸関節、環椎十字靱帯） 4.
 胸郭の連結 5. 肩鎖関節 6. 胸鎖関節
- 第7回 上肢の関節と靱帯
 1. 肩関節 2. 腕尺関節 3. 腕橈関節 4. 上橈尺関節 5. 下橈尺関節 6. 手関節
 7. 手根中手関節 8. 中手指節関節 9. 指節間関節
- 第8回 上肢帯から上腕への筋
 1. 肩甲下筋 2. 棘上筋 3. 棘下筋 4. 小円筋 5. 大円筋 6. 三角筋 7. 烏口腕筋
 軸骨格から上腕への筋 1. 大胸筋 2. 広背筋
- 第9回 軸骨格から上肢帯骨への筋
 1. 僧帽筋 2. 肩甲挙筋 3. 小菱形筋 4. 大菱形筋 5. 前鋸筋 6. 鎖骨下筋 7. 小胸筋
 上腕の筋 1. 上腕二頭筋 2. 上腕筋 3. 上腕三頭筋
- 第10回 前腕前面の筋
 1. 円回内筋 2. 橈側手根屈筋 3. 長掌筋 4. 浅指屈筋 5. 尺側手根屈筋
 6. 深指屈筋 7. 長母指屈筋 8. 方形回内筋
- 第11回 前腕後面の筋
 1. 腕橈骨筋 2. 長橈側手根伸筋 3. 短橈側手根伸筋 4. （総）指伸筋 5. 小指伸筋 6. 尺
 側手根伸筋 7. 肘筋 8. 回外筋 9. 長母指外転筋 10. 長・短母指伸筋 11. 示指伸筋
- 第12回 上肢の筋・関節・靱帯・動脈・静脈・神経と体表解剖
 上肢の諸構造を局所解剖学的に理解する。
 上肢のプラスティネーション標本を用いての実習
- 第13回 手の筋
 母指球筋（短母指外転筋、短母指屈筋、母指対立筋、母指内転筋）
 小指球筋（短掌筋、小指外転筋、短小指屈筋、小指対立筋） 中手筋（骨間筋、虫様筋）
- 第14回 固有背筋
 1. 板状筋 2. 脊柱起立筋 3. 横突棘筋 4. 棘間筋 5. 横突間筋 6. 後頭下筋
 胸郭の筋（肋間筋、肋下筋、胸横筋、肋骨挙筋、後鋸筋）
- 第15回 総復習

■ 評価方法

定期試験 60% 小テスト・レポート 40%

■ 教科書

渡辺正仁 監修 「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のための解剖学（第4版）」 廣川書店
相磯貞和 訳 「ネッター解剖学アトラス」 南江堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	運動器系の解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

下肢の骨・関節・筋と頭頸部の筋について学ぶ。

■ 目 標

人体の各種の運動は骨と筋との共同作業であり、骨格を理解することにより、筋学への理解を容易にし、運動器系への理解を深める。

■ 授 業 計 画

第1回 下肢帯骨

1. 寛骨（腸骨、坐骨、恥骨） 2. 寛骨各部の触知
骨盤（大骨盤と小骨盤、恥骨弓と恥骨下角、骨盤上口と骨盤下口、骨盤の性差）

第2回 自由下肢帯骨

1. 大腿骨 2. 膝蓋骨 3. 脛骨 4. 腓骨 5. 足の骨（足根骨、中足骨、指節骨）
6. 自由下肢骨各部の触知

第3回 股関節

1. 関節の種類 2. 関節運動 3. 大腿骨頭靱帯 4. 腸骨大腿靱帯 5. ローザ・ネラトン線
仙腸関節（仙結節靱帯、仙棘靱帯、大坐骨孔と小坐骨孔）

第4回 膝関節

1. 関節の構造 2. 関節運動 3. 関節半月 4. 膝十字靱帯 5. 側副靱帯 6. 膝蓋靱帯
脛腓関節 足関節 1. 距腿関節 2. 距骨下関節 3. 関節運動 4. 足弓

第5回 臀部の筋

1. 大殿筋 2. 中殿筋 3. 小殿筋 4. 大腿筋膜張筋 5. トレンデレンブルグ徴候
股関節の筋 1. 大腰筋 2. 腸骨筋 3. 股関節の深部外旋6筋

第6回 大腿の筋

1. 大腿前面の筋 2. 大腿後面の筋（ハムストリングス） 3. 大腿内側の筋
4. 大腿三角 5. 内転筋管

第7回 下腿前面の筋

1. 前脛骨筋 2. 長母趾伸筋 3. 長趾伸筋 4. 第三腓骨筋
下腿外側の筋 1. 長腓骨筋 2. 短腓骨筋

第8回 下腿後面の筋

1. 腓腹筋 2. ヒラメ筋 3. 足底筋 4. 膝窩筋 5. 長母趾屈筋 6. 長趾屈筋 7. 後脛骨筋
8. 下腿の筋の触知

第9回 足の筋

1. 足背の筋（短趾伸筋） 2. 母趾球筋（母趾外転筋、短母趾屈筋、母趾内転筋）
3. 小趾球筋（小趾外転筋、短小趾屈筋） 4. 中足筋（短趾屈筋、足底方形筋、骨間筋、虫様筋）

第10回 横隔膜

1. 臍中心 2. 大動脈裂孔 3. 食道裂孔 4. 大静脈孔
5. 呼吸筋としての横隔膜 6. 横隔膜と接する内臓

第11回 腹部の筋

1. 腹直筋 2. 腹直筋鞘 3. 外腹斜筋 4. 内腹斜筋 5. 腹横筋
6. 単径靱帯 7. 単径管

第12回 顔面を構成する骨

1. 眼窩 2. 鼻腔 3. 口腔
頭蓋の観察 1. 上面からの観察 2. 側面からの観察 3. 底面からの観察

第13回 頭部顔面の筋

1. 表情筋
2. 咀嚼筋（側頭筋、咬筋、内側翼突筋、外側翼突筋）と顎関節

第14回 頸部の筋

1. 胸鎖乳突筋 2. 斜角筋群（前斜角筋、中斜角筋、後斜角筋） 3. 椎前筋
4. 舌骨筋群（舌骨上筋群と舌骨下筋群）

第15回 総復習

■ 評価方法

定期試験 60% 小テスト・レポート 40%

■ 教科書

渡辺正仁 監修 「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のための解剖学（第4版）」 廣川書店
相磯貞和 訳 「ネッター解剖学アトラス」 南江堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	神経系の解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

神経系を構成している脳と脊髄および末梢神経系について学習し、さらに運動性および感覚性の伝導路についても学ぶ。

■ 目 標

各神経系の構造と機能を理解し、将来、学習する様々な運動性・感覚性障害を理解する礎にする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 腰神経叢 1. 腸骨下腹神経 2. 腸骨単径神経 3. 陰部大腿神経 4. 外側大腿皮神経
5. 閉鎖神経 6. 大腿神経
仙骨神経叢 1. 坐骨神経 2. 上殿神経 3. 下殿神経 4. 後大腿皮神経 5. 陰部神経
- 第2回 臀部に分布する神経
1. 上殿神経 2. 下殿神経
大腿に分布する神経 1. 坐骨神経 2. 閉鎖神経 3. 大腿神経
- 第3回 下腿に分布する神経
1. 脛骨神経 2. 総腓骨神経
足に分布する神経 1. 深腓骨神経 2. 足底神経
- 第4回 頸神経叢と胸神経
1. 頸神経ワナ 2. 横隔神経 3. 副横隔神経 4. 頸横神経 5. 鎖骨上神経
6. 大耳介神経 7. 小後頭神経 8. 肋間神経と肋下神経
- 第5回 脳の発生と脳室
1. 胚葉形成 2. 神経溝 3. 神経管 4. 脳胞の発達（前脳胞、中脳胞、菱脳胞）
5. 脳室の構造 6. 脳脊髄液 7. 脈絡叢
- 第6回 髄膜と硬膜静脈洞
1. 硬膜 2. クモ膜 3. 軟膜 4. クモ膜下腔 5. クモ膜顆粒
脳の各部と脳回・脳溝（大脳・間脳・中脳・橋・延髄・小脳の区別、大脳の葉、回、溝）
- 第7回 大脳（終脳）
1. 大脳皮質 2. 大脳基底核 3. 大脳髄質を作る神経線維
間脳（視床と視床下部）
- 第8回 中脳
1. 中脳蓋（四丘体、上丘と下丘、中脳水道） 2. 中脳披蓋（赤核、黒質） 3. 大脳脚
橋（橋核、中小脳脚、皮質橋小脳路）
- 第9回 延髄
1. 延髄の腹側（錐体、錐体交叉、オリブ） 2. 延髄の背側（菱形窩、薄束結節、楔状束結節）
小脳（小脳皮質、小脳核、小脳脚）
- 第10回 脳神経
1. 嗅神経（嗅上皮、嗅球、嗅索、嗅覚の伝導路）
2. 視神経（眼球の構造、網膜の構造、視神経、視神経交叉、視索、視覚の伝導路と反射路）
- 第11回 1. 動眼・滑車・外転神経と外眼筋
2. 三叉神経（眼神経、上顎神経、下顎神経）
3. 舌下神経
- 第12回 1. 顔面神経（顔面神経管、大錐体神経、アブミ骨筋神経、鼓索神経）
2. 内耳神経（平衡聴覚器の構造と内耳神経）
- 第13回 1. 舌咽神経
2. 迷走神経
3. 副神経
- 第14回 運動の伝導路
1. 錐体路と錐体街路
感覚の伝導路
- 第15回 運動の調節
（感覚と運動、脊髄レベル運動調節、脳幹レベル運動調節、大脳レベルの運動調節）
総復習

■ 評価方法

定期試験 60% 小テスト・レポート 40%

■ 教科書

渡辺正仁 監修 「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のための解剖学（第4版）」 廣川書店
相磯貞和 訳 「ネッター解剖学アトラス」 南江堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	内臓系の解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

自律神経系・循環器系・呼吸器系・消化器系・泌尿器系・生殖器系・内分泌系について学習するとともに、正常な胎児発生と異常発生についても学ぶ。

■ 目 標

各系の臓器学を学び、これらが自律神経系により連結・調節されている機構を理解する。また、発生段階に生じる不具合（先天異常）を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 自律神経
1. 交感神経（脊髄側柱、節前ニューロンと節後ニューロン、自律神経節、交感神経幹）
2. 副交感神経（骨盤内臓神経）
- 第2回 呼吸器系
1. 鼻腔（鼻中隔、鼻甲介、鼻道、鼻涙管、キーゼルパツハ部位、嗅上皮、副鼻腔）
2. 咽頭 3. 喉頭（喉頭の軟骨、発声器としての喉頭） 4. 気管と気管支 5. 肺 6. 縦隔
- 第3回 消化器系
1. 口腔（歯、舌と味蕾、唾液腺） 2. 食道 3. 胃 4. 小腸（十二指腸、空腸、回腸）
5. 大腸（盲腸、虫垂、結腸、直腸） 6. 肛門
- 第4回 消化器系
1. 肝臓（肝鎌状間膜、肝門、栄養血管と機能血管、肝小葉、グリソン鞘、） 2. 胆嚢と総胆管
3. 膵臓（大膵管と小膵管、ファーター乳頭、オッディ括約筋） 4. 膵の内分泌部 5. 腹膜
- 第5回 泌尿器系
1. 腎臓（腎皮質と髄質、腎錐体、ネフロン、集合管、腎杯と腎盤） 2. 尿管
3. 膀胱（膀胱三角、膀胱括約筋、内尿道口、内尿道括約筋） 4. 尿道
- 第6回 循環器系
1. 胸部内臓に分布する血管 2. 腹部内臓に分布する血管
3. 骨盤内臓に分布する血管
- 第7回 循環器系
1. 下肢の動脈（大腿動脈、閉鎖動脈、大腿深動脈、膝窩動脈、後脛骨動脈、腓骨動脈、前脛骨動脈、足背動脈、足底動脈） 2. 下肢の静脈（大伏在静脈、小伏在静脈）
- 第8回 生殖器系
1. 生殖器の発生 2. 男性生殖器（精巣、精巣上体、精管と尿管、精嚢、射精管、前立腺、尿生殖隔膜、尿道球腺、陰茎海綿体と尿道海綿体） 3. 間細胞と男性ホルモン
- 第9回 生殖器系
1. 女性生殖器（卵巣、卵胞、排卵、卵管、子宮、膣） 2. 女性ホルモンと性周期
3. 外陰部 4. 乳房
- 第10回 内分泌系
1. 視床下部（神経内分泌） 2. 脳下垂体（発生、前葉と後葉、下垂体門脈）
3. 松果体 4. 副腎 5. 消化管とホルモン 6. 胸腺
- 第11回 皮膚の構造
1. 表皮と真皮 2. 皮膚の感覚器 3. 毛と立毛筋 4. 脂腺 5. 皮膚紋理 6. 爪
7. 皮下組織
- 第12回 頸部の局所解剖
1. 咽頭・喉頭・気管・食道・大動脈の位置関係 2. 甲状腺と上皮小体 3. 頸部の動脈
4. 頸動脈洞と頸動脈小体 5. 上頸神経節と星状神経節 6. 斜角筋と腕神経叢
- 第13回 頭部の局所解剖
1. 眼窩の内容物 2. 外耳と外耳道 3. 頭部・顔面の動脈と神経
4. 側頭窩、側頭下窩、翼口蓋窩の解剖
- 第14回 正常発生と異常発生
1. 受精から胚葉形成 2. 骨格系の正常発生と異常 3. 筋系の正常発生と異常
4. 神経系の正常発生と異常 5. 異常発生の原因
- 第15回 総復習

■ 評価方法

定期試験 60% 小テスト・レポート 40%

■ 教科書

渡辺正仁監修 「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のための解剖学（第4版）」 廣川書店
相磯貞和 訳 「ネッター解剖学アトラス」 南江堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	生理学	担当者	岡崎 祐香		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

人体の各臓器がいかにか正常の機能を維持し、1 個体としての機能を発揮しているのかを学習する。

■ 目 標

各臓器における構造と機能を理解するだけでなく、生理学を通じて生命現象を理論的に考察する力も養うことを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第 1 回 細胞と内部環境
- 第 2 回 細胞と内部環境
- 第 3 回 血液
- 第 4 回 循環
- 第 5 回 循環
- 第 6 回 呼吸
- 第 7 回 呼吸
- 第 8 回 呼吸
- 第 9 回 消化
- 第10回 排泄
- 第11回 排泄
- 第12回 酸塩基平衡
- 第13回 内分泌
- 第14回 内分泌
- 第15回 前期統括
- 第16回 筋
- 第17回 筋
- 第18回 筋
- 第19回 神経系
- 第20回 末梢神経系
- 第21回 末梢神経系
- 第22回 中枢神経系
- 第23回 中枢神経系
- 第24回 中枢神経系
- 第25回 感覚
- 第26回 感覚
- 第27回 感覚
- 第28回 代謝と体温
- 第29回 運動生理
- 第30回 後期統括

■ 評価方法

試験（90％）と出席・授業態度（10％）により評価する。

■ 教科書

石澤光郎他著「標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学」医学書院

■ 参考書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業時間のみの学習では生理学の理解は深まりません。自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習復習を行う習慣をつけましょう。

授業科目	生理学実習	担当者	岡崎 祐香		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生理学・解剖学・運動学の講義を踏まえ、環境の変化に対する生体の反応や恒常性について学習する。

■ 目 標

実際のヒトの生理機能を自らの手で計測し、その結果を解析・考察することにより、ホメオスタシスが維持されているメカニズムを理解する。また、この実習を通して、医療従事者として必要な姿勢や洞察力を養う。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション
 第2回 実習内容・データ分析についての講義
 第3回 第1クール実習 (1)
 第4回 第1クール実習 (2)
 第5回 第1クール実習 (3)
 第6回 第2クール実習 (1)
 第7回 第2クール実習 (2)
 第8回 第2クール実習 (3)
 第9回 第3クール実習 (1)
 第10回 第3クール実習 (2)
 第11回 第3クール実習 (3)
 第12回 レポート評価 (講義)
 第13回 レポート評価 (講義)
 第14回 レポート評価 (講義)
 第15回 実習統括

■ 評 価 方 法

実習態度 (20%)・レポート (40%)・試験 (40%) により評価する。

■ 教 科 書

特に指定しない。

■ 参 考 書

適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

出席や実習中の態度も成績評価に含みます。また、レポート提出は期限厳守のこと。期限を過ぎての提出は認めません。被検者の安全や守秘義務が守られなければならない授業ですので、真剣に取り組むこと。

授業科目	運動生理学	担当者	山本 真史		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体運動時に、生体内の各種機能や機構がどのように働いているかについて講義する。

■ 目 標

運動生理学の基礎的な知識および考え方を身につけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（運動生理学とは）
- 第2回 環境への適応
- 第3回 身体運動と健康
- 第4回 身体運動とエネルギー
- 第5回 身体運動と筋
- 第6回 身体運動と神経系（1）
- 第7回 身体運動と神経系（2）
- 第8回 身体運動と神経系（3）
- 第9回 身体運動と循環器系
- 第10回 身体運動と呼吸器系
- 第11回 身体運動と体温調節
- 第12回 運動処方
- 第13回 運動障害
- 第14回 身体運動と発育発達
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

定期試験80%、出席20%

■ 教 科 書

山本順一郎編、『運動生理学（第2版）』、化学同人

■ 参 考 書

適宜、授業内で紹介する。

■ 留 意 事 項

授業科目	運動学総論	担当者	境 隆弘		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法と作業療法にとっての運動学（Kinesiology）は、「人間の運動の科学」であり、人間のからだの構造を学ぶ解剖学、人間のからだの機能を学ぶ生理学、そして、身体および身体各部を物体とみなした時の力学を基礎とした応用科学であることについて学ぶ。

■ 目 標

運動学用語を理解し、使用できるようになる。 運動力学を理解する。
 上肢・下肢の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定方法の他、理学療法士、作業療法士にとっての運動学の重要性を学ぶ
- 第2回 運動学（Kinesiology）総説
解剖学・生理学ならびに運動療法学との関連、Kinematics と Kinetics について学ぶ
- 第3回 身体運動の基本
運動学を学ぶにあたって必要な身体における運動面と軸について学ぶ
- 第4回 身体運動の名称
運動学を学ぶにあたって必要な身体各部の運動方向の名称について学ぶ
- 第5回 運動を構成する要素と器官①
ヒトの運動を生む器官のうち、骨と関節について学ぶ
- 第6回 運動を構成する要素と器官②
ヒトの運動を生む器官のうち、筋について学ぶ
- 第7回 力学の基礎① 運動学を学ぶにあたって必要なニュートン力学について学ぶ
- 第8回 力学の基礎② 運動学を学ぶにあたって必要な身体とてこについて学ぶ
- 第9回 力学の基礎③ 運動学を学ぶにあたって必要なモーメント（トルク）について学ぶ
- 第10回 力学の基礎④ 運動学を学ぶにあたって必要な生体における力とモーメントについて学ぶ
- 第11回 構えと姿勢① ヒトの運動にかかわる構えと姿勢の名称について学ぶ
- 第12回 構えと姿勢② ①で学んだ構えと姿勢について、演習を行い理解を深める
- 第13回 上肢の関節運動学① 肩甲帯と肩関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第14回 上肢の関節運動学演習① 肩甲帯と肩関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第15回 上肢の関節運動学② 肘関節と前腕に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第16回 上肢の関節運動学演習② 肘関節と前腕の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第17回 上肢の関節運動学③ 手関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第18回 上肢の関節運動学演習③ 手関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第19回 上肢の関節運動学④ 手指に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第20回 上肢の関節運動学演習④ 手指の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第21回 下肢の関節運動学① 股関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第22回 下肢の関節運動学演習① 股関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第23回 下肢の関節運動学② 膝関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第24回 下肢の関節運動学演習② 膝関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第25回 下肢の関節運動学③ 足関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第26回 下肢の関節運動学演習③ 足関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第27回 実技試験（口頭試験含む）
学んだ関節運動学について実技試験を実施する
- 第28回 実技試験（口頭試験含む）のフィードバック
実技試験の解説、講評を行う
- 第29回 総括① 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う
- 第30回 総括② 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教科書

中村隆一、斎藤宏 著：「基礎運動学」，医歯薬出版。

■ 参考書

- 1) 嶋田智明ほか監訳：筋骨格系のキネシオロジー．医歯薬出版
- 2) 奈良 勲監訳：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）．医学書院
- 3) 荻島秀男監訳：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）．医歯薬出版
- 4) 野島元雄監訳：図解 四肢と脊柱の診かた．医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法と作業療法の基礎学問として重要な科目であり、2年生に進んで、運動学各論、運動学実習、臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学各論	担当者	境 隆弘		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

下肢、体幹・頭頸部の機能解剖に立脚した運動の分析を関節運動学と運動力学の視点から部位別に学ぶ。
姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学的分析と筋出力、運動学習について学ぶ。

■ 目 標

下肢、体幹・頭頸部の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。
姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学を理解し、観察や分析が出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定の他、前期に学んだ運動学総論、後期に学ぶ運動学実習との関連性を学ぶ
- 第2回 下肢の関節運動学① 股関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第3回 下肢の関節運動学演習① 股関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第4回 下肢の関節運動学② 膝関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第5回 下肢の関節運動学演習② 膝関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第6回 下肢の関節運動学③ 足関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第7回 下肢の関節運動学演習③ 足関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第8回 体幹の関節運動学 体幹に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第9回 体幹の関節運動学演習 体幹の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第10回 頭頸部・顔面の関節運動学 頭頸部・顔面に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第11回 頭頸部・顔面の関節運動学演習 頭頸部・顔面の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第12回 四肢と脊柱の運動連鎖
開放性運動連鎖（OKC）と閉鎖性運動連鎖（CKC）について学ぶ
- 第13回 四肢と脊柱の運動連鎖演習
OKCとCKCに関する演習を行い、理解を深める
- 第14回 筋トルク 様々な収縮形態により発揮される筋トルクについて学ぶ
- 第15回 筋トルク演習 実際に筋トルクを計測し、理解を深める
- 第16回 姿勢制御の神経機構 ヒトの姿勢反応について学ぶ
- 第17回 姿勢制御の神経機構演習 ヒトの姿勢反応について、演習を行い理解を深める
- 第18回 運動戦略 ヒトの運動戦略（ストラテジー）について学ぶ
- 第19回 運動戦略演習
ヒトの運動戦略（ストラテジー）について、演習を行い理解を深める
- 第20回 歩行の運動学① 歩行の運動学について、概論を学ぶ
- 第21回 歩行の運動学② 歩行の運動学的分析について学ぶ
- 第22回 歩行の運動学③ 歩行の運動力学的分析について学ぶ
- 第23回 運動学習 ヒトの運動学習機能について学ぶ
- 第24回 運動学習演習 ヒトの運動学習について、演習を行い理解を深める
- 第25回 実技試験（口頭試問含む）① 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第26回 実技試験（口頭試問含む）② 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第27回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック①
実技試験の解説、講評を行う
- 第28回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック②
実技試験の解説、講評を行う
- 第29回 総括① 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う
- 第30回 総括② 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教科書

中村隆一、斎藤宏 著：「基礎運動学」，医歯薬出版。

■ 参考書

1) 嶋田智明ほか監訳：筋骨格系のキネシオロジー．医歯薬出版

2) S.Hoppenfeld 著／野島元雄 監訳：図解 四肢と脊柱の診かた．医歯薬出版

3) D.P.Greene・S.L.Roberts 著／嶋田智明 監訳：キネシオロジー 日常生活活動の運動学．医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法と作業療法の基礎学問として運動学総論から続く重要な科目であり、さらに運動学実習、臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学実習	担当者	境 隆弘		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動学総論、運動学各論により修得した基礎知識・技術を踏まえ、実習を行うことによって理解を深め、理学療法・作業療法の基礎となる人体の運動について学ぶ

■ 目 標

基本動作・歩行の関節運動学（Kinematics）・運動力学的分析（Kinetics）が出来るようになる

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定の他、これまでに学んだ運動学総論、運動学各論との関連性を学ぶ
- 第2回 基本動作の Kinematics ① 寝返り、起き上がり、立ち上がり動作の運動学的データ収集実習を行う
- 第3回 基本動作の Kinematics ② ①で得られたデータに対し、運動学的解釈を討議する
- 第4回 基本動作の Kinematics ③ ②で得られた運動学的解釈をグループ発表する
- 第5回 歩行の Kinematics ① 歩行時の運動学的データ収集実習を行う
- 第6回 歩行の Kinematics ② ①で得られたデータに対し、運動学的解釈を討議する
- 第7回 歩行の Kinematics ③ ②で得られた運動学的解釈をグループ発表する
- 第8回 立ち上がり動作の Kinetics ① 立ち上がり動作の運動力学的データ収集実習を行う
- 第9回 立ち上がり動作の Kinetics ② ①で得られたデータに対し、運動力学的解釈を討議する
- 第10回 立ち上がり動作の Kinetics ③ ②で得られた運動力学的解釈をグループ発表する
- 第11回 歩行の Kinetics ① 歩行時の運動力学的データ収集実習を行う
- 第12回 歩行の Kinetics ② ①で得られたデータに対し、運動力学的解釈を討議する
- 第13回 歩行の Kinetics ③ ②で得られた運動力学的解釈をグループ発表する
- 第14回 総括① 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う
- 第15回 総括② 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 70% 発表・レポート 30%
(学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点)

■ 教 科 書

中村隆一、斎藤宏 著：「基礎運動学」，医歯薬出版。

■ 参 考 書

- 1) 嶋田智明ほか監訳：筋骨格系のキネシオロジー，医歯薬出版
- 2) D.P.Greene・S.L.Roberts 著／嶋田智明 監訳：キネシオロジー 日常生活活動の運動学，医歯薬出版
- 3) 臨床歩行分析研究会 監修：臨床歩行分析入門，医歯薬出版
- 4) 武田 功ほか監訳：ペリー 歩行分析 正常歩行と異常歩行，医歯薬出版
- 5) 鎌倉矩子ほか編：PT・OT 学生のための運動学実習，三輪書店

■ 留 意 事 項

運動学総論・各論から続く重要な科目であり、理学療法と作業療法の基礎学問なのでしっかりと学んでほしい。

授業科目	人間発達学	担当者	横田 浩子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

人間の生涯にわたる、身体・運動・感覚・認知・情緒・心理・社会面の発達について学習する

■ 目 標

理学療法士に必要な人間の生涯にわたる人間発達についての基礎的知見を得る

■ 授 業 計 画

- 第1回 人間発達学総論：人間とは
- 第2回 人間発達学総論：人間発達学とは
- 第3回 人間発達学総論：発達の研究法・発達の課題・発達の原則
- 第4回 人間発達学各論：胎児期・新生児期の発達と姿勢反射
- 第5回 人間発達学各論：乳児期の発達Ⅰ
- 第6回 人間発達学各論：乳児期の発達Ⅱ
- 第7回 人間発達学各論：幼児期の発達Ⅰ
- 第8回 人間発達学各論：幼児期の発達Ⅱ
- 第9回 人間発達学各論：学童期の発達
- 第10回 人間発達学各論：障害児の発達と支援
- 第11回 人間発達学各論：青年期の発達Ⅰ
- 第12回 人間発達学各論：青年期の発達Ⅱ
- 第13回 人間発達学各論：成人期の発達Ⅰ
- 第14回 人間発達学各論：成人期の発達Ⅱ
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

試験結果100%

■ 教 科 書

生涯人間発達学

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床心理学	担当者	吉住 優美		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学は、いわゆる「こころの病」について学ぶものですが、病は誰のこころにも存在している以上、自分自身をはじめとするすべての人のこころについて学ぶものでもあります。身近な素材や臨床事例を用いて、臨床心理学の理論や概念について学びます。

■ 目 標

単に知識を所有するのではなく、学んだことを普段の生活や専門職としての活動に活かせるよう習得することを目指します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床心理学の歴史と現状
- 第2回 臨床心理査定（1） 意義と方法（観察、面接、検査）、査定面接（体験）
- 第3回 臨床心理査定（2） 知能検査・発達検査（体験、事例）
- 第4回 臨床心理査定（3） 人格検査（体験）
- 第5回 臨床心理査定（4） 人格検査（事例）
- 第6回 精神病理（1） 歴史的背景と類型
- 第7回 精神病理（2） 人格構造論の観点から
- 第8回 精神病理（3） 発達論の観点から
- 第9回 精神病理（4） 原子価論の観点から
- 第10回 臨床心理面接（1） 目的、日本の現状、基本的技法
- 第11回 臨床心理面接（2） 代表的技法（来談者中心療法、行動療法、精神分析）
- 第12回 臨床心理面接（3） 事例を用いた理解
- 第13回 社会病理（1） 社会心理学と臨床心理学、その他の関連領域
- 第14回 社会病理（2） 社会病理の実践、組織運営への活用
- 第15回 まとめ 各種専門職の連携について

■ 評価方法

講義への参加・貢献（講義レポート等）：40%、定期試験：60%

■ 教 科 書

特に指定しません。

■ 参 考 書

適宜紹介します。

■ 留 意 事 項

質問や感想を積極的に発信してください。主体的な講義参加を期待します。

授業科目	病理学概論	担当者	富田 裕彦 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

■ 目 標
専門医療従事者に必須な病理学的知識を身につける。

■ 授 業 計 画
第1回 1. 病因論と退行性病変 第2回 2. 進行性病変 第3回 3. 奇形を含む先天異常 第4回 4. 炎症・アレルギー 第5回 5. 循環障害 第6回 6. 腫瘍 第7回 7. 外傷性変化等 第8回 8. まとめ

■ 評 価 方 法
試験60%、小テスト40%

■ 教 科 書
標準理学療法学・作業療法学専門基礎部門 病理学 梶原博毅、横井豊治（医学書院）

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	一般臨床医学	担当者	弓場 健義・ほか		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

外科、泌尿器科、皮膚科、産婦人科、耳鼻咽喉科、眼科の各領域について概説する。

■ 目 標

上記の各領域の基礎的学習の理解

■ 授 業 計 画

- 第1回 上部消化管外科（食道、胃、十二指腸）
- 第2回 下部消化管外科（結腸、直腸、肛門、小腸）
- 第3回 肝胆膵外科（肝臓、胆嚢、膵臓）
- 第4回 乳腺・甲状腺外科
- 第5回 泌尿器科総論（症状と病態生理、泌尿器科的検査）、代表的な疾患（尿路感染症、尿路結石症、腎・尿路の腫瘍）
- 第6回 代表的な疾患（生殖器の腫瘍、神経因性膀胱・尿失禁と尿路管理）
- 第7回 皮膚科学①
- 第8回 皮膚科学②
- 第9回 婦人科学
- 第10回 産科学
- 第11回 感覚器の機能解剖と感覚生理概論、特に聴覚と平衡感覚
- 第12回 めまいと平衡障害、その診断とリハビリ。バランス感覚とスポーツ医学。宇宙での平衡障害の予防とリハビリ
- 第13回 眼科学①
- 第14回 眼科学②
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

試験 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	内科学	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

循環器疾患、呼吸器疾患など生体内部の障害について、その病因、病態、特徴的に現れる症状、一般的に行われる検査と診断、治療法、予後などについて基礎的な学習をする。

■ 目 標

1. 代表的な内科疾患について、その病因、病態、臨床像、診断と治療法を理解する
2. 内科疾患患者におけるリハビリテーションの留意事項を説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 内科学総論
- 第2回 循環器総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第3回 循環器疾患（1） 高血圧、虚血性心疾患
- 第4回 循環器疾患（2） 弁膜症、先天性心疾患、心筋疾患
- 第5回 循環器疾患（3） 心不全、不整脈、その他
- 第6回 循環器疾患（4） 大動脈疾患、末梢動脈および静脈疾患
- 第7回 呼吸器総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第8回 呼吸器疾患（1） 感染性肺疾患、アレルギー性肺疾患
- 第9回 呼吸器疾患（2） 慢性閉塞性肺疾患、間質性肺疾患
- 第10回 呼吸器疾患（3） 肺腫瘍、肺循環障害
- 第11回 呼吸器疾患（4） 呼吸不全、呼吸調節の異常、胸膜疾患、その他
- 第12回 消化器総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第13回 消化器疾患（1） 食道疾患、胃の疾患
- 第14回 消化器疾患（2） 小腸、大腸の疾患
- 第15回 消化器疾患（3） 肝疾患
- 第16回 消化器疾患（4） 胆道疾患、膵疾患、その他
- 第17回 代謝、内分泌総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第18回 代謝、内分泌疾患（1） 糖尿病、脂質代謝異常、その他
- 第19回 代謝、内分泌疾患（2） 下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患
- 第20回 腎総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第21回 腎疾患（1） 糸球体疾患、全身性疾患と腎障害
- 第22回 腎疾患（2） 腎不全、電解質異常、その他
- 第23回 免疫、アレルギー総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第24回 免疫、アレルギー疾患（1） アレルギー疾患
- 第25回 免疫、アレルギー疾患（2） 膠原病、免疫不全症
- 第26回 血液、造血器疾患（1） 赤血球系疾患
- 第27回 血液、造血器疾患（2） 白血球系疾患、出血性疾患
- 第28回 中毒および環境要因による疾患
- 第29回 リハビリテーションと内科臨床について
- 第30回 総復習

■ 評価方法

定期試験 80% 出席、態度 20%

■ 教科書

「ナースの内科学 第8版」 中外医学社 （2010年）

■ 参考書

「標準理学療法学作業療法学 専門基礎分野 内科学 第2版 」 医学書院 （2004年）

「臨床病態学 1巻、2巻」 NOUVELLE HIROKAWA （2006年）

■ 留意事項

内科学を学習するにあたって、解剖学、生理学、病理学をよく理解しておく必要があります。授業の前に、復習をしておいてください。内科各論の感染症については、前期の感染症学において詳しく学習します。

授業科目	整形外科学	担当者	中村 憲正		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

人体の運動器にかかわる疾患の診断と治療について学習する。

■ 目 標

運動器疾患の基礎となる骨・関節、筋・神経の構造や病態について十分な知識を得る。特に、外傷学については、重点的に学習し、臨床の場で必要とされる知識体系を構築する。また、整形外科的な診断法や治療法について臨床に必要な知識を得る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 整形外科総論 1 歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靱帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
- 第2回 整形外科総論 2 歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靱帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
- 第3回 骨折と脱臼 1
骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
- 第4回 骨折と脱臼 2
骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
- 第5回 骨と関節の感染症
骨と関節の感染症につき学ぶ。
- 第6回 関節リウマチ
関節リウマチとその類縁疾患につき学ぶ。
- 第7回 慢性関節疾患 —— 退行変性による慢性関節疾患につき学ぶ。
- 第8回 壊死性骨疾患 —— 骨壊死の特徴につき学ぶ。
- 第9回 骨系統疾患 —— 骨系統疾患につき学ぶ。
- 第10回 代謝性骨疾患 —— 代謝性骨疾患につき学ぶ。
- 第11回 腫瘍 1 —— 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
- 第12回 腫瘍 2 —— 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
- 第13回 予備日
- 第14回 予備日
- 第15回 脊椎と脊髄 1 —— 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
- 第16回 脊椎と脊髄 2 —— 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
- 第17回 股関節 —— 股関節疾患、外傷につき学ぶ。
- 第18回 膝関節 —— 膝関節疾患につき述べ、固有の治療法につき学ぶ。
- 第19回 膝のスポーツ傷害 1 —— 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
- 第20回 膝のスポーツ傷害 2 —— 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
- 第21回 足と足関節 1 —— 足と足関節の傷害につき学ぶ。
- 第22回 足と足関節 2 —— 足と足関節の傷害につき学ぶ。
- 第23回 下腿 —— 下腿の傷害につき学ぶ。
- 第24回 肩 —— 肩関節スポーツ傷害を中心に学び、最新治療に触れる。
- 第25回 肘 —— 肘関節疾患、傷害につき学ぶ。
- 第26回 手 1 —— 手の外科につき学ぶ。
- 第27回 手 2 —— 手の外科につき学ぶ。
- 第28回 予備日
- 第29回 予備日
- 第30回 予備日

■ 評 価 方 法
試験100%
■ 教 科 書
標準整形外科（医学書院）
■ 参 考 書
■ 留 意 事 項

授業科目	臨床神経学	担当者	阿部 和夫		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2 年	総単位数	2 単位
	作業療法専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床神経学は、前半では、神経疾患について、後半では主に高次脳機能障害についての講義を行います。臨床神経学を理解することは、理学療法士・作業療法士を目指す学生にとって不可欠であるにも関わらず、大脳から筋肉あるいは感覚器に至る広汎な解剖学的領域に關与する多彩な疾患を学習することに対して負担を感じる学生が多いかもしれません。本講義では、神経・筋疾患でみられる主要な疾患とそれにともなう障害の特性について、その疾患概念、病態、発症機構、神経科学的検査についての基礎知識および治療について学習します。一方通行の授業ではなく、学生が積極的に学習に取り組む自主的な学習態度を期待します

■ 目 標

理学療法士および作業療法士としての臨床活動に最低限必要な臨床神経学の知識を習得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 神経内科学総論
- 第2回 機能性疾患（頭痛など）
- 第3回 脳血管障害
- 第4回 脳腫瘍
- 第5回 運動ニューロン病
- 第6回 脊髄小脳変性症
- 第7回 パーキンソン病
- 第8回 パーキンソン病以外の錐体外路疾患
- 第9回 脱随疾患
- 第10回 感染症
- 第11回 脊髄疾患
- 第12回 末梢神経障害（ニューロパチーなど）
- 第13回 筋疾患
- 第14回 神経筋接合部での疾患
- 第15回 てんかん（失神との鑑別）
- 第16回 高次脳機能障害総論
- 第17回 脳血管の解剖と画像（1）
- 第18回 脳血管の解剖と画像（2）
- 第19回 高次脳機能障害に関係した電気生理学
- 第20回 高次脳機能障害の診察法
- 第21回 失語症とその関連疾患
- 第22回 視覚の高次脳機能障害
- 第23回 聴覚の高次脳機能障害
- 第24回 感覚の高次脳機能障害
- 第25回 運動の高次脳機能障害
- 第26回 失音楽
- 第27回 記憶障害
- 第28回 失行
- 第29回 身体認識の障害
- 第30回 認知症

■ 評価方法

試験100%

■ 教科書

なし

■ 参考書

なし

■ 留意事項

私語など、他の受講者および講義をしている私の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。

授業科目	臨床運動学	担当者	境 隆弘		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	PT=必修 OT=選択

■ 内 容

運動学総論、運動学各論、運動学実習で修得した基礎運動学の知識を踏まえ、疾患あるいは機能障害を有した際の人体の構造の変化や身体運動の破綻について学ぶ

■ 目 標

疾患あるいは機能障害を有した際の人体の構造の変化や身体運動の破綻について理解し、運動療法や生活指導に結びつけることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定の他、これまでに学んだ基礎運動学との関連性を学ぶ
- 第2回 病態運動学総説
疾患あるいは機能障害を有した際の人体の構造の変化について学ぶ
- 第3回 体幹の病態運動学
体幹に疾患あるいは機能障害を有した際の構造の変化および身体運動の破綻について学ぶ
- 第4回 股関節の病態運動学
股関節に疾患あるいは機能障害を有した際の構造の変化および身体運動の破綻について学ぶ
- 第5回 膝関節の病態運動学
膝関節に疾患あるいは機能障害を有した際の構造の変化および身体運動の破綻について学ぶ
- 第6回 足関節の病態運動学
足関節に疾患あるいは機能障害を有した際の構造の変化および身体運動の破綻について学ぶ
- 第7回 肩関節の病態運動学
肩関節に疾患あるいは機能障害を有した際の構造の変化および身体運動の破綻について学ぶ
- 第8回 肘関節・前腕の病態運動学
肘・前腕に疾患あるいは機能障害を有した際の構造の変化および身体運動の破綻について学ぶ
- 第9回 手関節・手指の病態運動学
手・手指に疾患あるいは機能障害を有した際の構造の変化および身体運動の破綻について学ぶ
- 第10回 異常歩行①
運動器に疾患あるいは機能障害を有した際の正常歩行の破綻について学ぶ
- 第11回 異常歩行②
神経系の疾患あるいは機能障害を有した際の正常歩行の破綻について学ぶ
- 第12回 異常歩行②
異常歩行について、演習を行い理解を深める
- 第13回 実技試験（口頭試問含む）
学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第14回 総括①
実技試験のフィードバックを含めて、本講義で学んだことについて復習、再確認を行う
- 第15回 総括②
本講義で学んだことについて復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教科書

中村隆一、斎藤宏 著：「基礎運動学」，医歯薬出版。

■ 参考書

- 1) 嶋田智明ほか監訳：筋骨格系のキネシオロジー．医歯薬出版
- 2) D.P.Green・S.L.Roberts 著／嶋田智明 監訳：キネシオロジー 日常生活活動の運動学．医歯薬出版
- 3) 富士武史監修：ここがポイント 整形外科疾患の理学療法．金原出版

■ 留意事項

基礎運動学にとどまらず、病態運動学の知識が理学療法と作業療法には必要である。しっかり学んでほしい。

授業科目	精神医学	担当者	小畔 美弥子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

主な精神疾患について症状・診断・治療を学ぶ

■ 目 標

精神医学に興味を持ち、基本知識を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神医学とは / 精神疾患の分類
- 第2回 精神症状とその評価
- 第3回 認知症・器質性精神障害
- 第4回 アルコール・薬物関連障害
- 第5回 統合失調症
- 第6回 気分（感情）障害
- 第7回 不安障害
- 第8回 人格障害
- 第9回 摂食障害・睡眠障害など
- 第10回 知的障害・発達障害
- 第11回 児童精神医学
- 第12回 治療・リハビリテーション①
- 第13回 治療・リハビリテーション②
- 第14回 司法・福祉・そのほか
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験70%，受講態度（積極的な発言など）15%・提出課題15%

■ 教 科 書

専門医がやさしく語るはじめての精神医学， 渡辺雅幸著， 中山書店 2008

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	精神科リハビリテーション学	担当者	足立 一		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	PT＝選択 OT＝必修

■ 内 容

1. 精神医療の歴史と現状について.
2. 精神科リハビリテーションのプロセス.
3. 精神疾患の回復過程と障害に対する支援のソフトとハード.

■ 目 標

1. 精神医療の歴史と現状を理解し、精神科リハビリテーションの理念を確立する.
2. 精神科リハビリテーションのプロセスを学び、チーム医療、PT・OTの役割を理解する.
3. 精神疾患の回復過程と障害に対する支援を学ぶ.

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神科リハビリテーション（医療）における世界の歴史。
キーワード；道徳療法，賦活療法，早発性痴呆，精神分裂病，精神分析，
- 第2回 精神科リハビリテーション（医療）における日本の歴史。
キーワード；呉秀三，小林八郎（生活療法），作業療法，閉鎖医療，開放医療，地域精神医療
- 第3回 精神科リハビリテーション（医療）に関係する法規。
キーワード；精神衛生法，精神保健福祉法，障害者基本法，自立支援法，精神保健福祉手帳
- 第4回 精神科リハビリテーション（医療）のあり方を考える（Ⅰ）。
キーワード；閉鎖医療，開放医療，管理，規則，自由，責任，個人，集団，偏見，自己決定，
QOL
- 第5回 精神科リハビリテーション（医療）のあり方を考える（Ⅱ）；患者と家族が求める精神医療。
キーワード；24時間支援，訪問医療，家族，地域，エンパワーメント，リカバリー，インクルーシブ
- 第6回 精神障害の構造。
キーワード；ICIDH，ICF，統合失調症，発症仮説，疾病と障害
- 第7回 精神科リハビリテーションのプロセスⅠ（回復過程）。
統合失調症，急性期，回復（寛解）期，慢性期，社会復帰期
- 第8回 精神医療における各種治療とリハビリテーション。
キーワード；薬物療法，作業療法，集団療法，社会生活技能訓練，心理教育，家族療法
- 第9回 精神科における評価と面接。
キーワード；精神療法，精神症状評価，社会生活技能評価
- 第10回 精神科リハビリテーションと作業療法。
キーワード；Activity，非言語的コミュニケーション，治療構造
- 第11回 精神科リハビリテーションのプロセスⅡ。
薬物依存症，自助グループ，断酒会，気分障害，
- 第12回 精神科リハビリテーションにおける各職種とチームワーク。
キーワード；医師，臨床心理士，精神保健福祉士，保健士，作業療法士，看護師
- 第13回 精神障害者のための社会資源（支援）の概要。
キーワード；デイケア，ナイトケア，精神保健福祉センター，保健所，自立支援法内施設，ACT
- 第14回 精神障害者に対する就労支援。
キーワード；援助付き雇用，IPSモデル，精神障害者職場復帰支援（リワーク）事業，社会適応
訓練事業
- 第15回 司法領域における精神障害リハビリテーション。
キーワード；医療観察保護法，刑事施設及び受刑者の処遇に関する法律，医療刑務所，社会復帰
促進

■ 評価方法

ペーパー試験100%（但し，欠席は1回につき5点，遅刻・早退および受講態度不良は1回につき3点減点）

■ 教科書

【図説】精神障害リハビリテーション，著者：野中 猛，出版社：中央法規出版株式会社

■ 参考書

■ 留意事項

作業療法学専攻の学生には精神障害治療学のアウトラインであること，理学療法学専攻の学生には対象者に対する基本的な理解の仕方を学び，加えて精神医療を理解することである．この点を踏まえて受講すること．

授業科目	小児科学	担当者	吉原 直子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

小児科学

■ 目 標

小児の特徴と発達について学び、セラピストとしてどうかかわっていくかについて学習する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児の発育と発達
- 第2回 小児の生活と小児保健
- 第3回 出生前小児科学と新生児疾患
- 第4回 小児内科学（循環器、消化器、泌尿器）
- 第5回 小児の感染症疾患
- 第6回 小児の呼吸器疾患とアレルギー疾患
- 第7回 小児の代謝、内分泌疾患
- 第8回 中枢神経疾患①
- 第9回 中枢神経疾患②
- 第10回 中枢神経疾患③
- 第11回 神経、筋疾患①
- 第12回 神経、筋疾患②
- 第13回 発達障害
- 第14回 心身症
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

出席、学習への取り組み20%、定期試験80%

■ 教 科 書

最新育児小児病学改訂第6版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	老年医学	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

老年期にみられる障害の特性を理解するために老化のメカニズムや生理学的特性、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化、高齢者を取りまく地域の問題など幅広く学習する。また、老化に伴い特徴的に現れる疾患・障害とその病態についても学習する。

■ 目 標

1. 老化に伴う生理機能変化、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化を理解する
2. 老化に伴い特徴的に現れる疾患・障害とその病態について説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 老年医学総論 (1) 老化と老年病の考え方
- 第2回 老年医学総論 (2) 加齢に伴う生理機能変化
- 第3回 老年医学総論 (3) 高齢者に多い症候とそのアセスメントについて
- 第4回 老年医学総論 (4) 老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化と高齢者へのアプローチ
- 第5回 老年医学各論 (1) 心、血管機能の老化と循環器疾患
- 第6回 老年医学各論 (2) 呼吸機能の老化と呼吸器疾患
- 第7回 老年医学各論 (3) 消化機能の老化と消化器疾患
- 第8回 老年医学各論 (4) 神経機能の老化と疾患
- 第9回 老年医学各論 (5) 内分泌、代謝機能の老化と疾患、腎、排泄機能の老化と疾患
- 第10回 老年医学各論 (6) 骨、運動機能の老化と疾患、増血機能の老化と疾患
- 第11回 老年医学各論 (7) 感覚機能の老化、加齢による免疫機能の変化
- 第12回 高齢者を取りまく地域の諸問題について
- 第13回 高齢者の医療、介護、福祉、保健
- 第14回 高齢者のリハビリテーション
- 第15回 総復習

■ 評価方法

定期試験 80%、出席、態度 20%

■ 教 科 書

「標準理学療法学作業療法学 専門基礎分野 老年学 第3版」 医学書院 (2009年)

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	高次脳機能障害学	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

脳血管障害を中心とした中枢神経疾患に対するリハビリテーションを行うために、高次脳機能障害についてのそれぞれの症状や障害機序を理解し、鑑別に必要な簡単な評価技能と適切な関わり方など、基礎的内容について学ぶ。

■ 目 標

高次脳機能障害について症状や簡単な評価・鑑別方法などを習得し、高次脳機能の基本的知識を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 高次脳機能障害の概要
大脳がどのように情報を処理しているのかを学び、損傷によって生じる障害の概要を理解する。
- 第2回 脳と高次脳機能 高次脳機能に関わる大脳の各領域の名称および脳の構造を理解する。
- 第3回 注意障害 注意障害の特性について学び、高次脳機能への影響を理解する。
- 第4回 記憶障害 (1) 記憶の種類、記憶のメカニズム、記憶障害の特徴を理解し、簡単な評価について学ぶ。
- 第5回 記憶障害 (2) 記憶障害症状を理解した上で、介入法を学ぶ。
- 第6回 半側空間無視
半側空間無視が生じるメカニズムと症状を理解し、生活に与える影響や介入法を学ぶ。
- 第7回 失認 失認の症状およびメカニズムを理解し、簡易な評価法と介入法を学ぶ。
- 第8回 地誌的見当識障害
地誌的見当識障害の種類およびその特徴を理解し介入法を学ぶ。
- 第9回 失行 失行が生じるメカニズムと症状をよく理解し、評価法と介入法を学ぶ。
- 第10回 失語症 失語症の症状について理解し、障害メカニズムを学ぶ。
- 第11回 遂行機能障害
症状と障害メカニズムを理解し、適切な評価法と介入法を学ぶ。
- 第12回 認知症 認知症の種類とその症状について理解し、評価法と関わり方を学ぶ。
- 第13回 その他の高次脳機能障害
出現頻度の比較的に少ない高次脳機能障害を中心に症状および介入法を学ぶ。
- 第14回 脳外傷による高次脳機能障害
脳外傷による高次脳機能障害の特徴を学び、社会的問題となっている事象について考察を深める。
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

定期試験60%、小テスト20%、出席点20%

■ 教 科 書

石合純夫著 「高次脳機能障害学」 医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

鈴木浩治、他「高次脳機能障害マエストロシリーズ③リハビリテーション評価」医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法概論	担当者	石倉 隆		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法や理学療法士の概略を理解し、その資質向上と業務把握を目的とする。「理学療法学」は学問体系が構築されつつあるが、人を対象とする医療では、学問としてだけでなく実際の臨床も意識できるように工夫しながら教授し、実学としての「理学療法学」理解を目指す。

■ 目 標

理学療法は、医学であり医療である。学問であり臨床である。この二つをバランスよく習得し、学問としての理学療法学を evidence として使え、実学としての理学療法を技術として使える理学療法士を目指せる素養を身に付ける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション 理学療法とは 理学療法士に関連する法律 理学療法士の活動分野 医療・保健福祉・教育 病期 理学療法の組織：現在の理学療法を取り巻く問題点も教授しながら、今後学んでいく理学療法の何に着眼して学習していくのかを考えて講義に臨む。
- 第2回 理学療法の対象疾患1：脳疾患、脊髄疾患、リウマチ、小児疾患、末梢神経障害、関節疾患、外傷の各対象疾患について、疾患の概要と理学療法の特徴を解説する。
- 第3回 理学療法の対象疾患2：神経筋疾患、脊椎疾患、内部疾患、抹消循環障害、切断、高齢者、その他の各対象疾患について、疾患の概要と理学療法の特徴を解説する。
- 第4回 理学療法評価1（理学療法過程）：過程、理学療法評価の目的、方法、時期、処方・指示、情報収集、問診、検査・測定に至るまでの理学療法過程とその方法を詳細に教授する。
- 第5回 理学療法評価2（スクリーニングバッテリーと検査・測定概論）：SIASやUPDRSに代表される障害を多方面から簡潔に評価できるスクリーニング方法と各障害を詳細にとらえる検査・測定方法の概略を解説する。
- 第6回 理学療法評価3（検査・測定方法の選択と結果の読解、統合・解釈と問題点抽出）：対象者の障害を正しくとらえるには、検査・測定の方法を正しく選択し、情報、問診、検査・測定結果がなぜそのような結果を示したのかを、一つの結果のみでなく複数の結果を踏まえて考察することが重要である。この点を十分に理解する。
- 第7回 理学療法評価4（目標設定、予後・帰結予測と治療計画・プログラム立案、再評価の重要性、臨床診断の重要性）：目標の設定やプログラム立案には予後・帰結予測が重要であることを説く。
- 第8回 EBMの実践、シングルケーススタディ：科学的根拠に基づいた客観的な機能予後予測や治療方針の決定を行っていく必要がある。また、EBMに活用したいのが、1例を客観的に深く追求するシングルケーススタディ。これらの重要性和関係を解説する。
- 第9回 リハビリテーションカンファレンス：リハビリテーションカンファレンスの重要性和必要性を、実際の医療現場で行われたリハビリテーションカンファレンスを題材に解説する。
- 第10回 運動療法1（関節可動域運動、筋力トレーニング）：関節可動域運動、筋力トレーニングの解剖学的、生理学的根拠、運動学的視点から臨床への応用と方法、適応について、最新の資料をもとに概観する。
- 第11回 運動療法2（バランストレーニング、ストレッチ）：バランストレーニング、ストレッチの解剖学的、生理学的根拠、運動学的視点から臨床への応用と方法、適応について、最新の資料をもとに概観する。
- 第12回 運動療法3（基本動作練習、有酸素運動）：基本動作練習、有酸素運動の解剖学的、生理学的根拠、運動学的視点から臨床への応用と方法、適応について、最新の資料をもとに概観する。
- 第13回 物理療法、日常生活活動、装具の基礎知識、環境整備の基礎知識：物理療法を専門とする医師、理学療法士が著した論文をもとに、物理療法の概略を説明する。また、補装具、環境整備の基礎、日常生活活動を、事例を通して概観する。
- 第14回 クリニカルパス、地域連携パス、理学療法（士）の今日の問題：理学療法（士）が抱える今日の問題を、過去を振り返ったうえで、なぜ今日のような問題が起こってきたのかを考え、今後、理学療法士として活躍する学生諸君が、どのように直面する問題を打開していくのかのヒントを与えたい。
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

単位修得試験（定期試験）受験資格のある者に対して、試験のみで評価する。

■ 教科書

教科書を使用しない。開講当初に資料を配布する。

■ 参考書

細田多穂・他「理学療法入門テキスト」南江堂

■ 留意事項

講義では、個人情報に係る資料も提示する。その取り扱いには十分注意し、学外でみだりに他言しないように心がけること。

授業科目	理学療法障害学	担当者	洲崎 俊男		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法と障害の接点や障害モデルの知識と理解を深める。国際障害分類から国際生活機能分類への移行についての知識を深める。障害に関する各論として、理学療法において直面する主な障害について、早期にその概念や知識を修得する。臨床的理解と感性を更に深めるため症例課題を用いて2回の臨床思考のトレーニングも行う。

■ 目 標

理学療法と障害との接点が理解でき、障害に関する世界的変遷も理解できる。具体的な主な障害（痛み・疼痛、拘縮・強直、筋力低下、歩行障害、運動制御障害（中枢性障害）等）についての理解と知識を深め、理学療法に関わる主な障害を総合的に修得する。

■ 授 業 計 画

第1回 リハビリテーション医療の中での理学療法の位置づけ。 理学療法と障害との接点。障害モデル。
第2回 国際障害分類から国際生活機能分類へ
第3回 国際生活機能分類 概要
第4回 国際生活機能分類 詳細
第5回 理学療法が対象とする主な障害【各論】 痛み・疼痛
第6回 関節可動域制限・拘縮・強直
第7回 筋力低下・筋萎縮・筋疲労
第8回 歩行障害Ⅰ（整形外科系疾患）
第9回 臨床思考Ⅰ（整形外科系障害例での演習） 提出課題Ⅰ
第10回 運動制御障害Ⅰ 中枢性神経麻痺（錐体路系障害）
第11回 運動制御障害Ⅱ 中枢性神経麻痺（錐体外路系障害・協調性障害・平衡機能障害）
第12回 運動制御障害Ⅲ 末梢性神経麻痺
第13回 感覚系障害 表在・深部感覚・複合感覚
第14回 歩行障害Ⅱ（中枢神経系疾患）
第15回 臨床思考Ⅱ（中枢神経系障害例での演習）レポート課題 提出課題Ⅱ

■ 評価方法

筆記試験（60%）、提出課題（20%）、出席状況（20%、無断欠席や遅刻はマイナス評価）の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

理学療法概論、奈良勲編、医歯薬出版、障害別・ケースで学ぶ理学療法臨床思考ーPBLで考え進める、嶋田智明編、文光堂

■ 留 意 事 項

2回の提出課題あり。

授業科目	理学療法研究法	担当者	後藤 昌弘		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

研究計画書の作成から発表までのプロセスをグループ模擬研究を通して経験します。

■ 目 標

卒業研究を自ら進めるために、研究計画書の作成、データ収集、統計処理、論文執筆、発表、の各プロセスに必要な知識・技術の修得を目指します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション、研究の目的、研究の進め方
- 第2回 論文の構成、文献検索の方法、文献検索の方法、模擬研究テーマ決定
- 第3回 文献 Review の作成
- 第4回 批判的論文の読み方と書き方
- 第5回 研究論文の種類
- 第6回 研究テーマの見つけ方
- 第7回 研究計画書のフォーマットとその内容、仮説の設定、文献リストの作成 -その1-
- 第8回 研究計画書のフォーマットとその内容、仮説の設定、文献リストの作成 -その2-
- 第9回 データ要約、図表の作成方法
- 第10回 発表の準備と言葉使い、スライドの作成、ジャーナル投稿
- 第11回 模擬研究の研究計画書作成
- 第12回 模擬研究の研究計画書提出及びデータ収集
- 第13回 模擬研究データ要約及び発表準備
- 第14回 模擬研究発表
- 第15回 模擬研究論文提出

■ 評価方法

模擬研究70%（研究計画書20%、発表10%、論文40%）、その他課題30%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学Ⅰ	担当者	今井 公一		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法評価についてその対象や方法について総論的な理解をした上で、基本的な考え方や評価に必要な臨床的能力について学習します。また後半は具体的な検査・測定項目について学びます。

■ 目 標

学んだ基礎概念や基礎知識を活用して実際に行われている理学療法評価について理解できることを目標とします。

■ 授 業 計 画

- 第1回 理学療法評価学総論
- 第2回 理学療法評価の現代的視点
- 第3回 理学療法評価における臨床思考プロセス
- 第4回 理学療法評価に必要な臨床的能力について
- 第5回 理学療法評価と安全性 (1)
- 第6回 理学療法評価と安全性 (2)
- 第7回 理学療法評価各論 形態・測定 (1)
- 第8回 理学療法評価各論 形態・測定 (2)
- 第9回 理学療法評価各論 関節可動域測定 (1)
- 第10回 理学療法評価各論 関節可動域測定 (2)
- 第11回 理学療法評価各論 関節可動域測定 (3)
- 第12回 理学療法評価各論 関節可動域測定 (4)
- 第13回 理学療法評価各論 関節可動域測定 (5)
- 第14回 理学療法評価各論 関節可動域測定 (6)
- 第15回 理学療法評価学Ⅰ (まとめ)

■ 評 価 方 法

筆記試験90% (小テスト含む)、出席10%

■ 教 科 書

1. ICF の理解と活用、2. 理学療法評価法 第2版、3. 絵で見る脳と神経、
4. 新徒手筋力検査法、5. ベッドサイドの神経の診かた
6. 運動療法のための機能解剖学的触診技術 (上肢・下肢)

■ 参 考 書

1. 理学療法評価法 神稜文庫 2. 理学療法評価学テキスト 南江堂 3. 症候障害学 文光堂
4. 実践 MOOK 理学療法プラクティス リスク管理 文光堂
5. 在宅・訪問リハビリテーション リスク管理実践テキスト 診断と治療社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学Ⅱ	担当者	今井 公一		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法評価に必要な検査・測定項目について学びます。

■ 目 標

学んだ検査・測定項目について模倣でき、また実践されている理学療法評価について理解できることを目標とします。

■ 授 業 計 画

第1回 理学療法評価各論 筋力 (1)
第2回 理学療法評価各論 筋力 (2)
第3回 理学療法評価各論 筋力 (3)
第4回 理学療法評価各論 筋力 (4)
第5回 理学療法評価各論 筋力 (5)
第6回 理学療法評価各論 筋力 (6)
第7回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (1)
第8回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (2)
第9回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (3)
第10回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (4)
第11回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (5)
第12回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (6)
第13回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (7)
第14回 理学療法評価各論 脳・神経機能 (8)
第15回 理学療法評価学Ⅱ (まとめ)
第15回

■ 評 価 方 法

筆記試験90% (小テスト含む)、出席10%

■ 教 科 書

1. ICF の理解と活用、2. 理学療法評価法 第2版、3. 絵で見る脳と神経、
4. 新徒手筋力検査法、5. ベッドサイドの神経の診かた
6. 運動療法のための機能解剖学的触診技術 (上肢・下肢)

■ 参 考 書

1. 理学療法評価法 神稜文庫 2. 理学療法評価学テキスト 南江堂
3. 症候障害学 文光堂 4. 実践 MOOK 理学療法プラクティス リスク管理 文光堂
5. 在宅・訪問リハビリテーション リスク管理実践テキスト 診断と治療社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学Ⅲ	担当者	今井 公一		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

検査・測定項目及び理学療法評価について学ぶとともに、対象者の生活像に応じた評価の方法について学習を進めます。

■ 目 標

学んだ検査・測定項目について模倣でき、また実践されている理学療法評価について理解できることを目標とします。

■ 授 業 計 画

- 第1回 理学療法評価各論 総合評価 (1)
- 第2回 理学療法評価各論 総合評価 (2)
- 第3回 理学療法評価各論 総合評価 (3)
- 第4回 理学療法評価各論 総合評価 (4)
- 第5回 理学療法評価各論 総合評価 (5)
- 第6回 理学療法評価各論 総合評価 (6)
- 第7回 理学療法評価各論 総合評価 (7)
- 第8回 理学療法評価各論 総合評価 (8)
- 第9回 理学療法評価 臨床適応 (1)
- 第10回 理学療法評価 臨床適応 (2)
- 第11回 理学療法評価 臨床適応 (3)
- 第12回 理学療法評価 臨床適応 (4)
- 第13回 理学療法評価 臨床適応 (5)
- 第14回 理学療法評価 臨床適応 (6)
- 第15回 理学療法評価学Ⅲ (まとめ)

■ 評 価 方 法

筆記試験90% (小テスト含む)、出席10%

■ 教 科 書

1. ICF の理解と活用、2. 図解理学療法検査・測定ガイド、3. 絵で見る脳と神経、
4. 新徒手筋力検査法、5. ベッドサイドの神経の診かた
6. 運動療法のための機能解剖学的触診技術 (上肢・下肢)

■ 参 考 書

1. 症候障害学 文光堂
2. 理学療法フィールドノート (1) ～ (4) 南江堂
3. 考える理学療法 評価から治療主義の選択 中枢神経疾患編 内部障害編 文光堂

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学実習	担当者	大槻 桂右		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

基本的な検査・測定技術の確認を行うと共に、臨床実習Ⅳで作成した「臨Ⅳ症例経験レポート」を使用して疾患・障害別に ICF の枠組みの中で評価結果を統合・解釈し、問題点抽出、目標設定、プログラム立案の演習を行う。

■ 目 標

疾患・障害別に ICF の枠組みの中で評価結果を統合・解釈し、問題点抽出、目標設定、プログラム立案ができるようになること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 「オリエンテーション」
Ⅰ.「基本的検査・測定技術の確認」
①深部腱反射、表在反射、瞳孔反射、病的反射
- 第2回 Ⅰ.「基本的検査・測定技術の確認」
②関節可動域検査
- 第3回 Ⅰ.「基本的検査・測定技術の確認」
③MMT（下肢）
- 第4回 Ⅰ.「基本的検査・測定技術の確認」
③MMT（上肢）
- 第5回 Ⅰ.「基本的検査・測定技術の確認」
④協調運動機能検査、⑤姿勢・動作分析
- 第6回 Ⅰ.「基本的検査・測定技術の確認」
⑤姿勢・動作分析
- 第7回 Ⅱ.「統合の解釈の方法」
検査結果の統合と解釈からプログラム立案の方法を学ぶ
- 第8回 Ⅲ.「疾患・障害別評価演習」：「臨Ⅳ症例経験レポート」を使用して、ICF の枠組みの中で、評価項目の選択、評価結果の統合と解釈、問題点抽出、目標設定、プログラム立案の演習を行う
1. 神経・筋系 ①片麻痺
- 第9回 Ⅲ.「疾患・障害別評価演習」
1. 神経・筋系 ①片麻痺
- 第10回 Ⅲ.「疾患・障害別評価演習」
1. 神経・筋系 ② Parkinson 病、③運動失調症
- 第11回 Ⅲ.「疾患・障害別評価演習」
2. 骨・関節系 ①腰痛症、②変形性股関節症
- 第12回 Ⅲ.「疾患・障害別評価演習」
2. 骨・関節系 ③肩インピンジメント症候群、④膝靱帯損傷
- 第13回 Ⅲ.「疾患・障害別評価演習」
3. 呼吸・循環・代謝系 ①呼吸機能不全
- 第14回 Ⅲ.「疾患・障害別評価演習」
3. 呼吸・循環・代謝系 ②心機能不全、③糖尿病
- 第15回 Ⅳ.「総合演習」
グループ毎に患者1症例の症例発表を行う

■ 評価方法

基本的検査・測定技術試験結果 30%
グループ発表 20%
出席（欠席・早退・遅刻で減点） 25%
授業への取り組み方 5%
臨床実習Ⅳ共通課題（臨Ⅳ症例経験レポート） 20%

■ 教科書

「標準理学療法学 理学療法評価学」 医学書院

■ 参考書

履修済み専門科目で使用した教科書及び資料
「標準理学療法学 臨床実習とケーススタディ」 医学書院
「考える理学療法 評価から治療手技の選択」 文光堂
「考える理学療法 中枢神経疾患編 評価から治療手技の選択」 文光堂
「考える理学療法 内部障害編 評価から治療手技の選択」 文光堂

■ 留意事項

臨床実習と同等の姿勢、服装、整容で臨むこと。
「基本的検査・測定技術の確認」の授業は、技術確認のためのテストの場とします。そのため、授業までにそれぞれの検査・測定が行えるように準備して下さい。

授業科目	理学療法評価学演習	担当者	大槻 桂右		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床実習Ⅲ終了後に理学療法評価学演習を集中講義し、臨床経験を活かした学習を実施する。

■ 目 標

理学療法見学、医療面接、検査・測定などを通じて把握した対象者の機能障害を整理し、問題の重み付けを行えるようになる。また、これまでに学習した評価技術の適応にあたって、臨床適応の際の課題について整理し理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 「理学療法における評価の位置づけ」
より良い理学療法評価を実践するために評価の位置づけからその本質を理解する。
- 第2回 「理学療法評価の進め方」
臨床における評価思考過程を認識し、思考を転回させるための評価の進め方について学習する。
- 第3回 「評価技術・他の臨床適応における課題整理」
実施記録のまとめを活用し、臨床実習Ⅲで経験した評価技術・他を整理する。
- 第4回 「評価技術の臨床適応における課題整理」
臨床実習Ⅲで経験した評価技術・他について、「できたこと」、「できなかったこと」を明確にする。
- 第5回 「評価技術・他の臨床適応の実際」
医療面接、トランスファー、車椅子操作などについて臨床経験を活かした学習を実施し理解を深める。
- 第6回 「評価技術・他の臨床適応の実際」
意識障害、精神状態、心拍数、血圧、炎症反応などの検査・測定と情報収集について臨床経験を活かした学習を実施し理解を深める。
- 第7回 「評価技術の臨床適応の実際」
高次神経機能障害に関する検査・測定と情報収集について臨床経験を活かした学習を実施し理解を深める。
- 第8回 「評価技術の臨床適応の実際」
反射・筋緊張・感覚に関する検査・測定と情報収集について臨床経験を活かした学習を実施し理解を深める。
- 第9回 「評価技術の臨床適応の実際」
姿勢・形態、関節可動域に関する検査・測定と情報収集について臨床経験を活かした学習を実施し理解を深める。
- 第10回 「評価技術の臨床適応の実際」
筋力、筋持久力に関する検査・測定と情報収集について臨床経験を活かした学習を実施し理解を深める。
- 第11回 「評価技術の臨床適応の実際」
呼吸、循環、代謝系の障害に関する検査・測定と情報収集について臨床経験を活かした学習を実施し理解を深める。
- 第12回 「機能障害の整理と重み付け」
機能障害と活動制限（能力障害）との関連についてグループ討議を行う。
- 第13回 「機能障害の整理と重み付け」
討議内容に考察を加え要点をまとめる。
- 第14回 「機能障害の整理と重み付け」
グループ発表の準備を行う。
- 第15回 「総合演習」
グループ発表を行い、発表内容について意見交換し、評価の臨床適応に関する理解を深める。

■ 評価方法

グループ発表 40%

出席（欠席・早退・遅刻で減点） 30%

授業への取り組み方 10%

臨床実習Ⅲ共通課題（実施記録のまとめ） 20%

■ 教科書

臨床実習Ⅲに係る履修済み専門科目（理学療法概論、理学療法評価学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動療法学Ⅰ、物理療法学）で使用した教科書及び資料を活用する。理学療法評価学演習開講時には、これらの科目の教科書及び資料を必ず持参すること。

■ 参考書

「標準理学療法学 理学療法評価学」 医学書院

「標準理学療法学 臨床実習とケーススタディ」 医学書院

「考える理学療法 評価から治療手技の選択」 文光堂

「考える理学療法 中枢神経疾患編 評価から治療手技の選択」 文光堂

「考える理学療法 内部障害編 評価から治療手技の選択」 文光堂

■ 留意事項

臨床実習Ⅲとの共通課題である「実施記録のまとめ」は、2年生後期補修期間中に本演習内で記録方法の説明を行う。

入学時に購入した角度計、打鍵器、メジャーを必ず持参すること。臨床実習と同等の姿勢、服装、整容で臨むこと。白衣(KC)、白い運動靴を着用し、爪は短く切り、派手なマニキュアは禁止する。アクセサリ、香水、派手な化粧は厳禁である。頭髪は清潔にし、派手に染色せず、長い髪はきちんと束ねる。派手な髪飾り等は付けけないこと。

授業科目	運動療法学Ⅰ	担当者	佐藤 睦美		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法における運動療法の位置づけと基本的概念を講義と演習から学ぶ

■ 目 標

各種運動療法技術の理論・目的・方法・適応について理解し、説明できること

■ 授 業 計 画

- 第1回 運動療法の概念（講義）： 運動療法の定義、目的、対象疾患
- 第2回 運動療法の概念（講義）： 運動療法の方法
- 第3回 関節可動域障害に対する運動療法： 関節の構造と運動（講義）
- 第4回 関節可動域障害に対する運動療法： 関節の構造と運動（演習）
- 第5回 関節可動域障害に対する運動療法： 関節拘縮（講義）
- 第6回 関節可動域障害に対する運動療法： 関節拘縮（演習）
- 第7回 関節可動域障害に対する運動療法： 関節可動域運動（講義）
- 第8回 関節可動域障害に対する運動療法： 関節可動域運動（演習）
- 第9回 関節可動域障害に対する運動療法： 軟部組織の力学的特性，ストレッチング（講義）
- 第10回 関節可動域障害に対する運動療法： 軟部組織の力学的特性，ストレッチング（演習）
- 第11回 筋力低下に対する運動療法： 筋の構造・収縮様式（講義）
- 第12回 筋力低下に対する運動療法： 筋の構造・収縮様式（演習）
- 第13回 筋力低下に対する運動療法： 筋張力の規定因子，筋力増強の原則（講義）
- 第14回 筋力低下に対する運動療法： 筋張力の規定因子，筋力増強の原則（演習）
- 第15回 筋力低下に対する運動療法： 筋力増強の効果，エネルギー機構（講義）
- 第16回 筋力低下に対する運動療法： 筋力増強の効果，エネルギー機構（演習）
- 第17回 持久力増強運動（講義）
- 第18回 持久力増強運動（演習）
- 第19回 協調性障害に対する運動療法： 運動の協調性（講義）
- 第20回 協調性障害に対する運動療法： 運動の協調性（演習）
- 第21回 協調性障害に対する運動療法： バランス障害（講義）
- 第22回 協調性障害に対する運動療法： バランス障害（演習）
- 第23回 一般的な運動療法についてのまとめ（講義・演習）
- 第24回 一般的な運動療法についてのまとめ（講義・演習）
- 第25回 固有受容性神経筋促通法（講義）
- 第26回 固有受容性神経筋促通法（演習）
- 第27回 組織の病態生理と修復（講義）
- 第28回 組織の病態生理と修復（演習）
- 第29回 講義全体のまとめ（講義・演習）
- 第30回 講義全体のまとめ（講義・演習）

■ 評価方法

小テスト（10%）、課題レポート（10%）、定期試験（80%）に出席状況を併せて評価する

■ 教科書

標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論（医学書院）

■ 参考書

理学療法学ゴールドマスターテキスト 2 運動療法学（メジカルビュー社）

ID ストレッチング（三輪書店）、ID ストレッチング DVD（三輪書店）

■ 留意事項

演習の時間は実技ができる服装で集合すること。

授業科目	運動療法学Ⅱ	担当者	佐藤 睦美		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動療法学Ⅰで学んだことを基礎として、運動療法の実際を実技演習を通じて学ぶ

■ 目 標

一般的な運動療法の実技を学生同士で実施することができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 コースガイダンス，総論
- 第2回 総論
- 第3回 肩関節に対する運動療法： 関節可動域運動①
- 第4回 肩関節に対する運動療法： 関節可動域運動②
- 第5回 肩関節に対する運動療法： 筋力増強運動①
- 第6回 肩関節に対する運動療法： 筋力増強運動②
- 第7回 肘関節に対する運動療法： 関節可動域運動
- 第8回 肘関節に対する運動療法： 筋力増強運動
- 第9回 手関節に対する運動療法： 関節可動域運動
- 第10回 手関節に対する運動療法： 筋力増強運動
- 第11回 股関節に対する運動療法： 関節可動域運動①
- 第12回 股関節に対する運動療法： 関節可動域運動②・筋力増強運動①
- 第13回 股関節に対する運動療法： 筋力増強運動②
- 第14回 膝関節に対する運動療法： 関節可動域運動①
- 第15回 膝関節に対する運動療法： 関節可動域運動②
- 第16回 膝関節に対する運動療法： 筋力増強運動①
- 第17回 膝関節に対する運動療法： 筋力増強運動②
- 第18回 足関節に対する運動療法： 関節可動域運動①
- 第19回 足関節に対する運動療法： 関節可動域運動②・筋力増強運動①
- 第20回 足関節に対する運動療法： 筋力増強運動②
- 第21回 頸部・体幹に対する運動療法： 関節可動域運動①
- 第22回 頸部・体幹に対する運動療法： 関節可動域運動②・筋力増強運動①
- 第23回 頸部・体幹に対する運動療法： 筋力増強運動②
- 第24回 運動連鎖①
- 第25回 運動連鎖②
- 第26回 協調性障害に対する運動療法①
- 第27回 協調性障害に対する運動療法②
- 第28回 協調性障害に対する運動療法③
- 第29回 まとめ
- 第30回 まとめ

■ 評価方法

出席10%, 小テスト・課題レポート10%, 定期テスト（実技, 筆記）80%

■ 教科書

標準理学療法学 専門分野 理学療法学 各論（医学書院）

■ 参考書

運動療法学テキスト（南江堂）
実践 PT ノート 運動器傷害の理学療法（三輪書店）

■ 留意事項

実技のできる服装で出席すること

授業科目	小児期理学療法治療学	担当者	横田 浩子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

正常感覚運動発達や小児期の種々の疾患を学び、小児の特異性を理解する。小児の理学療法のための評価や、発達を考慮した治療を理解する

■ 目 標

発達期の小児の障害の特異性を理解し発達を考慮した理学療法（評価・治療）を想起出来る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 成長と発達について
- 第2回 新生児の感覚運動発達（反射・反応・姿勢反射等）
- 第3回 正常感覚運動発達（背臥位・腹臥位での運動発達）
- 第4回 正常感覚運動発達（座位・立位での運動発達）
- 第5回 正常感覚運動発達（上肢機能・手指機能の発達）
- 第6回 正常感覚運動発達（知覚・感覚・認知の発達）
- 第7回 正常感覚運動発達（言語・社会性の発達）
- 第8回 小児の運動発達障害について
- 第9回 小児の脳障害Ⅰ
- 第10回 小児の脳障害Ⅱ
- 第11回 小児の脊髄障害
- 第12回 小児の神経・筋障害
- 第13回 小児の骨・関節障害
- 第14回 小児の運動障害の評価と理学療法
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

試験 : 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	呼吸器障害理学療法治療学	担当者	野村 卓生		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

「呼吸と運動」に関する解剖学・生理学的な基本知識を整理し、呼吸器疾患の病態およびその基本治療を学ぶ。酸素化能障害や換気能力障害などの呼吸器の障害に対する評価と理学療法について、その禁忌やリスク管理をふまえて講義し、実技実習を行う。

■ 目 標

フィジカルアセスメント、呼吸機能検査や運動耐容能評価の実習もふまえ、疾患、病態、病期（急性期、慢性期）に応じた理学療法について理解を深める。

■ 授 業 計 画

第1回 「運動と呼吸」

内部障害の範囲と特徴を理解する。呼吸器系の役割と運動時の適応、呼吸器系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。

第2回 「酸素化能、換気能力」

酸素化能障害、換気能力障害の基本的概念を肺モデル作成をふまえ理解する。酸素化能、換気能力の基本的な評価法について学習する。

第3回 「呼吸理学療法における評価1」

基本となる胸部の観察、呼吸困難の評価方法、打診、聴診の実際を学習する。

第4回 「呼吸理学療法における評価2」

呼吸機能、運動耐容能の評価方法について、その実際を学習する。

第5回 「慢性閉塞性肺疾患（COPD）の理学療法」

COPDにおける障害、呼吸器疾患患者のADL・QOL低下の特徴を理解し、特有の評価方法を学習する。他部門からの情報、理学療法評価結果に基づいた理学療法を学習する。

第6回 「拘束性肺疾患、外科手術後、その他呼吸器疾患の理学療法」

疾患、病態の特徴を理解し、特有の評価方法、理学療法について学習する。外科手術が生体に与える影響を理解し、術前後および急性増悪例への理学療法を学習する。

第7回 「排痰法」

呼吸リハビリテーションにおける排痰法の目的とその適応、徒手的および体位肺痰法の実際を学習する。

第8回 「理学療法士による吸引行為」

日本理学療法士協会「吸引プロトコル（第2版）」に沿って吸引のための基礎知識、実際の概要を学習する。

■ 評価方法

期末試験 60%, 課題レポート（場合によっては小テスト）および授業態度 40%

■ 教科書

山崎裕司・他編 「内部障害理学療法学テキスト」 南江堂

■ 参考書

- 1) 柳澤 健・編 「ゴールド・マスター・テキスト 内部障害系理学療法学」 メジカルビュー社
- 2) 高橋仁美・他編 「動画でわかる呼吸リハビリテーション」 中山書店
- 3) 眞淵 敏 「早わかり呼吸理学療法」 メディカ出版
- 4) 高橋哲也・他編 「呼吸・心臓リハビリテーション ビジュアル実践リハ」 羊土社
- 5) 日本呼吸管理学会・他編 「呼吸リハビリテーションマニュアル 運動療法」 照林社

■ 留意事項

講義では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。講義には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意すること。実習を行う際には白衣（KC）を着用し、爪は短く切り派手なマニキュアは禁止する。アクセサリー、香水、派手な化粧は厳禁である。頭髪は清潔にし、派手に染色せず、長い髪はきちんと束ねる。派手な髪飾り等は付けないこと。※1 評価方法について

授業科目	代謝障害理学療法治療学	担当者	洲崎 俊男		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

代謝障害と内部障害の概念、糖尿病、高脂血症、高尿酸血症・痛風、肝機能障害、腎機能障害、骨代謝障害等の病態、症状、治療法についての知識を修得する。特に運動がこれらの代謝障害や代謝系疾患に及ぼす影響について学習する。

■ 目 標

主な代謝障害の病態の理解と運動が代謝障害や代謝疾患に及ぼす影響が理解できる。具体的な運動療法が理解でき、治療へとつながるようになる。更に運動療法以外の食事療法や薬物療法等の知識も深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 内部障害と代謝障害の概念、【各論】糖尿病Ⅰ
- 第2回 糖尿病Ⅱ
- 第3回 高脂血症
- 第4回 高尿酸血症・通風
- 第5回 肝機能障害
- 第6回 腎機能障害
- 第7回 骨代謝障害
- 第8回 その他の代謝障害

■ 評価方法

筆記試験（70%）、提出課題（10%）、出席状況（20%、無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

内部障害理学療法治療学テキスト、細田多穂監修、南江堂

■ 留 意 事 項

提出課題あり

授業科目	中枢神経障害理学療法治療学	担当者	石倉 隆		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

中枢神経障害理学療法治療学では、脳・神経機能解剖と機能局在、画像診断、電気診断、中枢神経疾患概論などの中枢神経障害理学療法に必要な知識を教授した後、脳血管障害やパーキンソン病に代表される movement disorder などの主な中枢神経疾患の理学療法について教授する。また、理学療法評価学、運動療法学などで学んだ知識を応用・統合し、各中枢神経疾患の基本的な病態生理と評価法、理学療法方法論を理解する。さらに、慢性疾患の多い中枢神経障害理学療法に特有な病期、病床別理学療法の考え方を地域理学療法も含めて教授する。

■ 目 標

中枢神経障害理学療法を実施するにあたって、その障害像を理解することが重要である。そのために理学療法に必要な脳機能解剖を脳血管支配領域と機能局在を中心に理解する。また臨床症状は、神経機能系のどの部分が傷害されて出現しているのかを知る必要があることから、神経機能系を理解することを求める。これらを基礎に脳卒中と神経変性疾患の基本的な治療法を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 脳機能解剖学概論：中枢神経障害理学療法を実施するにあたって、その障害像を理解することが重要である。そのため、理学療法に必要な脳機能解剖を脳血管支配領域と機能局在を中心に概説する。
- 第2回 運動機能系と症候：中枢神経障害理学療法を実施するにあたって、神経機能系のどの部分が傷害されて臨床像を呈しているのかを知る必要がある。第2回では運動障害についてその神経機能系を探索する。
- 第3回 感覚機能系、認知機能系と症候：中枢神経障害理学療法を実施するにあたって、神経機能系のどの部分が傷害されて臨床像を呈しているのかを知る必要がある。第3回では感覚障害、認知障害についてその神経機能系を探索する。
- 第4回 脳科学に基づく脳卒中のみかた：脳卒中は決して画一的な疾患ではなく、脳の障害部位によってさまざまな症候を呈する。脳血管障害の個別性を脳科学の視点から教授する。
- 第5回 脳卒中理学療法の実践：脳科学の視点からとらえた脳卒中の症候をどのように治療し、どのようにADLに結び付けていくのかを基本的な理学療法をモデルにて解説する。
- 第6回 脳科学に基づく神経変性疾患のみかた：神経変性疾患の病態は様々で、その経過や運動障害も特徴がある。代表的な神経変性疾患の特徴を脳科学、病理学の面から理解したうえで障害像をとらえられるように教授する。
- 第7回 神経変性疾患理学療法の実践：脳科学、病理学の面から理解した代表的な神経変性疾患の基本的理学療法モデルを提示する。対症的な治療だけではなく、進行していく疾患に対する理学療法の考え方も提示する。
- 第8回 中枢神経障害理学療法における病期別・施設別理学療法の考え方：慢性、進行性に経過する中枢神経障害では、各病期によって理学療法の方法論が変化する。また、その病期に合わせてそれぞれ特徴をもった施設で理学療法が実施される。病期別、施設別の理学療法の考え方を解説し、将来どの病気の治療に当たろうともそれぞれの病期、施設の考え方が理解できる理学療法士となることを期待する。

■ 評価方法

単位認定試験（定期試験）受験資格のある者について、試験の成績で評価する。

■ 教科書

脳神経疾患ビジュアルブック，学研，2009

■ 参考書

臨床のための神経機能解剖学，中外医学社，2003 脳卒中ビジュアルテキスト 第2版，医学書院，1994
画像診断のための脳解剖と機能系，医学書院，2002

■ 留意事項

講義では、個人情報に係る資料も提示する。その取り扱いには十分注意し、学外でみだりに他言しないように心がけること。

授業科目	老年期理学療法治療学	担当者	上田 陽之		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

慢性期病院（療養型病院）における生活機能へのチームアプローチの重要性と高齢者の維持期リハビリテーションにおける理学療法評価と治療を学習する

■ 目 標

目標：① 健常者（学生間）の身体機能（筋・骨格系中心に）と姿勢・動作の操作法を演習し、高齢者の変形や拘縮、姿勢・動作の特徴を理解できるようにする。② 健常者（学生自身）の生活リズム、生活空間、人間関係等を確認しながら療養病棟における高齢者の生活支援について議論できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 生命維持支援のリハビリテーション（1） 異常筋緊張のメカニズム
- 第2回 生命維持支援のリハビリテーション（2） 姿勢のコントロール
- 第3回 演習（1） 異常筋緊張とリラクゼーション
- 第4回 演習（2） 姿勢のコントロール
- 第5回 廃用症候群（特に変形・拘縮）の予防と改善
- 第6回 演習（3） 変形・拘縮の介入法
- 第7回 環境調整（移動・コミュニケーション手段の確立）
- 第8回 生活リズムの獲得と維持（離床に向けた取り組み）

■ 評 価 方 法

別途、提示する。

■ 教 科 書

適宜、プリントを配布する。

■ 参 考 書

特になし。

■ 留 意 事 項

別途、指示する。

授業科目	循環器障害理学療法治療学	担当者	大槻 桂右		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

内部障害系疾患は増加の一途を辿っている。身体障害の基礎疾患に占める内部障害の割合は骨関節疾患・中枢神経疾患を大きく上回る。循環器疾患では、典型的な心筋梗塞の理学療法に加えて、重症例として心不全に対する理学療法の在り方を学ぶ。

■ 目 標

循環器障害に対する身体構造・心身機能の評価・治療の在り方を ICF を踏まえて学ぶ

■ 授 業 計 画

- 第1回 循環器疾患（心筋梗塞）の評価と治療 その1
- 第2回 循環器疾患（心筋梗塞）の評価と治療 その2
- 第3回 循環器疾患（心筋梗塞）の評価と治療 その3
- 第4回 循環器疾患（心筋梗塞）の評価と治療 その4
- 第5回 循環器疾患（心不全）の評価と治療 その1
- 第6回 循環器疾患（心不全）の評価と治療 その2
- 第7回 循環器疾患（心不全）の評価と治療 その3
- 第8回 循環器疾患（心不全）の評価と治療 その4

■ 評 価 方 法

出席点（20%）と定期試験（80%）で総合的に判断する。

■ 教 科 書

内部障害理学療法学テキスト，南江堂，2008年。

■ 参 考 書

循環器理学療法の理論と技術，メジカルビュー社，2009年。

■ 留 意 事 項

授業中の私語や無断欠席は注意してください。

授業科目	神経筋障害理学療法治療学	担当者	井上 悟		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

本疾患群では技術実習という教授形態が困難であるため、症例紹介を含めた臨床講義の要素をできるだけ取り入れて行う予定である。

■ 目 標

神経筋疾患に対する理学療法について、その基本を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論：神経筋疾患に対する理学療法・リハビリテーション
- 第2回 パーキンソン病（パーキンソン症候群）に対する理学療法
- 第3回 運動失調症に対する理学療法：脊髄小脳変性症
- 第4回 多発性硬化症に対する理学療法
- 第5回 運動ニューロン疾患に対する理学療法Ⅰ：筋萎縮性側索硬化症
- 第6回 運動ニューロン疾患に対する理学療法Ⅱ：脊髄性筋萎縮症
- 第7回 末梢神経障害に対する理学療法：多発性ニューロパチー（ギラン・バレー症候群を中心に）
- 第8回 筋疾患に対する理学療法：筋ジストロフィー症、多発性筋炎・皮膚筋炎など

■ 評価方法

筆記試験にて評価する

■ 教 科 書

学校指定の「臨床神経学」のノートを持参すること。復習で利用する。

■ 参 考 書

<http://www.fmu.ac.jp/home/neurol/guideline.html> 神経免疫疾患治療ガイドライン
 clinical neuroscience（雑誌）、中外医学社
 加倉井周一／清水夏繪編 「神経・筋疾患のマネジメント」 医学書院
 岩崎祐三他訳 「神経リハビリテーション」 医学書院
 細田多穂・柳沢 健：理学療法ハンドブック4版、協同医書
 大澤真木子監訳「神経筋疾患の評価とマネジメント」 診断と治療社
 Bach, John R・石川悠加共著 「神経筋疾患の呼吸管理」 日本小児医事出版社
 「臨床リハビリテーション 悪性腫瘍と神経変性疾患・小児リハビリテーション（Ⅱ）」 医歯薬出版

■ 留意事項

講義内容の順番については講師の都合により変動することがあります。ご了承ください。

授業科目	リウマチ・有痛性障害理学療法治療学	担当者	佐藤 睦美		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期 1/2	選択・必修	必修

■ 内 容

関節リウマチの病態と慢性痛の機序を学び、それらに対する根拠のある理学療法を学ぶ

■ 目 標

慢性関節リウマチの病態と慢性痛の機序を理解し、理学療法評価と治療プログラムを立案できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 関節リウマチの病態と治療
- 第2回 関節リウマチに対する理学療法
- 第3回 関節リウマチに対する理学療法
- 第4回 関節リウマチに対する理学療法のまとめ
- 第5回 有痛性障害に対する理学療法： 慢性痛のメカニズム
- 第6回 有痛性障害に対する理学療法： CRPS
- 第7回 有痛性障害に対する理学療法： 評価と治療
- 第8回 有痛性障害に対する理学療法のまとめ

■ 評 価 方 法

出席10%, 小テスト10%, 定期テスト80%

■ 教 科 書

標準理学療法学 専門分野 理学療法学 各論 (医学書院)
※運動療法学Ⅱと共通

■ 参 考 書

理学療法 MOOK 3 疼痛の理学療法 慢性痛の理解とエビデンス 第2版 (三輪書店)

■ 留 意 事 項

授業科目	運動器・スポーツ障害理学療法治療学	担当者	佐藤 睦美		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動器障害，スポーツ傷害の病態を学び、理学療法評価・治療への展開を学ぶ

■ 目 標

運動器障害，スポーツ傷害の各疾患に応じた理学療法評価と治療を立案・実施する

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論
- 第2回 肩関節と肩甲帯①
- 第3回 肩関節と肩甲帯②
- 第4回 肘関節と前腕
- 第5回 手関節・手指
- 第6回 股関節①
- 第7回 股関節②
- 第8回 膝関節①
- 第9回 膝関節②
- 第10回 膝関節③
- 第11回 足関節①
- 第12回 足関節②
- 第13回 脊柱・体幹①
- 第14回 脊柱・体幹②
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

出席10%，課題レポート10%，定期テスト80%

■ 教 科 書

標準理学療法学 専門分野 運動療法学 各論（医学書院） ※運動療法学Ⅱと共通
 実践 PT ノート 運動器傷害の理学療法（三輪書店）
 理学療法 MOOK 9 スポーツ傷害の理学療法（三輪書店）

■ 参 考 書

DVD で学ぶ 運動器疾患の理学療法テクニック（南江堂）
 スポーツ膝の臨床（金原出版）

■ 留 意 事 項

実技のできる服装で出席すること

授業科目	健康増進理学療法学	担当者	佐藤 秀紀		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

高齢社会の現代においては、健全な社会構築のために疾病や障害予防のための健康増進が注目されている。この講義では、予防のための理学療法のあり方についてテーマとし、健康増進を目的とした理学療法における基本的な評価、運動療法の理論と実際について学ぶ。

■ 目 標

健康増進を目的とした理学療法における基本的な評価、運動療法の理論と実際について理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 健康概念の変遷と健康増進
- 第2回 脳血管疾患を有する人の健康増進 ①脳卒中の対策 リハビリテーションと再発予防
- 第3回 脳血管疾患を有する人の健康増進 ②パーキンソン病の対策 日常生活のケアとは？
- 第4回 運動器疾患を有する人の健康増進 ①首の痛み 首の痛みの対処法
- 第5回 運動器疾患を有する人の健康増進 ②肩の痛み 肩の痛みを長引かせない！
- 第6回 運動器疾患を有する人の健康増進 ③手のトラブル 早めに解消！手のトラブル
- 第7回 運動器疾患を有する人の健康増進 ④股関節の痛み 上手につきあう股関節の病気
- 第8回 運動器疾患を有する人の健康増進 ⑤腰の痛み ここまで進んだ腰痛対策
- 第9回 運動器疾患を有する人の健康増進 ⑥膝の痛み こうして改善 膝の痛み
- 第10回 運動器疾患を有する人の健康増進 ⑦関節リウマチの対策 上手につきあい悪化を防ぐ暮らし方
- 第11回 呼吸器疾患を有する人の健康増進 肺年齢と COPD 生活を楽しむ工夫
- 第12回 心臓疾患を有する人の健康増進 心臓リハビリテーションと日常生活のポイント
- 第13回 糖尿病・動脈硬化を有する人の健康増進 足が危ない！糖尿病のフットケア
- 第14回 慢性化痛を有する人の健康増進 長引く慢性化痛の対処
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

小テスト50%、学期末試験50%

■ 教 科 書

特に指定しない。必要な資料はその都度配布する。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	物理療法学	担当者	洲崎 俊男		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法の中での物理療法の位置づけと役割を理解する。物理療法で用いられる物理的刺激をどのように利用すべきか、またどのようなリスクが発生するのか、それらの特性を紹介かつ理解しながら理学療法治療手段の選択肢を修得する。特に、適応と禁忌についての理解を深める。

■ 目 標

物理療法が生体に及ぼす影響が理解できる。主な物理療法機器の原理・作用・適応・禁忌事項等の知識を総合的に修得する。リスク管理の知識を深め、安全に機物理療法器が使用できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 歴史的背景。理学療法の中での物理療法の位置づけ。物理療法の分類
- 第2回 物理療法で用いられる基礎物理学知識Ⅰ
- 第3回 物理療法で用いられる基礎物理学知識Ⅱ
- 第4回 物理療法が生体に及ぼす生理学的作用（基礎知識）
- 第5回 炎症・痛みに対する物理療法
- 第6回 【各論】温熱療法の概念（伝導・伝導・対流、放射、変換熱）、ホットパック、パラフィン浴
- 第7回 寒冷療法（アイスパック・アイシング、極低温療法）と痙性抑制・神経筋促通
- 第8回 光線療法（赤外線、紫外線、低出力レーザー）
- 第9回 電磁波療法（極超短波、超短波）
- 第10回 超音波療法
- 第11回 電気刺激療法（低周波、経皮的末梢神経電気刺激）
- 第12回 電気刺激療法（機能的電気刺激法、治療的電気刺激法など）
- 第13回 その他の電気療法（電気生理学的検査、バイオフィードバックなど含む）
- 第14回 水治療法（渦流浴、ハバードタンク、運動浴）
- 第15回 牽引療法（頸椎、腰椎）

■ 評 価 方 法

筆記試験（70%）、提出課題（10%）、出席状況（20%、無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

標準理学療法学、物理療法学、網本和編、医学書院

■ 参 考 書

理学療法学、ゴールド・マスター・テキスト、物理療法学、柳沢健編、メジカルビュー社

■ 留 意 事 項

電気療法関係の提出課題あり。

授業科目	物理療法学実習	担当者	洲崎 俊男		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

2つの大班（A, B）に分ける。1大班は8つの小班に分け、各小班はローテーションで8種類（ホットパック、コールドパック等、極超短波、超音波、牽引、電気・低周波、電気・干渉波、渦流浴）の機器を使ってすべての項目の実習を少人数で行う。実習日の11回目から、小班を2つにした中班で、提示された症例課題に対して物理療法手段の検討・討議・施行、データ収集、文献検索、発表準備並びに結果発表を行う。

■ 目 標

物理療法学で学んだ知識をもとに主要な治療機器等を安全に操作することができ、リスク管理が十分に行えるようになる。更に、物理的エネルギーが生体に与えられたときの生理学的反応などを検証・討議できるようになる。実際に提示された症例に対して、物理療法学的手段をグループ内討議し、治療の実践、データの収集、文献検索等発表の準備並びに発表までの経過を総合的に経験でき、かつ対象者の疾患や障害についても理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

第1回 実習前の物理療法リスク管理について（総論、各機器の特性等）
第2回 実習室で、物理療法機器の確認及び取扱い留意事項（8種類の機器について具体的な説明）
第3回 実習 第1回目 実習前に指定された各小班がローテーションで8つの治療器の実習を行う。
第4回 実習 第2回目 同 上
第5回 実習 第3回目 同 上
第6回 実習 第4回目 同 上
第7回 実習 第5回目 同 上
第8回 実習 第6回目 同 上
第9回 実習 第7回目 同 上
第10回 実習 第8回目 同 上
第11回 症例課題実習Ⅰ（小班が2つ合同の中班で実施）、4つの中班が各班内で討議して使用機器を決定する。
第12回 症例課題実習Ⅱ 4中班毎に、前回中班内で決定した使用機器でデータ採取等の確認作業を行う。
第13回 症例課題実習Ⅲ データ採取、文献収集等の発表の準備をする。
第14回 症例課題発表Ⅰ 担当は第1、3中班 終了後レポート提出
第15回 症例課題発表Ⅱ 担当は第2、4中班 終了後レポート提出

■ 評価方法

筆記試験（20%）、実習中実技チェック（20%）、提出課題（40%）、出席状況（20%、無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

標準理学療法学、物理療法学、網本和編、医学書院

■ 参 考 書

物理療法学テキスト、細田多穂監修、南江堂、EBM 物理療法、渡辺一郎監訳、医歯薬出版

■ 留 意 事 項

1. 学生全員が験者、被験者を必ず体験すること。 2. リスク管理事項を絶対に遵守すること。
3. 実習第1日目から実習第8回目までの小班での実習では、担当した実習項目についてのレポートを全員が提出する、4. 症例課題についても中班での発表後、全員がレポートを提出する。

授業科目	義肢装具学	担当者	鈴木 順一		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を理解する。臨床で用いる義肢装具の基礎的知識の定着を図る。

■ 目 標

知識・理解の観点：臨床で使用する義肢装具の種類、特徴、機能が説明できる。
 思考・判断の観点：対象者の障害レベルに応じた義肢装具の類別ができる。
 技能・表現の観点：各種障害に対する義肢装具の選択と適合判定ができる。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション（授業計画概要の説明と成績判定方法の説明）
 装具学1 装具学総論
 第2回 装具学2 整形外科的治療用装具
 第3回 装具学3 体幹装具
 第4回 装具学4 長下肢装具
 第5回 装具学5 短下肢装具
 第6回 装具学6 靴型装具
 第7回 装具学7 小児装具
 第8回 装具学8 上肢装具
 第9回 義肢学1 義肢学総論
 第10回 義肢学2 下腿義足
 第11回 義肢学3 大腿義足①
 第12回 義肢学4 大腿義足（含む 膝義足）②
 第13回 義肢学5 股義足・サイム義足・足部部分義足
 第14回 義肢学6 義手
 第15回 義肢学7 義肢学まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験（80%）、知識確認テスト（20%）、授業態度（遅刻・無断欠席は減点）を総合的に評価します。

■ 教 科 書

義肢装具学（第4版）、編集：川村 次郎／陳 隆明／古川 宏／林 義孝、医学書院、定価 7,350円

■ 参 考 書

義肢装具のチェックポイント（第7版）、監修：日本整形外科学会／日本リハビリテーション医学会、定価 7,980円

■ 留 意 事 項

短い授業時間で広範囲を学習しますので、日々の予習・復習を励行して下さい。

授業科目	義肢装具学実習	担当者	鈴木 順一		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

装具療法を必要とする各種疾患・障害への介入方法および、各切断レベルに対応する義足の適合判定と異常歩行を学習する。加えて断端管理法、義肢装着練習など切断リハビリテーションに関する知識を修得する。

■ 目 標

知識・理解の観点：各疾患・障害に適応する義肢装具の種類、特徴、機能が説明できる。
 思考・判断の観点：対象者の障害構造に応じた義肢装具が類別できる。
 技能・表現の観点：義肢装具の適合判定および理学療法介入ができる。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション（授業計画概要の説明と成績判定方法の説明）
 装具学演習1 脳卒中片麻痺者の装具と理学療法①
 第2回 装具学演習2 脳卒中片麻痺者の装具と理学療法②
 第3回 装具学演習3 脊髄損傷者の装具と理学療法
 第4回 装具学演習4 脊椎疾患の装具と理学療法
 第5回 装具学演習5 小児疾患の装具と理学療法
 第6回 装具学演習6 上肢装具と理学療法
 第7回 装具学演習7 靴型装具と理学療法
 第8回 義肢学演習1 下肢切断の理学療法①
 第9回 義肢学演習2 下肢切断の理学療法②
 第10回 義肢学演習3 大腿義足の適合判定と異常歩行
 第11回 義肢学演習4 大腿義足の異常歩行とその対策
 第12回 義肢学演習5 下腿義足の適合判定と異常歩行、その対策
 第13回 義肢学演習6 股義足・足部部分義足の適合判定
 第14回 義肢学演習7 上肢切断と理学療法
 第15回 義肢装具学演習
 義肢装具の支給体系と授業のまとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験（80％）、知識確認テスト・課題等（20％）、授業態度（遅刻・無断欠席は減点）を総合的に評価します。

■ 教 科 書

義肢装具学（第4版）、編集：川村 次郎／陳 隆明／古川 宏／林 義孝、医学書院、定価 7,350円

■ 参 考 書

義肢装具のチェックポイント（第7版）、監修：日本整形外科学会／日本リハビリテーション医学会、定価 7,980円

■ 留 意 事 項

短い授業時間で広範囲を学習しますので、日々の予習・復習を励行して下さい。
 前期義肢装具学の授業資料を毎回持参して下さい。

授業科目	日常生活活動学	担当者	洲崎 俊男		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日常生活に関与する諸活動の概念、各種評価法、生活関連活動の概念と範囲、国際障害分類と国際機能分類の理解を深める。自助具、福祉・生活支援機器、コミュニケーション機器の知識を持つ。主な疾患・病態（片麻痺、頸髄・脊髄損傷、筋萎縮性側索硬化症、筋ジストロフィー、運動失調、関節リウマチ、切断、脳性麻痺、認知症含む高齢者等）の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について学習する。

■ 目 標

日常生活に関与する諸活動の概念、分析、評価及ぶ練習についての知識を深める。国際障害分類から国際機能分類へ移行した経緯や主な概念についての理解を深める。更に、従来からの主な評価法を修得する。理学療法士が必要とする自助具、福祉・生活支援機器、コミュニケーション機器の知識を有する。代表的疾患の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について修得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 理学療法の中での位置づけ、日常生活活動の概念・定義・意義（評価の目的・範囲と項目、数量化）
- 第2回 国際障害分類と生活機能分類について
- 第3回 代表的評価法
- 第4回 日常生活活動の運動学と生涯学（基本的 ADL）
- 第5回 生活関連活動（拡大 ADL）
- 第6回 日常生活活動と自助具
- 第7回 日常生活活動を支援するリハビリテーション機器・福祉機器とコミュニケーション機器
- 第8回 各論 障害別の日常生活活動指導の実際 ①片麻痺
- 第9回 各論②脊髄損傷（四肢麻痺、対麻痺）
- 第10回 各論③関節リウマチ
- 第11回 各論④切断（下肢、上肢）
- 第12回 各論⑤筋萎縮性疾患（筋ジストロフィー、筋萎縮性側索硬化症）
- 第13回 各論⑥脊髄小脳変性症（運動失調）
- 第14回 各論⑦脳性麻痺
- 第15回 各論⑧高齢者（在宅、認知症など）

■ 評 価 方 法

筆記試験（60%）、提出課題（20%）、出席状況（20%、無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

日常生活活動（動作）― 評価と訓練の実際 ―、土屋弘吉等、医歯薬出版

■ 参 考 書

標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学、ADL とその周辺 ― 評価・指導・介護の実際 ―、伊藤利之、鎌倉矩子編、医学書院

■ 留 意 事 項

2 回の提出課題（移動・移乗・搬送に関わる福祉・生活支援機器、バリアフリー住宅）あり。

授業科目	日常生活活動学実習	担当者	洲崎 俊男		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

姿勢と動作の基礎的知識、起居・移動・移乗及び段差・階段・歩行に関わる自力動作と介助法を修得する。片麻痺、脊髄損傷者の車いす操作法、及び車いすのキャスター上げを体得する。各論として、主な疾患（片麻痺、脊髄損傷、関節リウマチ、切断、筋萎縮性疾患、運動失調、脳性麻痺）の特徴的動作を理解させる。クラスを2つの大班に分けて実習を行う。

■ 目 標

姿勢と動作の基礎的知識が理解できる。起居・移動・移乗動作に関わる自力動作と介助法が理解でき、かつ安全に実践できる。片麻痺、脊髄損傷者の車いす操作、及び車いすキャスター上げができ、指導もできる。各論として、主な疾患（片麻痺、脊髄損傷、関節リウマチ、切断、筋萎縮性疾患、運動失調、脳性麻痺）の特徴的動作が理解でき、対象者（障害）別の指導方法も理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 姿勢と動作の基礎知識（概念、身体力学、基本の姿勢、体位変換）
- 第2回 段差・階段・移乗・移動時の注意点とリスク管理
- 第3回 片麻痺と対麻痺における移動動作（自力、介助）
- 第4回 片麻痺者・対麻痺者の移乘法、及び介助法（自力、介助）
- 第5回 片麻痺者・対麻痺者の車いす操作法（自力）
- 第6回 車いす操作・キャスター上げ①
- 第7回 車いす操作・キャスター上げ②
- 第8回 段差・階段昇降、歩行（自力、介助）
- 第9回 各論①片麻痺者の特徴的動作
- 第10回 各論②脊髄損傷（四肢麻痺、対麻痺）者の特徴的動作
- 第11回 各論③関節リウマチ者の特徴的動作
- 第12回 各論④切断（下肢、上肢）者の特徴的動作
- 第13回 各論⑤筋萎縮性疾患（筋ジストロフィー、筋萎縮性側索硬化症）の特徴的動作
- 第14回 各論⑥脊髄小脳変性症（運動失調）
- 第15回 各論⑦脳性麻痺者の特徴的動作

■ 評価方法

筆記試験（30%）、実技試験（50%）、出席状況（20%、無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

新版姿勢と動作―ADLその基礎から応用まで、斉藤宏他著、メヂカルフレンド社、日常生活活動（動作）―評価と訓練の実際―、土屋弘吉等、医歯薬出版

■ 参 考 書

標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学、鶴見隆正編、医学書院、ADLとその周辺―評価・指導・介護の実際―、伊藤利之、鎌倉矩子編、医学書院、新版姿勢と動作―ADLその基礎から応用―、斉藤宏他著、メヂカルフレンド社

■ 留 意 事 項

授業科目	地域理学療法学	担当者	新田 勉		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本における社会保障制度の変遷をみながら、現在の日本の医療制度の問題点を探り、これからの地域における理学療法の在り方を考える。

■ 目 標

地域リハビリテーションの概念を学ぶ、その理念を理解する。
地域リハビリテーションシステム（制度と社会資源）を学ぶ。
リハビリテーション関係職種を理解し地域での役割を考える。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション・日本の医療の変遷
第2回 日本の医療・福祉の抱える問題
第3回 日本の地域医療に求められること
第4回 地域リハビリテーションの実際
第5回 介護保険と理学療法
第6回 地域における連携
第7回 在宅療養者の実際
第8回 訪問理学療法・ケアマネジメント
第9回 地域理学療法の実際
第10回 生活環境整備
第11回 生活環境整備
第12回 生活環境整備と地域医療サービスの利用
第13回 生活環境整備と地域医療サービスの利用
第14回 グループワーク発表
第15回 総括

■ 評 価 方 法

レポート80%、提出課題20%

■ 教 科 書

授業毎に配布するプリント

■ 参 考 書

標準理学療法学 専門分野「地域理学療法学」医学書院
地域リハビリテーション原論 医歯薬出版
地域リハビリテーション 医学書院

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	生活環境論	担当者	田中仁		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションに関わる生活環境を、患者（利用者）を取り巻く生活地域に視点をおいて考える。

■ 目 標

現在日本における患者（利用者）の在宅環境（家屋、福祉用具等）を、医療保険、介護保険の現行制度を通して、リハビリテーションの視点で理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 生活環境の変遷
- 第2回 QOL
- 第3回 行政・制度的環境
- 第4回 居住環境（一般的知識）
- 第5回 居住環境（介助・移動を前提とした）
- 第6回 居住環境（ADL自立者を前提とする場合1）
- 第7回 居住環境（ADL自立者を前提とする場合2）
- 第8回 居住環境（ADL自立者を前提とする場合3）
- 第9回 福祉・リハビリテーション関連機器（一般知識）
- 第10回 福祉・リハビリテーション関連機器（ADL関連）
- 第11回 福祉・リハビリテーション関連機器（ADL関連）
- 第12回 社会生活用具・機器・設備
- 第13回 社会生活用具・機器・設備
- 第14回 地域環境
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

生活環境論 第6版 生活支援の視点と方法 木村 哲彦 監修

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床実習Ⅰ	担当者	藪中 良彦・他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

専任教員と共に国内医療施設で1週間の見学実習を行う。

■ 目 標

現在の国内医療施設における理学療法の概観を理解する。例えば、問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などの理学療法の一連の流れを概観することでこれを理解する。また、障害について実際の対象者の生活像を理解する。

■ 授 業 計 画

実習施設

大阪府下を中心とした一般病院、リハビリテーション病院

実習期間

1 週間

実習形態

専任教員が学生複数名を引率する。臨床実習指導者の監督の下に、患者と直接に対応する。専任教員は学生の臨床現場を観察し、学生の臨床実習に臨む態度などを適切に把握する。

実習の進め方

理学療法概論で学んだ問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などを実際の臨床現場で体験し、理解を深める。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

特に定めないが、臨床実習Ⅰの実施までに学んだ講義、実習、演習の教科書を活用すること。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅰは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅱ	担当者	藪中 良彦・他		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

専任教員と共に国内医療施設以外の施設で1週間の見学実習を行う。

■ 目 標

現在の国内医療施設以外の理学療法の概観を理解する。例えば、問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などの理学療法の一連の流れを概観することでこれを理解する。また、障害について実際の対象者の生活像を理解する。

■ 授 業 計 画

実習施設

大阪府下を中心とした介護老人保健施設、介護老人福祉施設

実習期間

1 週間

実習形態

専任教員が学生複数名を引率する。臨床実習指導者の監督の下に、利用者と直接に対応する。専任教員は学生の臨床現場を観察し、学生の臨床実習に臨む態度などを適切に把握する。

実習の進め方

解剖学、生理学、運動学総論で学んだ知識を使用して、理学療法場面で何が行われているのかを理解する。また、理学療法評価学Ⅰ、Ⅱで学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定、評価が実際にどのように行われているのかを見学し、理解を深める。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

特に定めないが、臨床実習Ⅱの実施までに学んだ講義、実習、演習の教科書を活用すること。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅱは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅲ	担当者	藪中 良彦・他		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で1週間の臨床実習を行う。

■ 目 標

対象者の障害について、実際の生活像と共にそれを阻害している機能的な問題の実像を、医療面接、PT見学、観察、触知、検査・測定などを通じて理解する。また、これまでに学習した評価技術の適応にあたって、臨床適応の際の課題について整理する。

■ 授 業 計 画

実習施設

大阪府下を中心とした一般病院、リハビリテーション病院

実習期間

1週間

実習形態

臨床実習指導者の監督の下に、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者の障害像に迫る。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。

実習の進め方

理学療法評価学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定、評価をなるべく多く体験し、対象者に合わせて適切な機能障害の評価を行なう。また、評価結果を解剖学、生理学、運動学、臨床医学等の知識を基に解釈を行う。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

特に定めないが、臨床実習Ⅲの実施までに学んだ講義、実習、演習の教科書を活用すること。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅲは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅳ	担当者	藪中 良彦・他		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で1週間の臨床実習を行う。

■ 目 標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価プロセス全体を経験する。具体的には、機能障害と能力障害の結びつきを理解し、問題点を抽出し、目標設定が行えるようになる。

■ 授 業 計 画

実習施設

大阪府下を中心とした一般病院、リハビリテーション病院

実習期間

1週間

実習形態

臨床実習指導者の監督の下に、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者の障害像に迫る。対象者に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を行う。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。

実習の進め方

臨床医学、理学療法治療学、日常生活活動学の知識を基に評価項目を選択し、理学療法評価学で学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定・評価を実施して機能障害の評価を行なう。評価結果を解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法治療学、日常生活活動学等の知識を基に解釈を行い、機能障害と能力障害の結びつきを理解する。そして、問題点を抽出して目標設定を行う。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

特に定めないが、臨床実習Ⅳの実施までに学んだ講義、実習、演習の教科書を活用すること。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅳは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅰ	担当者	藪中 良彦・他		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で2週間の臨床実習を行う。

■ 目 標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案までのプロセスを経験する。具体的には、ICFの枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラム立案が行えるようになる。

■ 授 業 計 画

実習施設

近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院

実習期間

2週間

実習形態

臨床実習指導者の監督の下に、対象者に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を行い、治療プログラムを立案する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。

実習の進め方

解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法専攻等の知識を駆使して、評価を行い、ICFの枠組みの中で統合と解釈を行い、評価結果を基に解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

特に定めないが、総合臨床実習Ⅰの実施までに学んだ講義、実習、演習の教科書を活用すること。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

総合臨床実習Ⅰは、実際の臨床現場での実習となる。総合臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	作業療法概論	担当者	中山 広宣		
学 科 名		学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 人における作業活動の意義.
2. 医学的・社会的・教育的・職業的リハビリテーションにおける作業療法の役割と機能.
3. 身体障害, 老年期障害, 精神障害, 発達障害の作業療法.
4. 作業療法士の資質.

■ 目 標

1. 作業活動の意義や作業療法の機能と役割を理解する.
2. 医学的・社会的・教育的・職業的リハビリテーションにおける作業療法を総合的かつ体系的に理解する.
3. 身体障害, 老年期障害, 精神障害, 発達障害の作業療法を理解する.
4. 作業療法士のあり方について学ぶ.

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーションおよびレポート指針
キーワード; 形式, 内容, (テーマ, 序論, 対象, 方法, 結果, 考察, 結論, 文献, 図表)
- 第2回 専門職としての資質を学ぶ.
キーワード; リハビリテーション, 全人間的復権, 対象疾患, 障害, 作業療法, 医療人
- 第3回 リハビリテーションとチーム医療について理解する.
キーワード; 医学モデル, 生活モデル, チーム医療, Normalization, QOL, IL, 自己決定, 説明と同意
- 第4回 EBM, EBOT を理解する.
キーワード; エビデンス, 量的研究, 質的研究, 文献, 批判的吟味, 説明と同意,
- 第5回 障害とリハビリテーションの領域について理解する.
キーワード; 国際生活機能分類 (ICF), WHO 国際障害分類 (ICIDH), 医学, 教育, 職業, 社会, 地域,
- 第6回 リハビリテーションと作業療法の歴史を学ぶ.
キーワード; ピネル, シモン, ADA, 呉秀三, 高木憲次 (療育), 障害者基本法, 精神保健福祉法,
- 第7回 リハビリテーションおよび作業療法に関係する定義を学ぶ.
キーワード; 全国リハビリテーション協議会, 理学療法士および作業療法士法, 日本作業療法士協会
- 第8回 作業療法の流れとリハビリテーションにおける作業療法の意義を理解する.
キーワード; 処方箋, 評価, カンファランス, リハビリテーションゴール, OT 治療計画, 治療実施
- 第9回 作業療法評価と治療計画, およびその実施の概要を知る.
キーワード; 初期・中間・最終評価, 情報収集, 観察, 面接, 検査測定, 身体機能, 精神機能, ゴール
- 第10回 対象者 (分野) 別作業療法の概要を学ぶ.
キーワード; 身体障害, 精神障害, 発達障害, 老年期障害, 高次脳機能障害
- 第11回 医の倫理, 職業倫理を学ぶ.
キーワード; ヒポクラテス, ジュネーブ宣言, アメリカ病院協会権利宣言, 日本作業療法士協会倫理
- 第12回 作業療法部門の管理運営を学ぶ.
キーワード; 記録報告, 施設基準, 診療報酬, リーダーシップ, フロアーシップ,
- 第13回 リハビリテーション用語 (英略語) の解説Ⅰ
- 第14回 リハビリテーション用語 (英略語) の解説Ⅱ
- 第15回 リハビリテーション用語 (英略語) の解説Ⅲ

■ 評価方法

ペーパー試験（小テスト含む）100%

欠席は1回につき5点，遅刻・早退および受講態度不良は1回につき3点減点

■ 教科書

標準作業療法学作業療法学概論．岩崎テル子編集．医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

4年間の学業の道標となる科目である．また，臨床見学実習に備えて，非常に重要な科目である．
そのため，探求心をもって，大学生として自主的かつ積極的に取り組むことを望む．

授業科目	基礎作業療法学Ⅰ	担当者	福井 信佳		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

この授業では EBM（Evidence Based Medicine）の考え方を理解し、「作業」の理論的背景について学ぶ

■ 目 標

作業療法を科学的にとらえる視点を身につけること

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション。作業とは何か
- 第2回 作業に関連するEBM(Evidence Based Medicine)、ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health)などの用語について理解する
- 第3回 作業に関連するクリティカルパス、インフォームドコンセント、ADL、IADL、QOLについて理解する
- 第4回 第1回～第3回を通して、基礎作業療法学の概念、作業の利用などについてグループワークを行う
- 第5回 人体の構造と機能
- 第6回 作業療法の対象と問題点、目標
- 第7回 作業療法の対象となる障がい者、高齢者の現状や特徴
- 第8回 第6回、第7回を通じて理解したことについてグループを行う
- 第9回 作業分析とは何かを理解する。実際の作業を用いながら進める
- 第10回 作業分析1（身体運動技能からの視点）
- 第11回 作業分析2（認知技能からの視点）
- 第12回 作業分析2（心理社会的技能からの視点）
- 第13回 作業分析2（感覚統合からの視点）
- 第14回 作業分析2（作業遂行分析からの視点）
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%で評価する

■ 教 科 書

標準作業療法学基礎作業学

■ 参 考 書

プリントを配布する

■ 留 意 事 項

この授業は、後期の「基礎作業療法学Ⅱ」に必要な理論であるので理解を深めておくこと

授業科目	基礎作業療法学Ⅱ	担当者	福井 信佳		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

基礎作業療法学Ⅰの理論をもとに実際の作業を経験し、各作業の構造や治療的意味、段階付け等について講義を行う

■ 目 標

対象者に作業の意味や手順を説明できるとともに作業分析ができること

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション。作業種目の選定は学生の意見も含めて選定する
- 第2回 木工作業（設計）
- 第3回 木工作業（加工・組み立て）
- 第4回 木工作業（仕上げ）
- 第5回 木工についての作業分析（グループワーク）
- 第6回 木工についての作業分析（グループワーク）
- 第7回 ペーパークラフト
- 第8回 ペーパークラフト
- 第9回 ペーパークラフト
- 第10回 ペーパークラフトのグループワーク
- 第11回 学生がグループごとに作業を選択し生産的作業を実施
- 第12回 学生がグループごとに作業を選択し生産的作業を実施
- 第13回 第11回、第12回の作業について作業分析
- 第14回 第11回、第12回の作業について作業分析
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%で評価する

■ 教 科 書

標準作業療法学基礎作業学

■ 参 考 書

プリントを配布する

■ 留 意 事 項

臨床で使用する作業であるので体験しておくこと

授業科目	基礎作業療法学Ⅲ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業活動の枠組みを活用した作業活動の提供方法について学ぶ。また、作業を提供する為に必要な準備、提供方法の理解を深める。実際の活動体験（手工芸、芸術活動等）を通して作業活動を対象者に教授する際のポイントを学ぶ。

■ 目 標

作業活動の枠組みを利用した作業活動の提供方法を述べる事が出来る。作業を提供する為に必要な準備ができる。作業の特徴を理解し、対象者に合わせて作業活動を選択し、指導することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（学生はグループで、一人一人が計画した作業活動を、他の学生に提供することを通して、教授のポイントを学ぶ）、グループ分け、個人で実施する作業活動を決定する（高齢者に対するレクリエーション、子どもに対するレクリエーション、成人に対するレクリエーションなど）
- 第2回 作業活動の利用方法、作業活動の準備と提供方法について知る
- 第3回 集団療法について理解する
- 第4回 個人で作業活動の計画を立てる
課題：個人で作業活動の計画書を提出
- 第5回 グループ毎に作業活動の計画を立てる、実施の準備をする
課題：グループで作業活動の計画書を提出
- 第6回 作業活動実施1回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第7回 1回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第8回 2回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第9回 2回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第10回 3回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第11回 3回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第12回 4回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第13回 4回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第14回 5回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第15回 5回目の作業活動分析についてディスカッション

■ 評価方法

出席点は減点のみ（無届けの遅刻・早退－1点、無届けの欠席－3点）、やむを得ない理由による遅刻・早退・欠席は考慮します。授業への取り組み方20%、提出物40%、試験40%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教 科 書

小林夏子他：標準作業療法学，基礎作業学，医学書院
中村春基他編：レクリエーション-社会参加を促す治療的レクリエーション改訂第2版，三輪書店

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	基礎作業療法学Ⅳ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

体験した作業活動について、臨床実習で実施することを予想し、提供する際の教示方法と配慮点について学ぶ。治療的な活用のための技術的な研鑽を深めるとともに、具体的な実施上の管理運営面で注意すべきことの理解を深める。

■ 目 標

作業活動の特徴を理解し、作業活動の枠組みを利用した作業活動の提供方法について実施上の注意点と共に述べることができる。作業活動を治療的に活用し、対象者に合わせて段階付け・アダプテーションを行い、実施できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（学生は、設定された対象者の障害や治療目的に沿って、一人一人が計画した作業活動を、グループごとに他の学生に提供することを通して、教授のポイントを学ぶ）、グループと課題の決定、個別に作業活動の計画を立てる
- 第2回 生活とは何かを復習し、生活の中にある作業活動を再考してみる
- 第3回 特別な作業活動・技法を用いた作業療法の紹介①
- 第4回 特別な作業活動・技法を用いた作業療法の紹介②
- 第5回 個人で作業活動計画を立てる、課題：作業活動実施計画書を提出
- 第6回 作業活動実施1回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第7回 1回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第8回 2回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第9回 2回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第10回 3回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第11回 3回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第12回 4回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第13回 4回目の作業活動分析についてディスカッション
- 第14回 5回目：作業活動実施、課題：作業活動分析
- 第15回 5回目の作業活動分析についてディスカッション

■ 評価方法

出席点は減点のみ（無届けの遅刻・早退-1点、無届けの欠席-3点）、やむを得ない理由による遅刻・早退・欠席は考慮します。授業への取り組み方20%、提出物40%、試験40%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教 科 書

小林夏子他：標準作業療法学，基礎作業学，医学書院
中村春基他編：レクリエーション-社会参加を促す治療的レクリエーション改訂第2版，三輪書店

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	作業療法評価学Ⅰ	担当者	早坂 友成		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法における評価は、患者への治療や介入方針を立案するために必要である。また、治療や介入後も効果の再評価が必要なため、作業療法士にとっては重要な技術である。

■ 目 標

作業療法評価の概念と基本的事項を学び、身体障害、精神障害、発達障害、老年期障害における領域共通の評価概念の理解と評価技術の習得をはかる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（教員紹介、成績評価方法の説明）
- 第2回 作業療法評価の対象と目的
- 第3回 作業療法評価の構成要素と全体的過程
- 第4回 作業療法評価の種類と手段
- 第5回 作業療法評価の実践過程（情報収集、面接、観察、検査、測定、情報の解釈と統合）
- 第6回 作業療法評価の実践過程（問題点の抽出、ゴール設定、プログラム立案）
- 第7回 情報収集における実施上の注意
- 第8回 面接・観察における実施上の注意
- 第9回 検査・測定、計測における実施上の注意
- 第10回 ICF 概念に基づいた対象者の捉え方
- 第11回 身体障害領域における作業療法評価の概念と過程
- 第12回 精神障害領域における作業療法評価の概念と過程
- 第13回 発達障害領域における作業療法評価の概念と過程
- 第14回 老年期障害領域における作業療法評価の概念と過程
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験（60％）、レポート（40％）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

作業療法学全書・改訂第2版 「第3巻 作業療法評価法」、協同医書出版社、2005

■ 参 考 書

標準作業療法学・専門分野 「作業療法評価学」、医学書院、2005

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	作業療法評価学Ⅱ	担当者	早坂 友成		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

各領域における作業療法の評価目的，実施手順，実施上の留意点について学習し，それらを十分に理解した上で，具体的な評価技術を習得する．

■ 目 標

面接，観察，検査，測定，計測から得られる結果（情報）を整理，分析し，結果の意味及びそれらが示す対象者の障害について理解できるようになる．

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（教員紹介，成績評価方法の説明）
- 第2回 作業療法評価の目的，実施手順，実施上の留意点（作業療法評価学Ⅰの復習），評価手技の位置づけ
- 第3回 情報収集①（一般的情報、医学的情報、他職種からの情報）
- 第4回 情報収集②（一般的情報、医学的情報、他職種からの情報）
- 第5回 面接法①
- 第6回 面接法②
- 第7回 観察法①
- 第8回 観察法②
- 第9回 精神科における主な検査と評価法①
- 第10回 精神科における主な検査と評価法②
- 第11回 ROM，感覚検査①
- 第12回 ROM，感覚検査②
- 第13回 ROM，感覚検査③
- 第14回 ROM，感覚検査④
- 第15回 ROM，感覚検査⑤
- 第16回 ROM，感覚検査⑥
- 第17回 ROM，感覚検査⑦
- 第18回 ROM，感覚検査⑧
- 第19回 MMT，腱反射検査①
- 第20回 MMT，腱反射検査②
- 第21回 MMT，腱反射検査③
- 第22回 MMT，腱反射検査④
- 第23回 MMT，腱反射検査⑤
- 第24回 MMT，腱反射検査⑥
- 第25回 MMT，腱反射検査⑦
- 第26回 MMT，腱反射検査⑧
- 第27回 実技試験に向けた全体練習①
- 第28回 実技試験に向けた全体練習②
- 第29回 実技試験①
- 第30回 実技試験②

■ 評価方法

- ・筆記試験（100％）、実技試験（100％）ともに60％以上が単位取得条件.
- ・出席状況（無断欠席（10点）や遅刻（5点）は－評価。欠席、遅刻の際には、必ず事前に連絡してください）.
- ・服装はジャージ。実技試験はケーシー.
- ・打腱器，ゴニオメーター，ストップウォッチを購入すること.

■ 教科書

標準作業療法学・専門分野 「作業療法評価学」，医学書院，2005
新・徒手筋力検査法 原著第8版

■ 参考書

作業療法学全書・改訂第2版 「第3巻 作業療法評価学」，協同医書出版社，2005

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください.

授業科目	作業療法評価学Ⅲ	担当者	早坂 友成		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法における評価は、患者への治療や介入方針を立案するために必要である。また、治療や介入後も効果の再評価が必要なため、作業療法士にとっては重要な技術である。

■ 目 標

作業療法評価の概念と基本的事項を学び、身体障害、精神障害、発達障害、老年期障害における領域共通の評価概念の理解と評価技術の習得をはかる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 バイタルサインの評価方法
- 第3回 Brunnstrom test, 筋緊張検査法, 脳神経検査法, トランスファー①
- 第4回 Brunnstrom test, 筋緊張検査法, 脳神経検査法, トランスファー②
- 第5回 Brunnstrom test, 筋緊張検査法, 脳神経検査法, トランスファー③
- 第6回 Brunnstrom test, 筋緊張検査法, 脳神経検査法, トランスファー④
- 第7回 Brunnstrom test, 筋緊張検査法, 脳神経検査法, トランスファー⑤
- 第8回 Brunnstrom test, 筋緊張検査法, 脳神経検査法, トランスファー⑥
- 第9回 FIM, その他のADL評価法, トランスファー①
- 第10回 FIM, その他のADL評価法, トランスファー②
- 第11回 FIM, その他のADL評価法, トランスファー③
- 第12回 FIM, その他のADL評価法, トランスファー④
- 第13回 STEF, トランスファー①
- 第14回 STEF, トランスファー②
- 第15回 正常発達の検査①
- 第16回 正常発達の検査②
- 第17回 正常発達の検査③
- 第18回 正常発達の検査④
- 第19回 原始反射①
- 第20回 原始反射②
- 第21回 発達障害領域における疾患別の評価①
- 第22回 発達障害領域における疾患別の評価①
- 第23回 バランス機能の評価①
- 第24回 バランス機能の評価②
- 第25回 高次脳機能障害の評価①
- 第26回 高次脳機能障害の評価②
- 第27回 実技試験①
- 第28回 実技試験②
- 第29回 ICF 概念に基づいた患者の捉え方と評価手技の活用方法①
- 第30回 ICF 概念に基づいた患者の捉え方と評価手技の活用方法②

■ 評価方法

- ・筆記試験（100％）、実技試験（100％）ともに60％以上が単位取得条件.
- ・出席状況（無断欠席(10点)や遅刻(5点)は－評価. 欠席, 遅刻の際には, 必ず事前に連絡してください).

■ 教科書

標準作業療法学・専門分野 「作業療法評価学」, 医学書院, 2005

■ 参考書

作業療法学全書・改訂第2版 「第3巻 作業療法評価学」, 協同医書出版社, 2005

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください.

授業科目	身体障害治療学Ⅰ	担当者	福井 信佳		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生体力学的モデルを基本にした、身体の構造と障害について講義する

■ 目 標

臨床において作業療法の対象となる身体障害の各種疾患の症状をとらえ、評価・治療に必要な知識・技術を習得する

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 身体機能障害作業療法学の基礎
- 第3回 身体機能障害の治療原理（身体力学）
- 第4回 身体運動の基礎知識
- 第5回 関節可動域の評価
- 第6回 関節可動域の治療
- 第7回 筋力の評価①
- 第8回 筋力の評価②
- 第9回 筋力強化訓練①
- 第10回 筋力強化訓練②
- 第11回 筋緊張の異常とその治療
- 第12回 不随意運動とその治療
- 第13回 協調運動障害とその治療
- 第14回 知覚再教育廃用症候群とその対応
- 第15回 物理療法の基礎と全体のまとめ

■ 評 価 方 法

100% 試験で評価する

■ 教 科 書

標準作業療法学身体機能作業療法学

■ 参 考 書

プリントを配布します

■ 留 意 事 項

実習に必要な知識と技術であるので出席すること

授業科目	身体障害治療学Ⅱ	担当者	福井 信佳		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

主に中枢神経疾患について講義する。疾患に応じた評価や治療を模擬的に実践する

■ 目 標

各疾患に応じた評価、治療計画、治療実施、目標設定などをができるようにする

■ 授 業 計 画

- 第1回 脳血管障害、脳外傷の基礎知識
- 第2回 脳血管障害、脳外傷に対する作業療法評価と治療（急性期）
- 第3回 脳血管障害、脳外傷の作業療法評価と治療（回復期）
- 第4回 脳血管障害、脳外傷の作業療法評価と治療（維持期）
- 第5回 脳血管障害、脳外傷グループワーク
- 第6回 脳血管障害、脳外傷グループワーク
- 第7回 脊髄損傷（主に頸髄損傷）の作業療法評価と治療（急性期）
- 第8回 脊髄損傷（主に頸髄損傷）の作業療法評価と治療（回復期）
- 第9回 脊髄損傷のグループワーク
- 第10回 脊髄損傷のグループワーク
- 第11回 呼吸器疾患の評価と治療
- 第12回 呼吸器疾患の評価と治療のグループワーク
- 第13回 ターミナルケアと作業療法
- 第14回 ターミナルケアと作業療法のグループワーク
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%で評価する

■ 教 科 書

標準作業療法学身体機能作業療法学

■ 参 考 書

プリントを配布します

■ 留 意 事 項

実習で必ず必要な知識や技術であるので出席すること。講義の順序が変更になる場合がある。

授業科目	身体障害治療学Ⅲ	担当者	福井 信佳		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リウマチ性疾患、骨折、末梢神経損傷、切断などの整形外科疾患について講義する。疾患の応じた評価・治療計画・目標設定について講義を行い、模擬的に治療実施を学ぶ

■ 目 標

各疾患に応じた評価・治療計画・目標設定・治療実施ができること

■ 授 業 計 画

- 第1回 末梢神経損傷の評価と治療
- 第2回 末梢神経損傷の評価と治療のグループワーク
- 第3回 神経・筋疾患の評価と治療
- 第4回 神経・筋疾患の評価と治療のグループワーク
- 第5回 熱傷の評価と治療
- 第6回 熱傷の評価と治療のグループワーク
- 第7回 関節リウマチの評価と治療
- 第8回 関節リウマチの評価と治療のグループワーク
- 第9回 骨・関節疾患の評価と治療
- 第10回 骨・関節疾患の評価と治療のグループワーク
- 第11回 切断の評価と治療
- 第12回 切断の評価と治療のグループワーク
- 第13回 神経変性疾患の作業療法評価と治療
- 第14回 神経変性疾患のグループワーク
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%で評価する

■ 教 科 書

標準作業療法学身体機能作業療法学

■ 参 考 書

プリントを配布する

■ 留 意 事 項

実習に必要な知識と技術であるので出席すること。講義の順序が変更になる場合がある。

授業科目	精神障害治療学Ⅰ	担当者	中山 広宣		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 精神保健福祉法と社会復帰資源
2. 各種精神療法（行動療法, SST, 心理教育, 家族療法, 心理劇, 箱庭療法, 絵画療法, 音楽療法, 森田療法, 精神分析療法, 交流分析, 精神療法, 集団精神療法）の理論と治療構造

■ 目 標

1. 精神科リハビリテーションの流れと社会資源を学び, チーム医療を理解する.
2. 精神障害における各種治療理論と技法を理解することで, 作業療法への応用を考える.
3. 精神障害者に対する基本的な精神療法（接し方）を学ぶ.

■ 授 業 計 画

- 第1回 [精神保健福祉法および社会復帰支援システム] キーワード:人権, 入院の種類（任意, 医療保護, 措置）, 生活訓練施設, 福祉ホーム, 授産施設, 福祉工場, 地域生活支援センター,
- 第2回 [行動療法] キーワード:学習理論, 問題行動消去, 適応行動学習, 脱感作法, 断行訓練法, フラティング法, トークンエコノミー法, 後方連鎖法, 嫌悪療法, 認知療法
- 第3回 [社会生活技能訓練] キーワード:ストレス脆弱性対処技能モデル, 薬物, 社会的支援, 生活技能, 受信, 処理, 送信, ロールプレイ, フィードバック, リハーサル, 宿題, プロンプティング, コーチング
- 第4回 [心理教育ミーティング] キーワード:認知, 情報提供（疾患, 治療法, 対処法）, 再発防止, 説明と同意, 家族
- 第5回 [家族療法] キーワード:システム論, 循環的因果関係, IP, 全体性, ホメオスターシス, ジョイニング, 二重拘束, 感情表出,
- 第6回 [心理劇] キーワード:即興劇, 自発性, 役割, カタルシス, 洞察, いまここで, 監督, 演者, 観客, 補助自我, 舞台, ウオーミングアップ, ドラマ, シェアリング, 役割交換, 二重自我法, 鏡映法, 役割代理法,
- 第7回 [箱庭療法] キーワード:自由にして保護された空間, 枠, 退行, 具象性, 集約性, 直接性, 簡潔性, 主体的水準, 客体的水準, フィードバック
- 第8回 [絵画療法] キーワード:芸術療法, 精神療法的, 指導的, レクリエーション的, 構造的, 非構造的, 投影, 同調, フィードバック, 絵画分析, 個人, 集団
- 第9回 [音楽療法] キーワード:芸術療法, 同質性, 場と曲, 受容的（鑑賞）, 能動的（歌唱, 演奏）, 集団（合唱, 合奏）, 音楽の特性, 情動, 精神機能, 法則性, 協調性
- 第10回 [森田療法] キーワード:あるがまま, 目的本位, 不問, 生の欲望, 死の恐怖, 精神交互作用, 思考の矛盾, 絶対臥褥期, 作業期
- 第11回 [精神分析理論] キーワード:発達論, 無意識, 前意識, 意識, イド, 自我, 超自我, 防衛機制, 疾病利得, 治療構造, アンビバレント, 転移, 行動化, 直面化, 明確化, 解釈, 洞察, エリクソン発達理論,
- 第12回 [交流分析理論] キーワード:エゴグラム, 自我状態（親, 大人, 子供）, 交流パターン, ストローク（相補, 交叉, 裏面）, 基本的構え, 時間の構造化
- 第13回 [精神療法] キーワード:支持療法, 表現療法, 洞察療法, 訓練療法, 治療者の資質と態度, 治療構造, 来談者中心療法, 傾聴, 受容, 共感, 支持, 依存, 対人距離, 信頼,
- 第14回 [集団精神療法] キーワード:ヤーロム, ビオン, モゼイ, 集団力動, 治療構造（閉鎖, 開放, 人数, 時間, 課題, 疾患, 重症度）, 沈黙, 今ここで,
- 第15回 [治療構造のまとめ] キーワード:行動療法, SST, 心理教育, 家族療法, 心理劇, 箱庭療法, 絵画療法, 音楽療法, 森田療法, 精神分析理論, 交流分析理論, 精神療法, 集団精神療法,

■ 評価方法

ペーパー試験（小テストを含む）100%

但し、欠席は1回につき5点、遅刻・早退および受講態度不良は1回につき3点減点。

■ 教科書

書名；精神疾患の理解と精神科作業療法，著者：朝田隆，中島直，堀田英樹，出版社；中央法規出版

■ 参考書

書名；作業療法学ゴールドマスターテキスト精神障害作業療法学，監修；長崎重信，出版社；メジカルビュー社

■ 留意事項

各自、教科書および配布された各種理論のレジュメを予習して、講義に備えること。そして、疑問点を3つ以上抽出して、調べ、発表すること。その中で文献検索の方法を学び、同時に興味や問題意識を深めること。

グループ討論会もあるので、他人任せにすることなく、自主的に、責任をもって、参加すること。

授業科目	精神障害治療学Ⅱ	担当者	中山 広宣		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 作業活動の治療的意義.
2. 精神科における作業療法の意義と必要性.
3. 精神科作業療法の理論, 評価, 治療計画.

■ 目 標

1. 精神科リハビリテーションにおける精神障害作業療法の重要性を理解する.
2. 面接および評価と治療計画のシュミレーションにて実習に備える.
3. 疾患別, 回復段階に応じた作業療法を習得し, 実習に備える.

■ 授 業 計 画

- 第1回 [治療共同体理論] キーワード: ホスピタリズム, ヒエラルキー, 民主主義, 自治主義, 許容性, 現実直面, ミーティング, 自由, 責任, 活動, 集団療法
- 第2回 [デイケア・ナイトケア] キーワード: 地域生活, 短期入院, 集団療法, プログラム, 仲間, 社会生活技能, 役割, 責任, 自己決定, 自由の保障,
- 第3回 [精神科作業療法総論] キーワード: 人と作業活動, 作業活動の治療的要素, 非言語的交流, 治療形態, 個人療法, 集団療法, 治療目的, 評価, 対人関係, 作業能力
- 第4回 [精神科作業療法の治療構造] キーワード: 4重構造 (治療契約, OT室, 作業活動, 治療関係), 外的構造, 内的構造, 特殊性, 日常性, 普遍性, 現実性, 構成的, 非構成的, 構造化
- 第5回 [作業活動の効用] キーワード: 現実, 自由と責任, 生きた活動, 完成, 自己の存在, 協同体験, 自我強化, モデル, 訓練, 適応行動, QOL, 適応と禁忌,
- 第6回 [精神障害作業療法の流れ] キーワード: 処方箋, 情報収集, 他部門, カルテ, 面接, 観察, テスト, 評価計画, 評価, 再評価, 健康面, 比較, 障害の把握と考察, ゴール, 治療計画, 治療実施, 記録,
- 第7回 [評価の種類] キーワード: 情報収集 (カルテ, 他部門), 面接, 観察 (対人関係, 作業活動, 精神症状), テスト (投影法, 活動, 認知),
- 第8回 [導入時面接の実際] キーワード: 自己紹介, 守秘義務, 場所, 生活状況, 良いこと, 困ること, 現病歴, 作業療法の説明, 暫定的評価と治療計画,
- 第9回 [治療計画] キーワード: ICF, 健康状態, 機能障害, 活動制限, 参加制約, 環境因子, 個人因子, 短期目標, 長期目標, 作業活動の用い方, 治療者の自己の治療的活用, 集団の活用,
- 第10回 [精神疾患と認知機能障害] キーワード: 統合失調症, うつ病, 陽性症状, 陰性症状, 注意機能, 記憶機能, 知覚機能, 実行機能, 生活障害, 情報処理障害,
- 第11回 [疾患別作業療法Ⅰ] キーワード: 統合失調症, 回復段階, 急性期, 寛解期, 維持期, 社会復帰期, 行動特性, 治療方法, 支援方法,
- 第12回 [疾患別作業療法Ⅱ] キーワード: 気分障害, 神経症, 境界性パーソナリティ障害, 依存症, 行動特性, 治療方法,
- 第13回 [症例検討Ⅰ] 評価シュミレーションの発表と討論. 与えられた症例の情報に対して, グループごとに, 評価計画, 評価方法, 問題点や障害像を考える.
- 第14回 [症例検討Ⅱ] 治療計画シュミレーションの発表と討論. 与えられた症例の問題点や障害像に対して, グループごとに, 治療計画を考える.
- 第15回 [まとめ] キーワード: 治療共同体, デイケア, 作業療法

■ 評価方法

ペーパー試験（小テストを含む）100%

但し、欠席は1回につき5点、遅刻・早退および受講態度不良は1回につき3点減点。

■ 教科書

書名；精神疾患の理解と精神科作業療法，著者：朝田隆，中島直，堀田英樹，出版社；中央法規出版

■ 参考書

書名；作業療法学ゴールドマスターテキスト精神障害作業療法学，監修；長崎重信，出版社；メジカルビュー社

■ 留意事項

各自、教科書および配布された各種理論のレジュメを予習して，講義に備えること。そして，疑問点を3つ以上抽出して，調べ，発表すること。その中で文献検索の方法を学び，同時に興味や問題意識を深めること。

グループ討論会もあるので，他人任せにすることなく，自主的に，責任をもって，参加すること。

授業科目	発達障害治療学 I	担当者	辻 薫		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

発達障害に対する作業療法についての基礎知識と治療理論を説明する。
 作業療法の役割を、施設、地域、家庭など環境に対応させつつ紹介する。
 作業療法の評価と目的について、子どもの生活における遊びや作業課題全般への関わりをもつ視点で学習する。感覚、知覚、認知、行動の発達と障害との相互関係を考慮した治療計画の立て方を演習する。

■ 目 標

発達障害における生活の困難さを理解し、子どもの潜在能力を引き出す作業療法の役割を理解し、他者に説明できる。子どもに必要な遊びや作業が可能になるために必要な評価を説明し、その一部を実施することができる。モデル事例で評価から得られた情報を統合解釈し、治療計画し、他者に説明できる。

■ 授 業 計 画

第1回 発達障害治療学 総論
 第2回 子どもの生活と ICF
 第3回 発達障害の作業療法に応用する治療理論
 第4回 作業療法士の役割と実施形態
 第5回 評価と治療・援助の実践課程① 評価の目的と方法
 第6回 評価と治療・援助の実践課程② 評価の選択と実施上の留意点
 第7回 評価と治療・援助の実践課程③ 評価結果の統合と解釈
 第8回 評価と治療・援助の実践課程④ 説明責任と同意のプロセス
 第9回 評価と治療・援助の実践課程⑤ 治療・援助方法 発達促進・機能獲得
 第10回 評価と治療・援助の実践課程⑥ 治療・援助方法 代償・適応
 第11回 評価と治療・援助の実践課程⑦ 治療・援助方法 環境調整
 第12回 評価と治療・援助の実践課程⑧ 記録と効果判定
 第13回 発達過程の基礎知識と治療への応用 ①心身機能の発達
 第14回 発達過程の基礎知識と治療への応用 ②活動と参加の発達
 第15回 地域で求められる発達支援と制度の理解

■ 評価方法

試験50% 提出課題30% 演習と授業中の態度20%

■ 教 科 書

作業療法学全書 改訂第3版 6 作業治療学 発達障害
 田村良子編集 社団法人日本作業療法士協会 監修 協同医書出版社

■ 参 考 書

脳性麻痺児の家庭療育 第3版 梶浦一郎監訳、医歯薬出版
 こどものリハビリテーション医学第2版 陣内一保編集、医学書院 他

■ 留 意 事 項

授業の中で演習を実施する場合があります。動きやすい服装で参加してください。

授業科目	発達障害治療学Ⅱ	担当者	辻 薫		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前期で学んだ作業療法の役割、評価と治療計画の作成方法をふまえて、疾患障害年齢別に作業療法における援助技法を学習する。環境設定、活動の選択と段階付け、実際の治療における援助技法、チームアプローチの基本について演習する。

■ 目 標

障害がある子どもの疾患別、年齢別、作業療法の実際について、モデル事例を通して理解する。遊びや作業を可能にする援助技法の基本を習得する。また、簡単な自助具や、家庭や学校生活で実践できるマネジメントプログラムの作成ができ、チームでのアプローチを理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 疾患・障害別作業療法の実際
子どもとして理解すること
- 第2回 脳性麻痺 両麻痺
- 第3回 脳性麻痺 片麻痺
- 第4回 脳性麻痺 アテトーゼ
- 第5回 脳性麻痺 失調
- 第6回 感染性疾患、頭部外傷など
- 第7回 重症心身障害 四肢麻痺
- 第8回 筋ジストロフィー症
- 第9回 骨系統疾患
- 第10回 学習障害
- 第11回 注意欠陥多動性障害
- 第12回 広汎性発達障害（自閉性障害）
- 第13回 知的障害
- 第14回 視覚障害・聴覚障害
- 第15回 演習とまとめ

■ 評 価 方 法

評価方法：試験50% 提出課題30% 演習と授業中の態度20%

■ 教 科 書

作業療法学全書 改訂第3版 6 作業治療学 発達障害 田村良子編集 社団法人日本作業療法士協会
監修 協同医書出版社

■ 参 考 書

脳性麻痺児の家庭療育 第3版 梶浦一郎監訳、医歯薬出版、こどものリハビリテーション医学第2版
陣内一保編集、医学書院 他

■ 留 意 事 項

授業の中で演習を実施する場合があります。動きやすい服装で参加してください。

授業科目	老年期障害治療学Ⅰ	担当者	横井 賀津志		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

老年期障害に対する評価、治療に関する基礎知識を学ぶ。主な対象疾患は、認知症、廃用性症候群、中枢神経疾患、整形外科疾患であり、これらの疾患により生じる老年期特有の障害に対する作業療法アプローチの概要を教授する。

■ 目 標

- 1, 高齢者の現状を理解する。
- 2, 老年期障害作業療法の実践に必要な基礎知識の習得を目指す。
- 3, 老年期障害特有の疾患を知り、作業療法の概要について理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 高齢社会に伴う諸問題
- 第2回 高齢期の特徴1（生活機能、身体機能）
- 第3回 高齢期の特徴2（認知機能）
- 第4回 介護保険制度
- 第5回 老年期作業療法の実践（基本的枠組み）1
- 第6回 老年期作業療法の実践（基本的枠組み）2
- 第7回 一般高齢者への作業療法
- 第8回 特定高齢者への作業療法
- 第9回 老年期疾患別作業療法（認知症1）
- 第10回 老年期疾患別作業療法（認知症2）
- 第11回 老年期疾患別作業療法（認知症3）
- 第12回 老年期疾患別作業療法（整形疾患1）
- 第13回 老年期疾患別作業療法（整形疾患2）
- 第14回 老年期疾患別作業療法（中枢神経疾患）
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験（60%）、レポート課題（40%）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価します。

■ 教 科 書

資料を配布します。

■ 参 考 書

松房利憲 他：標準作業療法学専門分野 高齢期作業療法学 第2版. 医学書院, 2010.

■ 留 意 事 項

講義の中で、理解できないことがあれば、積極的に質問ください。

授業科目	老年期障害治療学Ⅱ	担当者	横井 賀津志		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

高齢者の特性に合わせた評価の方法、高齢者に対して使用頻度の高い生活評価、身体機能評価、認知機能評価、心理機能評価の実施方法などについて演習を実施する。評価から得られた情報をもとに全体像を把握する方法を学び、その人に必要な意味ある作業を提供し実践できる手だてを教授する。

■ 目 標

老年期障害作業療法の実践に必要な技術の習得を目指す。

■ 授 業 計 画

- 第1回 老年期の障害学（QOL，社会活動，家族関係，ADL，身体機能，認知機能）
- 第2回 老年期作業療法の実際（プロセスと技術）
- 第3回 老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）
- 第4回 一般高齢者，特定高齢者への作業療法介入
- 第5回 認知症高齢者への作業療法介入1
- 第6回 認知症高齢者への作業療法介入2
- 第7回 認知症高齢者に対する事例検討1
- 第8回 認知症高齢者に対する事例検討2
- 第9回 認知症高齢者に対する事例検討3
- 第10回 通所系，訪問系サービスにおける作業療法
- 第11回 施設系サービスにおける作業療法
- 第12回 集団活動演習1
- 第13回 集団活動演習2
- 第14回 集団活動演習3
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験（60％），レポート課題（40％），出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価），の結果を総合的に評価します。

■ 教 科 書

資料を配布します。

■ 参 考 書

松房利憲 他：標準作業療法学専門分野 高齢期作業療法学 第2版. 医学書院，2010.

■ 留 意 事 項

講義の中で，理解できないことがあれば，積極的に質問ください。

授業科目	作業療法治療学実習 I	担 当 者	大友 健治		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

教育課程で習得した種々の評価技法を実際の対象者に実施し、身体的・心理的・社会的状況を系統立てて分析・評価する。

■ 目 標

- ①対象者に対処できるコミュニケーション能力を身につける
- ②対象者の症状、状態の把握が適切にできる知識を身につける
- ③必要な検査が的確に行える技術を身につける
- ④情報を分析整理する統合力を身につける
- ⑤他者に評価内容を伝えるレポート作成能力を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（実習内容説明、グループ分け）
- 第2回 対象者情報公開・評価計画
- 第3回 評価計画提出
- 第4回 評価計画に対するフィードバック
- 第5回 1回目対象者様評価実施
- 第6回 実施後の情報共有・レポート作成
- 第7回 実施後レポートに対するフィードバック、次回計画書作成・提出
- 第8回 2回目対象者様評価実施
- 第9回 実施後の情報共有・レポート作成
- 第10回 実施後レポートに対するフィードバック、次回計画書作成・提出
- 第11回 3回目対象者様評価実施
- 第12回 実施後の情報共有・レポート作成
- 第13回 治療計画立案
- 第14回 治療計画立案に対するフィードバック
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

レポート（100%）、出席状況（無断欠席、遅刻はマイナス評価）の結果を総合的に評価する。不合格者には再試験を実施する。（筆記試験）

■ 教 科 書

ICF 国際生活機能分類 中央法規出版株式会社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

実習であるので、出席点は重視する。1回の欠席による減点は大きく設定する。

授業科目	作業療法治療学実習Ⅱ	担当者	足立 一		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

教育課程で習得した種々の評価技法を実際の対象者に実施し、身体的・心理的・社会的状況を系統立てて分析・評価する。

■ 目 標

作業療法治療学実習Ⅰで習得した知識をもとに臨床場面で対象者のニーズに合わせて治療や作業活動提供に応用するための知識、技術を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（実習内容説明、グループ分け）
- 第2回 対象者情報公開・評価計画
- 第3回 評価計画提出
- 第4回 評価計画に対するフィードバック
- 第5回 1回目対象者様評価実施
- 第6回 実施後の情報共有・レポート作成、実施後レポートに対するフィードバック、次回計画書作成・提出
- 第7回 2回目対象者様評価実施
- 第8回 実施後の情報共有・レポート作成、実施後レポートに対するフィードバック、次回計画書作成・提出
- 第9回 3回目対象者様評価実施
- 第10回 実施後の情報共有・レポート作成、治療計画立案
- 第11回 治療計画立案に対するフィードバック
- 第12回 対象者様に治療計画の実施
- 第13回 実施後のフィードバック
- 第14回 対象者様に治療計画の実施（2回目）
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

レポート（100%）、出席状況（無断欠席、遅刻はマイナス評価）の結果を総合的に評価する。不合格者には再試験を実施する。（筆記試験）

■ 教 科 書

ICF 国際生活機能分類 中央法規出版株式会社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

実習であるので、出席点は重視する。1回の欠席による減点は大きく設定する。

授業科目	作業療法技術論Ⅰ	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法は対象者の生活活動を広げる為の援助である。その援助活動において、対象者の所属する社会や環境に対して働きかけを行う。本講義では、環境の一部である「道具」や作業過程に着目し、障害を持つ方が生活を広げる道具に関する知識の習得、道具作りに関する方法や過程を体験を通して理解を深める。

■ 目 標

福祉用具の概念の理解する
作業における工程と道具の使用を理解する

■ 授 業 計 画

- 第1回 今後、作業療法を学び実践していく中で、最低限必要なプレゼンテーションの方法を体験を通して学ぶ。
- 第2回 福祉用具に関する基本的な用語や定義を調べ理解を深める。
調べた内容を整理し、レポート形式での報告を行う。
- 第3回 国際生活機能分類である ICIDH 及び ICF の概念を理解し、障害を理解する考え方の流れを理解する。
- 第4回 障がい者運動の歴史と共に歩んできた生活支援機器の歴史を学ぶ。その過程で、障害を捉える考え方の変化を学び、理解を深める。
- 第5回 福祉機器の開発の歴史と福祉機器の開発の流れを学ぶ。
- 第6回 共用品の概念やバリアフリーデザイン、ユニバーサルデザイン、インクルーシブデザインの違いを学ぶ。
- 第7回 実際に福祉用具を使用し、福祉用具の使用の留意点や援助の際の留意点を学ぶ。
- 第8回 作業の種類を理解し、作業の階層を理解する。
- 第9回 実際の作業を例に取り、作業を階層に分けていく。
- 第10回 作業の階層分けに関節の動きを追加し、体の動きと作用の理解を深める。
- 第11回 自助具の製作プロセスを学び、理解する。
- 第12回 これまでに行った動作分析に基づいて、自助具を設計する。
- 第13回 設計した自助具を作製し、効果判定を行う。
- 第14回 製作した自助具を評価し、問題点を整理し、問題点を修正した自助具を検討する。
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

豆テスト及び提出物や成果物 5 割、定期テスト 5 割で成績を判定する。講義の欠席は、総合得点から減点する。

■ 教 科 書

作業療法学全書 改訂 3 版 作業療法技術学 2 福祉用具の使い方・住環境整備
手作り自助具の工作技術 三輪書店 2004

■ 参 考 書

改訂版 自助具ハンドブック テクノエイド協会

■ 留 意 事 項

講義において、豆テストを実施、講義まとめ用紙の提出を求める。講義後は、復習しておくこと。
受講時は学生証を必ず携帯すること。他の学生の迷惑になる行為は慎むようにして下さい。

授業科目	作業療法技術論Ⅱ	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、生活の便宜を図る福祉用具と義肢を中心に理解を深める。福祉用具に関しては、使用する場面毎に整理し、適合する際の留意点や必要な情報の整理を行う。義肢に関しては、義肢の適合の際に必要な情報となる身体の形態の計測の実技を含め適合の理解を深める。

■ 目 標

福祉用具と義肢の概念や内容について理解を深める
義肢の適合に必要な身体の計測技法を体得する

■ 授 業 計 画

- 第1回 福祉用具総論：福祉用具を選定する際、使用者や使用状況など確認しておくべき情報を学びます。
- 第2回 福祉用具の適合の概念と福祉用具の供給システム
- 第3回 起居・床上と起居・床上で用いられる福祉用具
- 第4回 移乗と以上で用いられる福祉用具
- 第5回 排泄場面での福祉用具の適合
- 第6回 姿勢・姿勢保持と姿勢保持で用いられる福祉用具
- 第7回 歩行と歩行支援で用いられる福祉用具
- 第8回 入浴と入浴場面で用いられる福祉用具
- 第9回 更衣・整容・入浴と更衣・整容・入浴場面で用いられる福祉用具
- 第10回 義肢総論：義肢の種類やその目的と適合における身体評価とその過程を整理し、学びます。
- 第11回 義肢に必要な評価：触診
骨を指標に身体の形態を理解します。
- 第12回 義肢の適合に必要な評価：形態計測（四肢長計測）
四肢の長さの計測を演習スタイルで学びます。
- 第13回 義肢の適合に必要な評価：形態計測（四肢周径計測）
四肢の周径の計測を演習スタイルで学びます。
- 第14回 義肢の適合に必要な評価実技演習
学んだ計測技法の確認を行います。
- 第15回 まとめ これまでに学んだ内容の確認を行います。

■ 評 価 方 法

提出物4割、定期テスト5割、実技演習1割で成績を判定する。講義の欠席は、総合得点から減点する。

■ 教 科 書

作業療法学全書 改訂3版 作業療法技術学1 義肢装具学

■ 参 考 書

PT・OTのための測定評価 形態計測・反射検査
ボディ・ナビゲーション 医道の日本社

■ 留 意 事 項

講義において、豆テストの実施や講義まとめ用紙を提出してもらう。講義後は、復習しておくこと。
実技演習では、習得した実技の内容を確認する。実技内容が不十分な場合は、再度確認を行う。
受講時は学生証を必ず携帯すること。他の学生の迷惑になる行為は慎むようにして下さい。

授業科目	作業療法技術論Ⅲ	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、装具と住環境改善に注目して理解を深めることを目的にしている。装具においては、装具の適合に関する評価の過程や内容を学び、装具の作成過程を実際に体験を通して理解を深める。住環境改善においては、事例を通して住環境の改善を検討する。

■ 目 標

装具の適合や対象の理解を深める
居住環境の

■ 授 業 計 画

- 第1回 装具総論：装具の歴史や装具の変遷を学びます。
- 第2回 上肢装具総論：上肢装具の分類と装具の機能を学びます。
- 第3回 上肢装具各論：上肢装具の機能や目的による分類を学びます。
- 第4回 装具療法における作業療法士の役割と上肢装具・スプリントの製作過程
- 第5回 上肢装具・スプリントの製作1 手指装具の作成
- 第6回 上肢装具・スプリントの製作2 手装具の作成1
- 第7回 上肢装具・スプリントの製作3 手装具の作成2
- 第8回 上肢装具・スプリントのチェックアウト
作成した送付をチェックします
- 第9回 移動支援用具・車椅子
- 第10回 車椅子の適合と車椅子での生活
- 第11回 障害を持って暮らすこと、福祉用具の活用
- 第12回 住宅の基本的な理解：住居の基本となる単位などを学びます。
- 第13回 居住環境改善演習：作成された平面図を基に、障害にあわせた改修計画を検討します。
- 第14回 居住環境改善演習：作成された平面図を基に、障害にあわせた改修計画を検討します。
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

提出物5割、定期テスト5割で判定します。
講義の欠席は、原点对象とします。

■ 教 科 書

作業療法学全書 改訂3版 作業療法技術学2 福祉用具の使い方・住環境整備 共同医書出版
作業療法学全書 改訂3版 作業療法技術学1 義肢装具学 共同医書出版

■ 参 考 書

福祉医療建築の連携による高齢者・障害者のための住居改善 学芸出版

■ 留 意 事 項

講義内で行う演習において、成果を提出してもらいます。
演習時には、刃物等危険がともなう道具を使用します。危険性を十分に理解して、行動して下さい。
受講時は学生証を必ず携帯すること。他の学生の迷惑になる行為は慎むようにして下さい。

授業科目	臨床ゼミナールⅠ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

これまでに学んだ作業療法評価学、臨床見学実習等の内容について、臨床例に結びつけながら理解を深める。臨床見学実習の振り返りを通して医療人としてのあり方や作業療法の役割・知識や技術について理解を深め、実際の体験に関連した論文を十分読み込み、グループ学習、ディスカッション、ロールプレイ等の演習を通じた学習を行う。そこから取り組むべき個人の学習課題を見つける。また、学習したことをまとめて報告することでプレゼンテーション技術を身につける。

■ 目 標

医療人としてのあり方について理解し実践できる。作業療法の役割・知識や技術について説明できる。また、臨床見学実習で得たことを応用し、面接・観察について理解し、模擬的な場面において面接・観察を実施し記録できる。臨床見学実習および授業から学生個人の学習課題を認識し、その課題に取り組むことができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション、1年の科目で学習した内容の復習、臨床見学実習の振り返り
医療人としてのあり方-臨床見学実習で見つけた課題、論文
- 第2回 医療人としてのあり方-ロールプレイ他
- 第3回 医療人としてのあり方-ロールプレイ他 自己学習課題の検討
- 第4回 作業療法の役割の理解-臨床見学実習で学んだこと
- 第5回 作業療法の役割の理解-論文 自己学習課題の検討
- 第6回 作業療法の知識や技術-臨床見学実習で学んだこと
- 第7回 作業療法の知識や技術-論文 自己学習課題の提出①
- 第8回 面接・観察に関する知識と技術-評価学・臨床見学実習より 面接・観察ロールプレイ
- 第9回 面接・観察の記録の書き方-評価学・臨床見学実習の記録より 面接・観察ロールプレイ
課題：記録提出
- 第10回 面接・観察のロールプレイ 自己学習課題の提出② 課題：記録提出
- 第11回 自己学習課題の発表の準備
- 第12回 自己学習課題の発表
- 第13回 自己学習課題の発表
- 第14回 自己学習課題の発表
- 第15回 自己学習課題の発表、まとめ

■ 評価方法

出席点は減点のみ（無届けの遅刻・早退－1点、無届けの欠席－3点）、やむを得ない理由による遅刻・早退・欠席は考慮します。授業への取り組み方20%、提出物40%、発表40%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教 科 書

なし

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業で提示します。

授業科目	臨床ゼミナールⅡ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

これまでに学んだ作業療法評価学、臨床見学実習等の内容について、臨床例に結びつけながら理解を深める。主には症例報告または障がい当事者との面接内容を資料として取り上げ、提示される作業療法の実際を深く理解するために、論文や情報を十分読み込み、グループ学習、ディスカッション、ロールプレイ等の演習を通じた学習を行う。また、学習したことをまとめて報告することでプレゼンテーション技術を身につける。

■ 目 標

論文または障がい当事者の話から作業療法評価に必要な情報を収集し、全体像としてまとめることができる。地域生活を送る障がい当事者の実際の生活を理解し、必要な作業療法支援を考える事が出来る。学習した内容をプレゼンテーションやレポートにまとめ、的確に他者に伝える事が出来る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション、前期の臨床ゼミナールの復習、グループ分け
- 第2回 作業療法の役割、知識と技術を川モデルに沿って考えてみる
- 第3回 作業療法の役割、知識と技術をICFに沿って考えてみる
- 第4回 作業療法の利用者の話・論文の提示 ICFに沿って考える（老年期障害領域または身体障害領域）
- 第5回 グループ内での情報共有
- 第6回 グループでのまとめ
- 第7回 グループでのまとめ
- 第8回 グループでのまとめ
- 第9回 グループ発表
- 第10回 作業療法の利用者の話・論文の提示 川モデルに沿って考える（精神障害領域）
- 第11回 グループ内での情報共有
- 第12回 学生個別にまとめる
- 第13回 学生個別にまとめる
- 第14回 学生個別にまとめる
- 第15回 まとめ、今後の自己課題

■ 評 価 方 法

出席点は減点のみ（無届けの遅刻・早退 -1点、無届けの欠席 -3点）、やむを得ない理由による遅刻・早退・欠席は考慮します。授業への取り組み方20%、提出物20%、発表30%、レポート試験30%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教 科 書

なし

■ 参 考 書

授業で提示します。

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床ゼミナールⅢ	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

専門基礎科目及び作業療法評価学，作業療法治療学等専門科目で学んだことを基盤とする．ICF に沿って人の生活機能（障害）を構造的に捉えることを習得するため，事例報告の読み込みと実際例からの情報収集を行ない，それをまとめて報告するものである．

■ 目 標

1. 読み込んだ事例や実際例について，ICF に沿ってまとめることができる
2. まとめたことをわかりやすく報告することができる
3. ICF と作業療法，健康との関係を説明することができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ICF を理解する
- 第3回 事例① 事例の提示を受け，ICF に沿ってまとめる
- 第4回 事例① ICF に沿ってまとめる
- 第5回 事例① まとめた結果を報告する
- 第6回 事例② 事例の提示を受け，ICF に沿ってまとめる
- 第7回 事例② ICF に沿ってまとめる
- 第8回 事例② まとめた結果を報告する
- 第9回 実際例からの情報収集
- 第10回 実際例 得られた情報を ICF に沿ってまとめる
- 第11回 実際例 得られた情報を ICF に沿ってまとめる
- 第12回 実際例 まとめた結果を報告する
- 第13回 ICF と作業療法，健康との関係についてのグループディスカッション①
- 第14回 ICF と作業療法，健康との関係についてのグループディスカッション②
- 第15回 ICF と作業療法，健康との関係についてのまとめ，結果を報告する

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポート内容 60%， 報告内容と方法 40%
 なお，欠席，遅刻早退は減点対象（一回につき，事前届出あり：－2点， 事前届出なし：－10点）

■ 教 科 書

世界保健機関 国際生活機能分類，中央法規．

■ 参 考 書

必要に応じて提示

■ 留 意 事 項

講義等の内容が実践への橋渡しとなるよう，自ら積極的に取り組むこと．
 自ら取り組むことで，学習の楽しさや作業療法の面白さ，大切さが実感できることを期待する
 なお本科目は，作業療法治療学実習Ⅰとリンクする予定である

授業科目	臨床ゼミナールⅣ	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床の実践例を、対象者と作業療法士の双方から学ぶことで、臨床への現実感を持ち、臨床実習に向けての具体的な自己課題に取り組む

■ 目 標

1. 臨床の厳しさと責任感を知ること
2. 臨床実習に向けての自己課題がわかること
3. 課題解決方法がわかり、実践できること

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 臨床で求められる作業療法士とは
作業療法を経験した方の体験談を聞き、自己課題を明らかにする
- 第3回 臨床で求められる作業療法士とは
現場の作業療法士の経験を聞き、自己課題を明らかにする
- 第4回 臨床で求められる作業療法士とは
臨床実習で求められる態度と技能を確認する（臨床実習評価表から）
- 第5回 学修の振り返り 医療人、職業人としてのあり方
- 第6回 学修の振り返り 作業療法実践のための知識と技術
- 第7回 学修の振り返り 情報の統合と介入計画の立て方
- 第8回 学修の振り返り 記録報告の方法
- 第9回 自己課題の検討と課題解決法の提案
- 第10回 課題解決法の提案と実践計画立案
- 第11回 グループディスカッションとグループ学習
- 第12回 グループディスカッションとグループ学習
- 第13回 グループディスカッションとグループ学習
- 第14回 自己フィードバック
- 第15回 学修結果の報告をする

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する

毎回のリアクションペーパー 60% 自己課題に関するレポート 40%

なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回につき、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点）

■ 教 科 書

指定教科書はなし

■ 参 考 書

その他必要に応じて提示

■ 留 意 事 項

一生懸命取り組むのは当たり前です。近い将来良い“結果”を出せるよう努力すること
なお本科目は、作業療法治療学実習Ⅱとリンクする予定である

授業科目	地域作業療法学Ⅰ	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

地域で障害児・者、高齢者を支えるために必要な作業療法の機能・役割についての理解を深め、ライフステージの視点や法制度等と関連付けながら地域作業療法とは何かを考え学ぶ。

■ 目 標

1. 地域作業療法とは何かがわかる
2. ライフステージに応じた関連法制度と地域作業療法の展開例を知る
3. ライフステージに応じた健康課題と法制度、地域作業療法の展開に関する資料を作る

■ 授 業 計 画

- 第1回 地域作業療法の枠組み - 地域を知る、生活を知る
- 第2回 地域作業療法の基本 - 評価視点を知る
- 第3回 地域作業療法の基本 - マネジメントを知る
- 第4回 地域作業療法実践機関を知る
- 第5回 乳幼児期、学童期における地域作業療法を知る
- 第6回 乳幼児期、学童期における地域作業療法を知る
- 第7回 思春期、青年期における地域作業療法を知る
- 第8回 思春期、青年期における地域作業療法を知る
- 第9回 成人期における地域作業療法を知る
- 第10回 成人期における地域作業療法を知る
- 第11回 成人期における地域作業療法を知る
- 第12回 老年期における地域作業療法を知る
- 第13回 老年期における地域作業療法を知る
- 第14回 老年期における地域作業療法を知る
- 第15回 まとめ（絵本で学ぶ地域作業療法）

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する

レポート 40%， 定期試験 60%

なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回につき、事前届出あり：－2点、事前届出なし：－10点）

■ 教 科 書

作業療法学全書第13巻 地域作業療法学 協同医書出版社 3200円＋税

■ 参 考 書

標準作業療法学 社会生活行為学 医学書院、4700円＋税

標準作業療法学 地域作業療法学 医学書院、3800円＋税

その他必要に応じて授業で提示

■ 留 意 事 項

作業療法の視点を広げ、障害別ではなくライフステージに応じた作業療法について学修すること

授業科目	地域作業療法学Ⅱ	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

既存の資料や調査などを通して地域の健康課題を明らかにし、その対策を考える。このことから、生活の場で障害児・者、高齢者を支えるためにどのような作業療法を実施するかをについて学ぶ、グループ単位での課題解決型の学修とする

■ 目 標

1. 地域の健康課題を把握する方法がわかる
2. 情報を読み取ることができる
3. 作業療法の視点から健康課題の解決案が作成できる
4. 結果報告が出来る

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
地域の現状把握方法を知る
- 第2回 地域の現状を把握する
- 第3回 地域の現状を把握する
- 第4回 地域の健康課題を抽出する
- 第5回 地域の健康課題を抽出する
- 第6回 結果報告とディスカッション レポート作成
- 第7回 地域の健康課題のまとめ
- 第8回 健康課題解決方法を提案する
- 第9回 健康課題解決方法を提案する
- 第10回 健康課題解決方法を提案する レポート作成
- 第11回 結果報告の準備をする
- 第12回 結果報告とディスカッション レポート作成
- 第13回 実践例を学ぶ
- 第14回 地域作業療法キーワード集づくり-1
- 第15回 地域作業療法キーワード集づくり-2

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポート内容 60%、 報告内容 20% キーワード集 20%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回につき、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点）

■ 教 科 書

地域作業療法学全書第13巻 地域作業療法学，協同医書出版社，3200円＋税

■ 参 考 書

必要に応じて提示

■ 留 意 事 項

“地域”に介入する作業療法の方法を探っていくので、視野を広げるためにも自らが積極的に取り組んでほしい。尚、本科目は地域作業療法学実習とリンクする。

授業科目	地域作業療法学実習	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

デイケアや就労移行支援など地域リハビリテーションの実践現場に出向き、参加体験を行ない、そこで展開されていることを理解する。さらに、作業療法の視点から利用者のニーズを推測し、ニーズ充足のための作業療法を提案し、実践する。

■ 目 標

1. 実践現場に出向き、展開されていることがわかる
2. 利用者のニーズが推測でき、ニーズ充足のための計画立案・実践ができる
3. 実践したこと、理解したことを記録し、報告できる
4. 作業療法の役割がわかる

■ 授 業 計 画

- 第1回 実習オリエンテーション
- 第2回 地域作業療法実習－1 実践現場を把握し、利用者のニーズを推測する
- 第3回 地域作業療法実習－1 実践現場を把握し、利用者のニーズを推測する
- 第4回 地域作業療法実習－1 実践現場を把握し、利用者のニーズを推測する
- 第5回 地域作業療法実習－1 実践現場を把握し、利用者のニーズを推測する
- 第6回 作業療法プログラム立案・運営準備
- 第7回 作業療法プログラム立案・運営準備
- 第8回 作業療法プログラム立案・運営準備
- 第9回 作業療法プログラム立案・運営準備
- 第10回 地域作業療法実習－2 利用者のニーズ充足のための作業療法の実践
- 第11回 地域作業療法実習－2 利用者のニーズ充足のための作業療法の実践
- 第12回 地域作業療法実習－2 利用者のニーズ充足のための作業療法の実践
- 第13回 地域作業療法実習－2 利用者のニーズ充足のための作業療法の実践
- 第14回 実践報告準備
- 第15回 実践報告

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 臨床実習評価表に基づく実践取り組み態度（社会人、専門職としての基本的態度） 40%
 実践内容 10% 実習記録 30% 実習報告 20%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回につき、事前届出あり：－2点、事前届出なし：－10点）

■ 教 科 書

特になし

■ 参 考 書

必要に応じて提示する

■ 留 意 事 項

作業療法士を目指すものとして、真摯な態度で臨むことと日頃から十分な健康管理に努めることが重要です。同時に発想豊かな展開ができるように楽しんで取り組みましょう。作業療法のおもしろさが実感しましょう。

授業科目	日常生活活動学	担当者	洲崎 俊男		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日常生活に関与する諸活動の概念、代表的評価法、評価尺度の概念、生活関連活動の概念と範囲、国際障害分類と国際機能分類の知識をもつ。自助具、福祉・生活支援機器、コミュニケーション機器の知識を持つ。主な疾患・病態（脳卒中片麻痺、頸髄・脊髄損傷、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、筋ジストロフィー、関節リウマチ、切断、脳性麻痺、コミュニケーション障害、高次機能障害、認知症含む高齢者等）の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について学習する。

■ 目 標

日常生活に関与する諸活動の概念、分析、評価、及び練習についての知識を深める。国際障害分類から国際機能分類へ移行した経緯や主な概念についての理解を深める。更に、従来からの主な評価法を修得する。作業療法士が必要とする自助具、福祉・生活支援機器、コミュニケーション機器の知識を有する。代表的疾患の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について修得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法の中での位置づけ、日常生活活動の概念・定義・意義（評価の目的・範囲と項目、数量化）
- 第2回 国際障害分類から生活機能分類への流れ
- 第3回 代表的評価法
- 第4回 日常生活活動の運動学と障害学（基本的 ADL）
- 第5回 生活関連活動（拡大 ADL）
- 第6回 日常生活活動と自助具
- 第7回 日常生活活動を支援するリハビリテーション機器（福祉・生活支援機器）
- 第8回 日常生活活動とコミュニケーション機器
- 第9回 障害別の日常生活活動指導の実際：各論①片麻痺
- 第10回 各論②脊髄損傷（四肢麻痺、対麻痺）
- 第11回 各論③関節リウマチ
- 第12回 各論④切断（上肢、下肢）
- 第13回 各論⑤筋萎縮性疾患（筋ジストロフィー、筋萎縮性側索硬化症）
- 第14回 各論⑥脳性麻痺
- 第15回 各論⑦高齢者（在宅、認知症など）

■ 評 価 方 法

筆記試験（60%）、提出課題（20%）、出席状況（20%、無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

日常生活活動（動作）― 評価と訓練の実際 ―、土屋弘吉 他編、医歯薬出版

■ 参 考 書

日常生活活動 作業療法技術論 2 第10巻、早川宏子編、協同医書出版、ADL ― 作業療法の戦略・戦術・技術 ―、生田宗博編、三輪書店

■ 留 意 事 項

2 回の提出課題（福祉・生活支援機器、バリアフリー住宅）あり。

授業科目	臨床見学実習	担当者	作業療法学専攻教員		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習施設：一般病院、リハビリテーション病院など
2. 実習期間：分野が異なる2施設で各3日間の見学実習
3. 実習形態：臨床実習指導者と学生は1対1～3名の指導体制で見学実習を行う。
4. 専任教員は学生1～3名を引率し、臨床実習指導者とともに学生の指導を行なう。

■ 目 標

1. 各分野におけるリハビリテーションの流れとその中で作業療法（士）の役割を理解する。
2. 作業療法の各分野における対象と知識や技術を理解する。
3. 医療人および作業療法士としてのあり方を体得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 全体オリエンテーション。（11月中旬より開始。以後週1回行う）
- 第2回 事前学習課題（実習施設の情報収集とその領域の予習）。
- 第3回 事前学習課題へのフィードバック。
- 第4回 実習前技能演習1：臨床見学実習開始前に必要な技能の練習を行う。
- 第5回 実習前技能演習2：臨床見学実習の際に必要な技能の練習を行う。
- 第6回 臨床見学実習Ⅰ：実習施設において3日間の臨床見学実習を行う。
- 第7回 臨床見学実習Ⅰのフィードバック：臨床見学実習で学んだ内容（リハビリテーション・作業療法士の仕事など）を整理し、理解を深める。
- 第8回 臨床見学実習Ⅱ：臨床見学実習Ⅰとは異なる施設（領域）において3日間の臨床見学実習を行う。
- 第9回 臨床見学実習Ⅱのフィードバック：臨床見学実習で学んだ内容（リハビリテーション・作業療法士の仕事など）を整理し、理解を深める。
- 第10回 臨床見学実習報告会：臨床見学実習で学んだことやそのフィードバックの内容をまとめ、報告を行う。

■ 評 価 方 法

実習施設の評価と、学内における演習状況、提出物の内容・報告会の内容などを総合的に判断し、成績判定を行う。

■ 教 科 書

なし

■ 参 考 書

関連領域のテキストや文献を持参すること

■ 留 意 事 項

実習は対象者と実習施設のご好意により行なわれるため、感謝と礼儀を忘れないこと。
 単位認定には実習施設における実習期間のうち、5分の4以上の出席が必要であるため、健康に留意すること。
 学内演習、実習施設における実習において、身だしなみ、態度、取り組み姿勢などが不適切であると判断した場合、また、無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する。

授業科目	評価学実習	担当者	作業療法専攻教員		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	3 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習施設：一般病院、リハビリテーション病院、介護老人保健施設など。
2. 実習期間：3 週間の評価実習。
3. 実習形態：臨床実習指導者と学生は1 対 1 ～ 2 名の指導体制で評価実習を行う。
4. 専任教員は3 週間の実習期間中に1 回以上巡回訪問し、指導する。

■ 目 標

- 病院や介護老人保健施設などにおいて作業療法士の指導の下で、作業療法評価を実践する。
- ・作業療法評価計画を立案し、面接、観察、必要な検査測定などから情報を得る。
 - ・得られた情報を統合し、障害構造を明らかにする。
 - ・作業療法目標を設定し、プログラムを立案する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 全体オリエンテーション。
- 第2回 事前課題学習（実習施設の情報収集とその領域の予習）。
- 第3回 事前課題学習へのフィードバック。
- 第4回 実習前技能演習1：評価の概要（流れ）を理解する。
- 第5回 実習前技能演習2：実習に必要な評価技術の練習を行う。
- 第6回 実習前技能演習3：実習に必要な統合と解釈について演習を行う。
- 第7回 実習施設において、3 週間の評価実習を行う。
- 第8回 評価学実習へのフィードバック：評価学実習で学んだ内容を整理し、理解を深める。
- 第9回 評価学実習報告会：評価学実習で学んだことやそのフィードバックの内容をまとめ、報告を行う。

■ 評 価 方 法

実習施設の評価と、学内における演習状況、提出物の内容・報告会の内容などを総合的に判断し、成績判定を行う。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

関連領域のテキストや文献を持参すること。

■ 留 意 事 項

実習は対象者と実習施設のご好意により行なわれるため、感謝と礼儀を忘れないこと。
単位認定には実習施設における実習期間のうち、5 分の4 以上の出席が必要であるため、健康に留意すること。学内演習、実習施設における実習において、身だしなみ、態度、取り組み姿勢などが不適切であると判断した場合、また、無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する。

授業科目	理学療法概論	担当者	石倉 隆		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

理学療法や理学療法士の概略を理解し、言語聴覚療法や言語聴覚士との関係を解説する。また、理学療法の専門分化に則り、各分野に精通する理学療法士で講義を分担する。項目としては、神経系、運動器、小児期、スポーツ障害、循環器。

■ 目 標

「理学療法学」は学問体系が構築されつつあるが、人を対象とする医療では、学問としてだけではなくヒューマニズムにも力点を置きながら教授し、実学としての「理学療法学」理解を目指す。また、言語聴覚士と理学療法士の協業について、各人が自らの考えをまとめられることを望む。

■ 授 業 計 画

- 第1回 理学療法と言語聴覚療法（石倉）：理学療法と言語聴覚療法はともに障害を持つ対象者のリハビリテーション技術の一つである。決して単独の療法で満足いくリハビリテーションができるものではないことを説き、その関係と協力体制を考える。
- 第2回 理学療法の評価と治療の基礎（石倉）：理学療法を実施するに当たり、障害者の問題点抽出から統合・解釈、目標設定に至る評価の基礎と、目標を達成させるべく基本的治療をEBPTに則り概説する。
- 第3回 神経系理学療法学（石倉）：神経系理学療法では、脳機能、神経病理、経過の理解が重要である。脳血管障害と movement disorder を中心に、神経系理学療法の評価、治療、予後予測の特徴を概説する。
- 第4回 運動器理学療法学（佐藤睦）：運動器理学療法では、運動器の機能を理解し、損傷組織の治療を妨げないように運動を負荷することが重要である。代表的な運動器傷害をとりあげ、理学療法評価、治療、リスク管理などについて概説する。
- 第5回 小児期理学療法学（藪中）：小児理学療法が関わる代表的な疾患である脳性麻痺児を中心に、その下位分類と治療原則の解説を行う。加えて、全身の運動及び感覚機能障害が口腔運動にもたらす影響を理学療法の視点から解説し、理学療法士と言語聴覚士の協業の例の紹介を行う。
- 第6回 スポーツ障害理学療法学（境）：スポーツによって障害を有し、再度スポーツへの復帰が必要な場合、一般的な理学療法（メディカル・リハビリテーション）の他に、高度な運動機能の再獲得を目標においたアスレティック・リハビリテーションが必要となる。アスレティック・リハビリテーションの概念や実際を概説する。
- 第7回 循環器理学療法学（大槻）：心臓に障害をもつ患者の理学療法について、代表的心疾患の病態生理を解説し、理学療法評価、治療、目標設定の特徴を概説する。
- 第8回 まとめとディスカッション（石倉）：言語聴覚士と理学療法士の協業について。

■ 評価方法

単位修得試験（定期試験）受験資格のある者に対して、試験のみで評価する。

■ 教 科 書

適宜、プリントを配布する。

■ 参 考 書

細田多穂・他「理学療法入門テキスト」南江堂

■ 留 意 事 項

講義では、個人情報に係る資料も提示する。その取り扱いには十分注意し、学外でみだりに他言しないように心がけること。

授業科目	作業療法学概論	担当者	中山 広宣		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

リハビリテーションにおける作業療法の役割と機能（老年期障がい、身体障がい、地域リハビリテーション、発達障がい、精神障がい）を総合的にかつ体系的に理解する。

■ 目 標

人の健康に対する作業活動の意義を理解する。
作業療法の領域とその内容を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法の歴史
- 第2回 作業療法の意味
- 第3回 老年期障がいと作業療法
- 第4回 身体障がいと作業療法
- 第5回 地域リハビリテーションと作業療法
- 第6回 発達障がい領域と作業療法
- 第7回 精神障がい領域と作業療法
- 第8回 まとめ

■ 評 価 方 法

100% 試験

■ 教 科 書

■ 参 考 書

標準作業療法学 作業療法学概論 岩崎テル子編集 医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	医学総論	担当者	板倉 徹・板倉登志子・松井理直 山本永人・平林容子・田中千津子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 目 標

国家試験の受験に必要な知識を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 専門基礎分野 解剖学・生理学・病理学（板倉徹）
- 第2回 専門基礎分野 臨床神経学・神経系医学（板倉徹）
- 第3回 専門基礎分野 音響学（松井理直）
- 第4回 専門基礎分野 音響学（松井理直）
- 第5回 ああ専門基礎分野 言語学（松井理直）
- 第6回 専門基礎分野 言語学（松井理直）
- 第7回 専門基礎分野 学習認知心理学（田中千津子）
- 第8回 専門基礎分野 学習認知心理学（田中千津子）
- 第9回 専門基礎分野 音声学（平林容子）
- 第10回 専門基礎分野 音声学（平林容子）
- 第11回 専門基礎分野 音声学（平林容子）
- 第12回 専門基礎分野 社会福祉制度（山本永人）
- 第13回 専門基礎分野 障害者のサービス（山本永人）
- 第14回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉登志子）
- 第15回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉登志子）

■ 評価方法

試験100%（400点中240点をもって合格とする。問題は五者択一問題）

■ 教 科 書

言語聴覚士テキスト

■ 参 考 書

言語聴覚士のための基礎知識（医学書院）、標準言語聴覚障害学（医学書院）の各シリーズ各本
言語聴覚療法シリーズ（建帛社）各本（改訂版）

■ 留 意 事 項

授業科目	解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頭・頸部の解剖と呼吸器系の構造と機能を理解する。

■ 目 標

将来, 学習する音声, 言語, 摂食・嚥下, あるいは聴覚などの機能障害の成り立ちを理解するための礎にする。

■ 授 業 計 画

第1回 頭部・頸部の骨と筋

1. 頭蓋骨（鼻腔・口腔を構成する骨・副鼻腔、顎関節）
2. 表情筋と咀嚼筋
3. 脊柱と椎骨
胸郭（胸骨と肋骨、肋間筋と胸郭の動き）

第2回 口腔の解剖

1. 口蓋
 2. 口腔底
 3. 口腔前庭
 4. 固有口腔
 5. 舌と味蕾
 6. 唾液腺
 7. 扁桃
- 鼻腔の解剖（鼻中隔、鼻甲介、鼻道、嗅上皮と嗅神経） 咽頭（耳管咽頭口、咽頭収縮筋）

第3回 喉頭の解剖

1. 舌骨と喉頭の軟骨
2. 声帯靱帯と声帯ヒダ
3. 声門
4. 喉頭の筋
5. 喉頭の神経

第4回 呼吸器の解剖

1. 気管と気管支
2. 肺と胸膜
3. 気道粘膜の構造
4. 縦隔
5. 呼吸に関与する筋と支配神経

第5回 脳と脊髄

1. 神経細胞とグリア細胞
2. 脳の区分
3. 大脳皮質と大脳基底核
4. 大脳髓質の神経線維
5. 間脳（視床と視床下部）
6. 内包

第6回 脳と脊髄

1. 中脳（中脳蓋・中脳披蓋・大脳脚）
2. 橋
3. 延髄
4. 小脳（小脳皮質と小脳核）
4. 脊髄と脊髄神経

第7回 脳神経と平衡・聴覚器

1. 外耳・中耳・内耳の構造
2. 内耳神経
3. 聴覚と平衡覚の伝導路と反射路
4. 三叉神経、顔面神経、舌咽神経、迷走神経、副神経、舌下神経

第8回 総復習

■ 評 価 方 法

定期試験 60% 小テスト・レポート 40%

■ 教 科 書

渡辺正仁監修 「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のための解剖学（第4版）」 廣川書店

■ 参 考 書

相磯貞和 訳 「ネッター解剖学アトラス」 南江堂

■ 留 意 事 項

授業科目	生理学	担当者	宮井 潔		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

生理学は人体機能のしくみを知る基礎的な学問であるが、かなり範囲が広く深いので、各項目ごとにできるだけ基本的な考え方や重点事項を解説する

■ 目 標

各分野において、それぞれ基礎となる解剖学と、臨床医学特に内科学との関連づけを理解するように努める

■ 授 業 計 画

第1回 細胞と内部環境
 第2回 血液・生体防御
 第3回 循環系
 小テストと解説
 第4回 呼吸機能
 第5回 消化と吸収
 第6回 胃臓と排泄
 第7回 酸・塩基平衡
 第8回 内分泌・代謝

■ 評 価 方 法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 教 科 書

石澤光郎、富永淳著「標準理学療法学・作業療法学 専門分野 生理学」医学書院

■ 参 考 書

二宮石雄、安藤啓司、彼末一之、木川寛二 著「スタンダード生理学」文光堂

■ 留 意 事 項

講義では重点のみ（主としてキーワードの説明）述べるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	病理学	担当者	橋本 和明		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

疾患の原因は内因と外因に大別される。内因として遺伝+免疫などがあり、外因として種々の要因がある。その結果、人体は下記 1～8 の変化を示す。これらの各項目について講義を行う。

■ 目 標

病気の成り立ちや仕組みを追求する病理学を学ぶことによって、患者の持つ種々の障害の本質の理解を深め、障害とそれに対する治療・リハビリテーションの考察・理解がより深く行えるようになることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第 1 回 退行性病変
- 第 2 回 進行性病変
- 第 3 回 奇形を含む先天異常
- 第 4 回 炎症アレルギー
- 第 5 回 循環障害
- 第 6 回 腫瘍
- 第 7 回 腫瘍
- 第 8 回 外傷性変化等

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

標準理学療法学・作業療法学基礎分野 病理学 第3版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	内科学（老年医学含む）	担当者	宮井 潔		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

まず健常人の解剖・生理・生化学の基礎知識を簡単に復習してそれを把握した上で、内科学の総論・各論の全領域にわたる基本的な重要事項について臨床現場での経験も変えて講義する

■ 目 標

内科学は臨床医学の基礎であるが、その範囲は余りにも広く、内容も深いため短期間でそのすべてをマスターするのは大変むつかしい。そこで基本的な内科学の考え方、必要最小限の知識、専門用語などを理解するよう努める

■ 授 業 計 画

- 第1回 内科学総論－病因論（遺伝・感染・腫瘍・代謝異常等）
診断学・検査学
- 第2回 内科学総論－治療医学、予防医学
- 第3回 内科学各論－血液疾患
- 第4回 内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
- 第5回 内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
小テスト及び解説
- 第6回 内科学各論－感染症
- 第7回 内科学各論－内分泌疾患
- 第8回 内科学各論－代謝疾患
- 第9回 内科学各論－循環器疾患
- 第10回 内科学各論－呼吸器疾患
- 第11回 内科学各論－胃・泌尿器疾患
- 第12回 内科学各論－消化管疾患
- 第13回 内科学各論－肝・胆・膵疾患
- 第14回 内科学各論－中毒・環境要因による疾患
- 第15回 老年医学

■ 評価方法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 教 科 書

大成淨志著「標準理学療法・作業療法専門分野 内科学」医学書院

■ 参 考 書

高久史磨・尾形悦郎 監修「新臨床内科学」医学書院
大内尉義著「標準理学療法・作業療法専門分野 老年学」医学書院
宮井潔編「NEW 臨床検査診断学」南江堂

■ 留 意 事 項

講義では要点（基本的な考え方・各事項の用語解説などいわば”さわり”）だけを述べることになるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	小児科学	担当者	仲野 由季子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

育児学と小児病学

■ 目 標

小児の特徴、発達について学び、セラピストとしてどうかかわっていくのかについて学習する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児の発育と発達
- 第2回 小児の生活と栄養
- 第3回 小児の保健
- 第4回 出生前小児科学
- 第5回 新生児疾患
- 第6回 中枢神経疾患と神経筋疾患
- 第7回 発達障害児のリハビリテーション
- 第8回 軽度発達障害
- 第9回 小児の感染症
- 第10回 小児の呼吸器疾患とアレルギー疾患
- 第11回 小児の循環器・消化器・泌尿器疾患
- 第12回 小児の代謝内分泌・血液疾患
- 第13回 小児心身症と関連疾患
- 第14回 まとめ①
- 第15回 まとめ②

■ 評 価 方 法

試験 100%

■ 教 科 書

最新育児小児病学 改訂第6版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	精神医学	担当者	小畔 美弥子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

主な精神疾患について症状・診断・治療を学ぶ

■ 目 標

精神医学に興味を持ち、基本知識を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神医学とは・症候学
- 第2回 器質性精神障害
- 第3回 内因性精神障害①統合失調症
- 第4回 内因性精神障害②気分障害
- 第5回 心因性障害①
- 第6回 心因性障害②
- 第7回 摂食障害・睡眠障害など
- 第8回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験70%，受講態度（積極的発言など）30%

■ 教 科 書

プリント使用

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	リハビリテーション医学	担当者	阿部 和夫		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーション医学の講義では、リハビリテーション医学の目的である、「障害を持つ人々を身体的、精神的、社会的、経済的にできる限り自立させる」ことをどのように達成したら良いのかを考える機会を受講者に提供したいと思います。講義を参考にして、リハビリテーションに対する自分の考えを持つことができ、言語聴覚士を目指すための明確な動機付けができることを期待します。前半では概論、後半では各論を講義します。

■ 目 標

言語聴覚士としての臨床活動に最低限必要なリハビリテーション医学の知識を習得します。後半では、疾患の基礎的な概念についても概説します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーションとは（リハビリテーションの定義、目的）
- 第2回 疾病と障害について
- 第3回 リハビリテーションにおける障害の評価（障害の捉え方）
- 第4回 心理学（神経心理学、臨床心理学、など）とリハビリテーション
- 第5回 発達とリハビリテーション
- 第6回 リハビリテーションの段階
- 第7回 リハビリテーションの実際
- 第8回 各論のための概説（評価法、検査法）
- 第9回 脳血管障害
- 第10回 脳外傷における高次脳機能障害
- 第11回 脊髄損傷
- 第12回 糖尿病
- 第13回 筋疾患
- 第14回 末梢神経疾患
- 第15回 認知症、など

■ 評価方法

試験 100%。小テストやレポートも含みます。

■ 教 科 書

なし

■ 参 考 書

書名 医学生・コメディカルのための手引書（改定2版）
 著者名 上好昭孝、土肥信之
 出版社 永井書店

■ 留 意 事 項

私語など、他の受講者および講義をしている私の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。

授業科目	耳鼻咽喉科学	担当者	久保 伸夫・ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

耳鼻咽喉科疾患の病態と治療について講義を行う。

■ 目 標

耳鼻咽喉科疾患について、言語聴覚士に必要な知識を身につけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 耳鼻咽喉科全般の解剖学（久保）
- 第2回 聴覚・平衡感覚のメカニズム（久保）
- 第3回 鼻・咽頭の解剖（久保）
- 第4回 鼻・咽頭の生理と病態（久保）
- 第5回 咽喉頭疾患と呼吸・嚥下のメカニズム（久保）
- 第6回 味覚・嗅覚（久保）
- 第7回 再生医療と今後の耳鼻咽喉科臨床における言語聴覚士の役割（久保）
- 第8回 国家試験問題過去問題の解説（久保）
- 第9回 外耳疾患の病態と治療
- 第10回 中耳疾患の病態と治療
- 第11回 内耳疾患の病態と治療
- 第12回 聴力改善術
- 第13回 前庭・平衡系の構造と機能
- 第14回 めまい疾患
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 教 科 書

久保：日常診療にすぐ役立つ耳鼻咽喉科（金芳堂） 図説耳鼻咽喉科（金芳堂）

■ 参 考 書

「頭痛めまいしびれの臨床」植村研一 医学書院、「めまい」トーマスブランド 診断と治療社、「ピクルス聴覚生理学」JC ピクルス 二幣社、「聴覚心理学概論」BCJ ムーア 誠信書房、「聴覚・触覚・前庭感覚」内川恵二 朝倉書店

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床神経学	担当者	小倉 光博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

まず神経解剖・神経生理をもとに、神経症候学を解説する。さらに主要な脳神経疾患を系統的に講義する。

■ 目 標

神経症候学をもとに脳神経疾患を理解し、臨床的応用力を習得する。

■ 授 業 計 画

第1回 神経解剖・生理・症候学①
第2回 神経解剖・生理・症候学②
第3回 神経解剖・生理・症候学③
第4回 脳血管障害①
第5回 脳血管障害②
第6回 頭部外傷①
第7回 頭部外傷②
第8回 脳腫瘍①
第9回 脳腫瘍②
第10回 パーキンソン病
第11回 認知症
第12回 頭痛
第13回 神経感染症
第14回 神経変性疾患
第15回 神経血管症候群およびその他の神経疾患

■ 評 価 方 法

筆記試験で評価（100％）

■ 教 科 書

講義資料を中心に行う

■ 参 考 書

特に指定なし

■ 留 意 事 項

授業科目	形成外科学	担当者	大倉 正也		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

口唇口蓋裂をはじめ、顎顔面に関する疾患について講義を行う。

■ 目 標

日常臨床のための知識の蓄積と理解

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論（嚥下を含む）
- 第2回 口唇口蓋裂
- 第3回 口腔腫瘍
- 第4回 顎変形症
- 第5回 顎顔面の再建
- 第6回 唾液の機能と唾液腺
- 第7回 口腔の様々な疾患
- 第8回 試験対策

■ 評価方法

筆記試験（80%）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

--

■ 参 考 書

--

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	臨床歯科医学	担当者	小原 浩		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

歯科疾患と、口腔の構造について詳説する

■ 目 標

STに必要な口腔の構造、歯科疾患について理解する

■ 授 業 計 画

第1回 歯科概論、歯科とSTのかかわり 口腔の構造・機能と構音について
 第2回 歯と歯周組織の解剖学
 第3回 歯と歯周組織の発生学、組織学
 第4回 歯の疾患（齲蝕、先天異常など）
 第5回 硬組織欠損の治療について
 第6回 歯周病、予防歯科について
 第7回 口蓋裂治療とSTについて
 第8回 まとめ
 第9回 試験

■ 評価方法

筆記試験による評価とする（100％）

■ 教 科 書

言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	口腔外科学	担当者	中嶋 正博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

口腔の構造と機能及び疾患について講義を行う。

■ 目 標

言語聴覚士として必要な口腔の構造・機能と口腔に現れる疾患について理解する

■ 授 業 計 画

- 第1回 口腔の発生、口腔の構造と機能
- 第2回 顎顔面、口腔領域の奇形、変形
- 第3回 顎関節疾患、唾液線疾患、口腔領域の神経疾患
- 第4回 口腔粘膜疾患、口腔領域の嚢胞性疾患、炎症、外傷
- 第5回 口腔領域の腫瘍性疾患および腫瘍類似疾患
- 第6回 顎顔面・口腔領域の再建と機能回復
- 第7回 中枢性疾患による口腔機能障害、加齢による口腔機能障害

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教 科 書

道健一編 「言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学」 医歯薬出版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	呼吸発声系医学	担当者	本多 知行・楯谷 一郎		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

嚥下障害分野：リハビリテーション医師の立場から嚥下障害への取り組みについて講義する。
音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。

■ 目 標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として言語聴覚士が支援できる技術・考え方を習得する。
音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理（本多）
- 第2回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練（本多）
- 第3回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練（本多）
- 第4回 嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項（本多）
- 第5回 偽（仮）性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ（本多）
- 第6回 変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ（本多）
- 第7回 嚥下障害の重症度分類と最近の話題（本多）
- 第8回 喉頭の解剖（楯谷）
- 第9回 発声の生理機構（楯谷）
- 第10回 喉頭検査法（楯谷）
- 第11回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
- 第12回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
- 第13回 喉頭疾患の診断と治療：非器質的病変（楯谷）
- 第14回 音響分析・音声検査法（楯谷）
- 第15回 まとめ（楯谷）

■ 評価方法

試験100%です。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

本多：①金子芳洋・千野直一監修「摂食・嚥下リハビリテーション」第2版医歯薬出版 ②日本嚥下障害臨床研究会監修「嚥下障害の臨床（第2版）」医歯薬出版

■ 留 意 事 項

授業科目	聴覚系医学	担当者	金丸 眞一・ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 目 標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
- 第2回 聴覚系の機能①（外耳・中耳）
- 第3回 聴覚系の機能②（内耳）
- 第4回 聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
- 第5回 聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
- 第6回 聴覚検査と耳疾患
- 第7回 聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
- 第8回 聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
- 第9回 鼓室形成手術
- 第10回 聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
- 第11回 聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
- 第12回 内耳再生医学
- 第13回 聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
- 第14回 聴覚と音声・言語・音楽
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

試験100%

■ 教 科 書

喜多村健 編著「言語聴覚士のための聴覚障害学」医歯薬出版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	神経系医学	担当者	板倉 徹・西林 宏起		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

中枢神経系の機能解剖、神経放射線画像について講義を行う。

■ 目 標

中枢神経系の機能解剖を理解し、日常臨床で遭遇する症例の画像所見を読影できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 脳の解剖（西林）
- 第2回 大脳①（西林）
- 第3回 大脳②（西林）
- 第4回 大脳基底核（西林）
- 第5回 間脳（視床、視床下部）（西林）
- 第6回 脳幹（西林）
- 第7回 脊髄、末梢神経（西林）
- 第8回 脳血管系①（板倉）
- 第9回 脳血管系②（板倉）
- 第10回 脳脊髄液系（板倉）
- 第11回 画像診断 CT ①（板倉）
- 第12回 画像診断 CT ②（板倉）
- 第13回 画像診断 MRI（板倉）
- 第14回 画像診断 その他の画像診断（板倉）
- 第15回 まとめ（板倉）

■ 評価方法

筆記試験（80％）、小テスト（20％）出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

西林：絵でみる脳と神経：馬場元毅 医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	臨床心理学 1	担当者	藤井 章乃		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

心的援助の基礎としての発達・人格理論について学ぶ。

■ 目 標

臨床心理学の理論と実際を学ぶことにより、人間理解を深め、理想的な人間関係を模索する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床心理学概論 ～臨床心理学とは～
- 第2回 臨床心理学概論 ～心とは何か～
- 第3回 実習 カウンセリングマインドとは何か
- 第4回 臨床心理学基礎理論 (1) フロイトの精神分析理論 1
- 第5回 臨床心理学基礎理論 (1) フロイトの精神分析理論 2
- 第6回 臨床心理学基礎理論 (2) ユングの分析心理学理論 1
- 第7回 臨床心理学基礎理論 (2) ユングの分析心理学理論 2
- 第8回 臨床心理学基礎理論 (3) ロジャーズの自己理論 1
- 第9回 臨床心理学基礎理論 (3) ロジャーズの自己理論 2
- 第10回 臨床心理学基礎理論 (4) エリクソンの心理・社会的発達理論 1
- 第11回 臨床心理学基礎理論 (4) エリクソンの心理・社会的発達理論 2
- 第12回 臨床心理学基礎理論 (5) 対象関係論
- 第13回 精神障害について
- 第14回 発達について
- 第15回 臨床心理学演習

■ 評価方法

試験：80% 出席・受講態度：20%

■ 教 科 書

心とかかわる臨床心理

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床心理学2	担当者	藤井 章乃		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

援助対象を理解するための心理アセスメントと心理援助の方法を学ぶ。

■ 目 標

臨床心理学の援助の方法を理論と実習によって学ぶことにより、実践において役立てることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理アセスメント1 ～心理アセスメントとは～
- 第2回 心理アセスメント2 ～心理テスト・質問紙法～
- 第3回 心理アセスメント3 ～心理テスト・投影法～
- 第4回 心理アセスメント4 ～心理テスト・実習～
- 第5回 心理療法(1) クライアント中心療法①
- 第6回 心理療法(1) クライアント中心療法②
- 第7回 心理療法(2) 精神分析療法
- 第8回 心理療法(3) 分析的心理療法
- 第9回 心理療法(4) 遊戯療法
- 第10回 心理療法(5) 芸術療法①
- 第11回 心理療法(5) 芸術療法②
- 第12回 心理療法(6) 行動療法
- 第13回 心理療法(7) その他
- 第14回 心理療法(8) その他
- 第15回 心理療法(9) その他

■ 評 価 方 法

試験：80% 出席・受講態度：20%

■ 教 科 書

心とかかわる臨床心理

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	生涯発達心理学 1	担当者	井崎 基博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

胎内から始まる発達について、乳幼児期を中心に学童期まで解説します。生物的な研究や動物としての人間の発達、最新の研究まで発達心理学の基本的な知見について学ぶことを目的とします。

■ 目 標

子どもたちの世界を理解し、子どもたちの心を把握する豊かな目を養うことを目標にします。言語聴覚士としてどのように子どもに向き合うか、考える機会としてください。

■ 授 業 計 画

- 第1回 発達の理論
- 第2回 知覚の発達
- 第3回 運動能力と身体の発達
- 第4回 情緒・感情の発達
- 第5回 認知の発達・1
- 第6回 認知の発達・2
- 第7回 親子関係と発達
- 第8回 遊びと発達
- 第9回 知能の発達
- 第10回 言語の発達・1
- 第11回 言語の発達・2
- 第12回 人格の発達
- 第13回 発達の障害・1
- 第14回 発達の障害・2
- 第15回 発達支援

■ 評 価 方 法

試験（100％）

■ 教 科 書

川島一夫、渡辺弥生 編著「図で理解する発達 新しい発達心理学への招待」（福村出版）

■ 参 考 書

講義時に適宜紹介します。

■ 留 意 事 項

授業科目	生涯発達心理学2	担当者	森田 喜治・阪本 裕子 小野 栄・増山 路子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

森田：人間関係学の観点から心の発達、人間関係の発達の理解と、児童期、少年期、青年期、成人期、中年期までの発達とその課題、及び病理について講義を行う。

阪本・小野・増山：老年期のエイジングとパーソナリティー、認知症の問題、死への対応について解説する。

■ 目 標

各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 人間関係学派から見た乳幼児の発達心理学について（森田）
- 第2回 児童期の発達課題と病理（森田）
- 第3回 虐待について（森田）
- 第4回 少年期の発達課題と病理（森田）
- 第5回 思春期の発達課題と病理（森田）
- 第6回 青年期の発達課題と病理（森田）
- 第7回 成人期、中年期の発達課題と病理（森田）
- 第8回 病理の治療と先の発達課題との関連（森田）
- 第9回 失語症患者とその家族の心理（小野）
- 第10回 老年期のエイジングとパーソナリティー（小野）
- 第11回 高齢者の問題と接し方について（小野）
- 第12回 老年期の知的機能－認知症について（阪本）
- 第13回 老年期の知的機能－認知症のケアについて（阪本）
- 第14回 死への対応1（増山）
- 第15回 死への対応2（増山）

■ 評価方法

レポート100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

講義の際に適宜紹介する

■ 留 意 事 項

受講生の積極的な発言、質疑を重視したいと思いますので、積極性に心がけてください

授業科目	学習・認知心理学 1	担当者	平田 佐智子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。前期は感覚・知覚・学習・記憶についてお話しします。

■ 目 標

人間がどのように外の世界をとらえているのか（感覚・知覚）、またどのように新しい行動や知識を獲得していくのか（学習・記憶）を理解することを目標とします。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理学とは何か？
- 第2回 感覚の分化と統合Ⅰ（感覚・知覚）
- 第3回 感覚の分化と統合Ⅱ（感覚・知覚）
- 第4回 視知覚Ⅰ（感覚・知覚）
- 第5回 視知覚Ⅱ（感覚・知覚）
- 第6回 古典的条件づけ（学習）
- 第7回 オペラント条件づけ（学習）
- 第8回 強化スケジュール（学習）
- 第9回 技能学習（学習）
- 第10回 社会的学習（学習）
- 第11回 記憶の過程（記憶）
- 第12回 短期記憶（記憶）
- 第13回 長期記憶（記憶）
- 第14回 記憶の神経過程（記憶）
- 第15回 前期のまとめ

■ 評 価 方 法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。（試験100％）

■ 教 科 書

テキストは使用しない。配布資料により授業を進める。

■ 参 考 書

鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃編者／「心理学（第3版）」／東京大学出版会

■ 留 意 事 項

授業科目	学習・認知心理学2	担当者	平田 佐智子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。後期は、より高次の認知過程を必要とする思考・言語についてお話しします。

■ 目 標

学習・認知心理学において扱われる人間の問題解決の仕方や知識の構造（思考）、また言語を獲得するにあたり必要な認知発達（言語）に関して理解することを目指します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 前期のおさらい
- 第2回 問題解決（思考）
- 第3回 問題解決と認知発達（思考）
- 第4回 知識（思考）
- 第5回 推論と発見（思考）
- 第6回 言語獲得（言語）
- 第7回 非言語コミュニケーション（言語）
- 第8回 前期・後期のまとめ

■ 評 価 方 法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。（試験100％）

■ 教 科 書

テキストは使用しない。配布資料により授業を進める。

■ 参 考 書

鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃編者／「心理学（第3版）」／東京大学出版会

■ 留 意 事 項

授業科目	心理測定法	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴力テスト・心理テストの基盤となる心理測定法の各種概念について理解を深めるための授業です。国試に出題される問題についても練習を行います。

■ 目 標

テストの信頼性・妥当性の考え方をマスターし、単に各種テスト法を実践できるのみならず、その意味を理解できるようになることが目標です。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理テストの特徴とテストの信頼性・再現性。
- 第2回 精神物理学測定法（1）― 調整法
- 第3回 精神物理学測定法（2）― 極限法と恒常法
- 第4回 尺度構成について。
- 第5回 一対比較法と感覚尺度。
- 第6回 統計処理の基本。
- 第7回 仮説検定の基礎。
- 第8回 各種統計処理の特徴。
- 第9回 実験計画法と分散分析（1）
- 第10回 実験計画法と分散分析（2）
- 第11回 臨床心理学で用いられるテスト法
- 第12回 発達心理学で用いられる各種テストの特徴（1）
- 第13回 発達心理学で用いられる各種テストの特徴（2）
- 第14回 認知能力とことばの心理。
- 第15回 心理測定法の総復習。

■ 評 価 方 法

授業中の課題（発表・議論等を含む）：30% 最終テスト：70%

■ 教 科 書

教材心理学（ナカニシヤ出版）

■ 参 考 書

適宜、授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	言語学 1	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事に必要な「ことば」に関する理解を深めるための授業です。

■ 目 標

「ことば」の特に音声・音韻に関わる現象を科学的・医学的に理解するための基本概念を習得すると共に、自分自身の「ことば」に対する鋭敏な感覚を養成することが目標です。

■ 授 業 計 画

- 第1回 言語学入門 ―「ことば」とはどのようなものか。
- 第2回 記号というシステムの特徴。
- 第3回 音声学入門 ― 調音器官について
- 第4回 子音の分類
- 第5回 母音の分類
- 第6回 日本語音声の特徴
- 第7回 モーラと音節
- 第8回 音韻論 (1) ― 音素について
- 第9回 音韻論 (2) ― 韻律構造について
- 第10回 言語理論の考え方
- 第11回 音声と文字
- 第12回 日本語の語彙層の特性 ― 和語とオノマトペ
- 第13回 日本語の語彙層の特性 ― 漢語と借用語
- 第14回 形態素について
- 第15回 日本語の動詞形態素

■ 評 価 方 法

授業中の小テスト：30% 最終テスト：70%

授業中の小テストは基本的に毎回行います。きちんと復習をしてきてください。

■ 教 科 書

プリントを配布します。

■ 参 考 書

「ことばの科学ハンドブック」(研究社)ほか、適宜、授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	言語学 2	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事に必要な「ことば」に関する理解を深めるための授業です。

■ 目 標

「ことば」の特に意味や構造に関わる現象を科学的・医学的に理解するための基本概念を習得すると共に、自分自身の「ことば」に対する鋭敏な感覚を養成することが目標です。

■ 授 業 計 画

- 第1回 テンスとアスペクト
- 第2回 ムードとモダリティ
- 第3回 「は」と「が」― 主題を巡って
- 第4回 新情報と旧情報
- 第5回 終助詞の機能
- 第6回 日本語の格を巡る議論
- 第7回 機能形態素の概観
- 第8回 生成文法理論の考え方
- 第9回 言語能力の特性
- 第10回 ことばの意味
- 第11回 論理学と意味論
- 第12回 意味論と語用論
- 第13回 会話の公準と関連性理論
- 第14回 社会とことばの関わり
- 第15回 言語学の総復習

■ 評 価 方 法

授業中の小テスト：30% 最終テスト：70%

授業中の小テストは基本的に毎回行います。きちんと復習をしてきてください。

■ 教 科 書

プリントを配布します。

■ 参 考 書

「ことばの科学ハンドブック」（研究社）ほか、適宜、授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音声学 1	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事に必要な音声の細かい性質、構音の特性などについて深く学ぶと共に、その知識を臨床場面で応用できるようにするための授業です。

■ 目 標

音声学Ⅰの授業では、分節音の発音方法について特に深く理解することが目標です。IPA 記号の書き方や、その聴取訓練も行います。

■ 授 業 計 画

- 第1回 STにとって音声学で学ばなければならないこと。
- 第2回 調音器官の説明。
- 第3回 IPAの子音チャートについて。
- 第4回 有声音と無声音。
- 第5回 調音方法(1) — 破裂音と摩擦音
- 第6回 調音方法(2) — はじき音と接近音
- 第7回 調音位置の詳細について。
- 第8回 母音の発音。
- 第9回 日本語の発音 — 五十音を巡って。
- 第10回 いわゆる四つ仮名について。
- 第11回 ハ行発音について。
- 第12回 特殊拍(1) — 撥音について。
- 第13回 特殊拍(2) — 促音と長音。
- 第14回 IPAの補助記号と構音障害の表記法。
- 第15回 音声学の復習。

■ 評 価 方 法

授業中の小テスト：30% 最終テスト：70%

授業中の小テストは基本的に毎回行います。きちんと復習をしてきてください。

■ 教 科 書

日本語音声学入門(三省堂)

■ 参 考 書

「ことばの科学ハンドブック」(研究社)ほか、適宜、授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音声学 2	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事に必要な音声の細かい性質、構音の特性などについて深く学ぶと共に、その知識を臨床場面で応用できるようにするための授業です。

■ 目 標

分節音の発音方法と共に、超分節音の特性、音韻論と音声学の関係、文法や意味と音声の関係など、音声に関わる様々な性質を深く理解することが目標です。

■ 授 業 計 画

- 第1回 アクセントとは何か。
- 第2回 東京方言のアクセントシステム。
- 第3回 アクセント核と音韻論の基礎。
- 第4回 関西方言と鹿児島方言のシステム。
- 第5回 東京方言のイントネーションについて。
- 第6回 ダウンステップとデクリネーション。
- 第7回 音素と異音。
- 第8回 調音結合と二重調音の違い。
- 第9回 韻律構造について。
- 第10回 モーラと音節を巡る韻律理論。
- 第11回 日本語のリズムと語形成。
- 第12回 日本語の語彙層と音声体系。
- 第13回 オノマトペの特異性。
- 第14回 日本語音声の総復習。
- 第15回 音声学の総復習。

■ 評 価 方 法

授業中の小テスト：30% 最終テスト：70%

授業中の小テストは基本的に毎回行います。きちんと復習をしてきてください。

■ 教 科 書

日本語音声学入門（三省堂）

■ 参 考 書

「ことばの科学ハンドブック」（研究社）ほか、適宜、授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音響学 1	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士として理解しておくべき音声の音響的性質、聴覚の特性について理解を深める。

■ 目 標

目に見えない「音」について、特に音の高さ、音の大きさに関係する性質を理解することが目標です。いくつかの計算問題もこなさなければなりません、基本をマスターすると誰でも解けますので、怖がらずに頑張ってください！

■ 授 業 計 画

- 第1回 音とは何か ― 疎密波と音の伝播。
- 第2回 音の伝播の仕組みと音速。
- 第3回 周波数の概念。
- 第4回 周波数と周期の関係。
- 第5回 周波数と波長の関係。
- 第6回 指数と対数の計算について。
- 第7回 周波数レベルとメル尺度。
- 第8回 音の強さと音圧。
- 第9回 強さと音圧の関係について。
- 第10回 パワーレベルの計算方法。
- 第11回 様々なタイプのデジベル値。
- 第12回 デジベルに関する理解を深める。
- 第13回 等ラウドネス曲線について。
- 第14回 フォンとソン。
- 第15回 前期の総復習。

■ 評 価 方 法

授業中の小テスト：30% 最終テスト：70%

授業中の小テストは基本的に毎回行います。きちんと復習をしてきてください。

■ 教 科 書

プリントを配布します。

■ 参 考 書

適宜、授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音響学 2	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士として理解しておくべき音声の音響的性質、聴覚の特性について理解を深める。

■ 目 標

音響学Ⅱの授業では、言語聴覚士にとって最も重要な知識の一つである「音声の音響的性質」について、その原理を深く理解することが目標です。

■ 授 業 計 画

- 第1回 複合音の特性。
- 第2回 倍音と基本周波数。
- 第3回 失われた基音と場所説・時間説。
- 第4回 スペクトルについて。
- 第5回 短時間スペクトルの特性。
- 第6回 声帯のスペクトルの特徴。
- 第7回 共鳴とは何か。
- 第8回 共鳴管（1）— 閉管の特徴。
- 第9回 共鳴管（2）— 開管の特徴。
- 第10回 フォルマントと調音位置。
- 第11回 子音の調音方法と音響特性。
- 第12回 サウンドスペクトログラムの読み方。
- 第13回 音声の音響的特徴のまとめ。
- 第14回 デジタル信号処理。
- 第15回 音響学の総復習。

■ 評 価 方 法

授業中の小テスト：30% 最終テスト：70%

授業中の小テストは基本的に毎回行います。きちんと復習をしてきてください。

■ 教 科 書

プリントを配布します。

■ 参 考 書

適宜、授業中に紹介します。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	言語発達学	担当者	齋藤 典昭		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子どもたちの発達の中でも言語の領域の発達について学びます。
対象の範囲は0歳から学齢までです。

■ 目 標

1. 言語発達障害を理解するために、定型発達についての基礎知識を獲得すること。
2. その知識を用いて子どもたちの様子を観察し、子どもたちのことばの発達について概要を評価できるようになること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 言語獲得理論について
- 第2回 前言語期の言語発達 その1 コミュニケーションの発達
- 第3回 前言語期の言語発達 その2 コミュニケーションの発達
- 第4回 前言語期の言語発達 その3 聞き分けることの発達
- 第5回 前言語期の言語発達 その4 聞き分けることの発達
- 第6回 前言語期の言語発達 その5 言語音を産生することの発達
- 第7回 前言語期の言語発達 その6 感覚運動的知能の発達
- 第8回 前言語期の発達について 復習
- 第9回 語彙獲得の発達
- 第10回 語意味獲得の発達 その1 制約という仮説
- 第11回 語意味獲得の発達 その2 社会相互作用アプローチという仮説
- 第12回 文法獲得の発達 統語と形態の発達
- 第13回 語用論的側面からみた言語発達 その1 会話の発達
- 第14回 語用論的側面からみた言語発達 その2 語りの発達
- 第15回 読み書きの発達

■ 評 価 方 法

試験で評価します（100％）

■ 教 科 書

「新・子どもたちの言語獲得」 大修館書店 「言語発達障害学」 医学書院
「言語聴覚士テキスト」 医歯薬出版

■ 参 考 書

「子どもとことば」「ことばと発達」岡本夏木，岩波新書 「0歳児がことばを獲得するとき」「子どもはことばを身体で覚える」正高信男，中公新書 「ことばはどこで育つか」藤永保，大修館書店 など多数

■ 留 意 事 項

定型の言語発達という，覚えなければいけないことが多い科目です。受け身になると苦しくなります。

授業科目	リハビリテーション概論	担当者	澤井 里香子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーション医療の流れ、全体の概要

■ 目 標

臨床現場において必要な基本的考え方、視点を知る

■ 授 業 計 画

第1回 ①リハビリ医学の概念 ②障害学
第2回 ①廃用症候群・過用／誤用症候 ②中枢性神経マヒの回復
第3回 ①脳卒中のリハビリ ②チーム医療 ③リハビリ看護
第4回 ①プログラミング ②心理的問題 ③意識障害・ターミナルケア
第5回 ①神経変性疾患（PD, ALS, SCD）のリハ
第6回 ①ケア・マネジメント ②施設・住宅での嚥下リハ
第7回 授業全体の総合的復習
第8回 授業全体の総合的復習

■ 評 価 方 法

試験80% レポート20%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

リハビリテーション医療心理学キーワード、認知症のとらえ方・対応の仕方・事例で学ぶ痴呆老人の問題行動へのアプローチ

■ 留 意 事 項

授業科目	社会保障制度	担当者	山本 永人		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

わが国の社会保障制度および社会福祉制度の概略をプリントと教科書を使用しながら解説を行います。

■ 目 標

言語聴覚士に最低限必要な社会保障・社会福祉の制度の内容
成り立ち、その理念を学習し、セラピストとしての基礎的な素養を身につけます。

■ 授 業 計 画

- 第1回 社会福祉の定義とその価値観について
- 第2回 社会福祉の基本的な理念として—ノーマライゼーション
- 第3回 社会福祉の基本的な理念として—リハビリテーション
- 第4回 わが国における社会福祉の歴史と概観
- 第5回 社会保障制度の基本的な枠組み
- 第6回 社会保険制度（1）
医療保険
- 第7回 社会保険制度（2）
年金保険
- 第8回 社会保険制度（3）
雇用保険・労働者災害補償保険
- 第9回 社会保険制度（4）
高齢者福祉と介護保険制度
- 第10回 公的扶助制度
- 第11回 障害者自立支援法（1）
- 第12回 障害者自立支援法（2）
- 第13回 児童福祉と社会手当
- 第14回 基本的な社会福祉の援助技術
- 第15回 わが国の社会保障や社会福祉に関わるこれからの課題

■ 評 価 方 法

テスト（70％）を中心に、授業態度（15％）や提出物等の状況（15％）を総合的に判断して評価する。

■ 教 科 書

よくわかる社会福祉（第8版）山縣文治・岡田忠克編 ミネルヴァ書房

■ 参 考 書

はじめての社会保障－福祉を学ぶ人へ－、福祉小六法 2010

■ 留 意 事 項

できるだけ、楽しく明るく授業を行います。積極的な参加をお願いします。とくに欠席しないようにしてください。

授業科目	医療福祉教育・関係法規	担当者	山本 永人・柴田 浩志 柏木 敏宏		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事にまつわる関係法規について解説します。

■ 目 標

- ・言語聴覚士として必要最低限の法律的知識とともにその運用による福祉サービスの実際を学び、その理念の柱となる ICF やインクルージョンの考え方を習得します。
- ・言語聴覚士法が制定されるまでの経緯を知り、言語聴覚士の職責とその重さを知る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 聴覚言語士の仕事に関連する法律（山本）
- 第2回 障害者施策に関連した関係法規（山本）
- 第3回 ICF とインクルージョンの理念（山本）
- 第4回 成年後見制度と権利擁護
知的障害者の虐待から考える（山本）
- 第5回 聴覚障害者福祉の現状と課題（柴田）
- 第6回 聴覚障害者福祉の実践（柴田）
- 第7回 言語聴覚士法制定までの経緯（柏木）
- 第8回 言語聴覚士になるにあたって（柏木）

■ 評 価 方 法

出席点100%

■ 教 科 書

適宜、プリントを配布します。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

できるだけ、楽しく明るく授業を行います。積極的な参加をお願いします。とくに欠席しないようにしてください。

授業科目	言語聴覚障害学概論 1	担当者	S T 教員		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・神経系、発声発語器官、頭頸部解剖学への導入
- ・言語聴覚療法の各領域の臨床について、現任者が講義する。
- ・言語聴覚障害者との対話会

■ 目 標

- ・神経系や発声発語器官、頭頸部の概要を理解する。
- ・さまざまな臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知り、各現場でのリハビリテーションについて理解する。
- ・言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 神経系の解剖学（吉機）
- 第2回 発声発語器官の解剖学（吉機）
- 第3回 頭頸部の解剖学（前田）
- 第4回 急性期病院における言語聴覚療法
- 第5回 回復期病棟における言語聴覚療法
- 第6回 介護老人保健施設での言語聴覚療法
- 第7回 小児施設での言語聴覚療法
- 第8回 ST を目指すために必要なこと（グループ討議）
- 第9回 ST を目指すために必要なこと（グループ討議の発表）
- 第10回 第1回言語聴覚障害の方との対話会
- 第11回 第1回言語聴覚障害の方との対話会
- 第12回 第1回言語聴覚障害の方との対話会
- 第13回 第2回言語聴覚障害の方との対話会
- 第14回 第2回言語聴覚障害の方との対話会
- 第15回 第2回言語聴覚障害の方との対話会

■ 評価方法

出席点100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	言語聴覚障害学概論2	担当者	福山 智子・PT・ST教員		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

実習ガイダンス（実習に必要な知識や技術に関する講義と演習）

■ 目 標

臨床実習に先立ち、言語聴覚士として必要な各領域の基礎的知識と技術を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床実習の意義と心構え
- 第2回 感染症対策と注意点
- 第3回 車椅子操作とトランスファーの仕方
- 第4回 バイタルサインの聴取方法
- 第5回 実習日誌の書き方
- 第6回 評価とは 方法と目的
- 第7回 カルテの見方と活用方法
- 第8回 カルテの見方と活用方法
- 第9回 嚥下障害の評価
- 第10回 実習レポート
調べ方と書き方
- 第11回 症例報告書の書き方
- 第12回 評価の仕方（小児領域）
- 第13回 臨床講義（小児領域）
- 第14回 評価の仕方（成人領域）
- 第15回 臨床講義（小児領域）

■ 評 価 方 法

出席点 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅰ、臨床実習Ⅱにむけて講義を行う。必ず出席すること。

授業科目	言語聴覚障害診断学 1	担当者	齋藤 典昭・井崎 基博 岡 美代子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

人工内耳装用の子どもさんに協力してもらい、一緒に遊び、その後で子どもさんの課題と関わる学生の課題について検討します。

■ 目 標

1. 子どもの多様性について識る.
2. 子どもとの関わり方を学ぶ.
3. 遊びを通じて評価する能力を獲得する.

■ 授 業 計 画

第1回 設定第1回 (6月, 7月)
第2回 設定第1回
第3回 設定第1回
第4回 設定第2回
第5回 設定第2回
第6回 設定第2回
第7回 設定第3回
第8回 設定第3回
第9回 設定第3回
第10回 設定第4回 (Ⅲ期実習終了後, 11月)
第11回 設定第4回
第12回 設定第4回
第13回 設定第5回
第14回 設定第5回
第15回 設定第5回

■ 評 価 方 法

毎回のレポートを評価します (100%)

■ 教 科 書

「インリアルアプローチ」竹田・里見 日本文化科学社 「ことばをはぐくむ」中川信子 ぶどう社

■ 参 考 書

「マママとまママ」 アカデミヤ出版会

■ 留 意 事 項

5班作り, 各回の設定を担当していただきます.

授業科目	言語聴覚障害診断学2	担当者	前田留美子・大塚佳代子・名徳 倫明 塩田恵理都・金子みどり・ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を、演習を交えて学ぶ

■ 目 標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる

■ 授 業 計 画

- 第1回 カニューレの種類と取り扱いについて（前田留美子）
- 第2回 摂食・嚥下障害と呼吸リハビリテーション（大塚佳代子）
- 第3回 呼吸リハビリテーションの実際（大塚佳代子）
- 第4回 薬剤の基礎知識①（名徳 倫明）
- 第5回 薬剤の基礎知識②（名徳 倫明）
- 第6回 摂食・嚥下障害に関係する薬剤①（名徳 倫明）
- 第7回 摂食・嚥下障害に関係する薬剤②（名徳 倫明）
- 第8回 NST について（塩田恵理都）
- 第9回 院内での NST の取り組みについて（塩田恵理都）
- 第10回 嚥下食の紹介（塩田恵理都）
- 第11回 認知症を伴う方の食事介助①（金子みどり）
- 第12回 認知症を伴う方の食事介助②（金子みどり）
- 第13回 口腔ケアの実技演習（金子みどり）
- 第14回 摂食・嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースがST に期待すること①
- 第15回 摂食・嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースがST に期待すること②

■ 評価方法

出席50%，受講態度50%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	失語症Ⅰ－１	担当者	大西 環		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症とはどのような言語障害であるか、基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 目 標

失語症の言語症状やタイプ分類等、失語症の基礎を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 失語症とは 定義とその障害の特徴
臨床の流れ
- 第2回 失語症の言語症状
流暢性発話と非流暢性発話
- 第3回 失語症の言語症状
認知神経心理学的モデルについて
- 第4回 失語症の言語症状
発話症状（各症状と用語の解説）
- 第5回 失語症の言語症状
発話症状（各症状と用語の解説）
- 第6回 失語症の言語症状
聴覚的理解障害（各症状と用語の解説）
- 第7回 失語症の言語症状
読み書きの障害（各症状と用語の解説）
- 第8回 失語症のタイプ分類
古典分類の各タイプについて解説
- 第9回 失語症のタイプ分類
古典分類の各タイプについて解説
- 第10回 失語症のタイプ分類
皮質下性失語、交叉性失語、小児失語 ほか
- 第11回 純粹失読と失読失書
- 第12回 症状の観察の仕方
- 第13回 症状の観察の仕方
- 第14回 復習
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

脳卒中後のコミュニケーション障害

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	失語症Ⅰ－Ⅱ	担当者	吉機 俊雄		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症評価の流れを解説する。失語症の各検査技法を解説し、その演習を行う。
各検査の使用目的を解説し、結果の解釈について演習を行う。SLTA 実語試験。

■ 目 標

スクリーニングを実施できる。SLTA を実施でき、その結果を分析できる。各失語症検査の内容を理解し、対象者に対して適切に選択できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 失語症分類の必要性 古典分類とシュール分類他との対比
- 第2回 流暢性とは何かを考え、伝導失語と発語失行の特徴の類似点と相違について検討
- 第3回 評価とは何か 情報収集の方法 初回面接の方法・注意点
- 第4回 スクリーニングの意義と方法 意識障害の診かた 問診の方法
問診場面の VTR を見て記述し、そこから何が分かり、どの情報が不足しているかを考える
- 第5回 スクリーニングの演習 デモンストレーション後に患者シナリオに沿って学生同士で練習
スクリーニングの記録の仕方 スクリーニング報告書の書き方
- 第6回 失語症に関する検査の説明
コントロールテストとディープテスト 標準化されたテストとされていないテスト
- 第7回 ディープ検査の必要性和作成方法
- 第8回 標準失語症検査 (SLTA) 説明と演習
- 第9回 標準失語症検査 (SLTA) 説明と演習
- 第10回 標準失語症検査 (SLTA) 説明と演習
- 第11回 標準失語症検査 (SLTA) 説明と演習
- 第12回 標準失語症検査補助検査 (SLTA-ST) 説明と演習
- 第13回 実用コミュニケーション能力検査 (CADL 検査) 説明と演習
- 第14回 WAB 失語症検査 (日本語版)・重度失語症検査・トークン検査・構文検査試案Ⅱ A・失語症語彙検査 それぞれの説明
- 第15回 評価のまとめ

■ 評 価 方 法

記述試験50% 標準失語症検査 (SLTA) 実技試験50%

■ 教 科 書

標準失語症検査マニュアル 改訂第2版 新興医学出版社
言語聴覚士のための失語症訓練ガイダンス 日本言語療法士協会編集 医学書院

■ 参 考 書

各検査のマニュアル

■ 留 意 事 項

検査手順・結果解釈をしっかりと身につけて下さい。

授業科目	失語症Ⅰ－Ⅲ	担当者	林 正弘		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語をよくするためのリハビリテーションをどのように行うか、実際にアプローチをするための観察と評価から、訓練プランの立案までを学習します。

■ 目 標

単なる知識ではなく、臨床の中で収集した情報を整理、分析し、結果の意味及びそれらが示す対象者の障害へのアプローチについて考察できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床の中での失語症
- 第2回 失語症臨床の目標
- 第3回 失語症評価の目的と着眼点
- 第4回 失語症訓練の歴史とエビデンス
- 第5回 訓練法1 伝統的刺激法
- 第6回 訓練プランの構築方法
- 第7回 ビデオ症例1
- 第8回 訓練法2 刺激促進法（遮断除去法）
- 第9回 ビデオ症例2
- 第10回 訓練法3 機能再編成法
- 第11回 ビデオ症例3
- 第12回 失語にまつわる諸問題1 継次処理障害、保続、視覚性エラー等
- 第13回 失語にまつわる諸問題2 発話障害（発語失行）
- 第14回 訓練法4 実用的代償法
- 第15回 訓練計画と訓練手続き

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

教科書は使用しない。配布資料のほか、講義に必要な映像や資料をDVDにしたものを使用します。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	失語症Ⅱ	担当者	吉機 俊雄・大西 環		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

①失語症者の機能障害・能力障害・心理・社会参加、QOL について考え、支援のポイントを学ぶ。②臨床講義で失語症者のスクリーニング・評価・訓練計画立案・訓練までを行い、グループで検討する。適宜次の内容を指導する（失語症回復の理論と介入の実際 回復時期に合わせた援助 ゴール設定とプログラム立案 訓練の実施 評価報告書の作成）。

■ 目 標

失語症者のスクリーニング・評価・訓練計画立案・訓練までの一連の流れに沿ったアプローチが指導を受けながら実施できる。

■ 授 業 計 画

第1回	臨床講義1回目	セッションの準備
第2回	臨床講義1回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第3回	臨床講義1回目	グループでのレポート作成
第4回	臨床講義2回目	セッションの準備
第5回	臨床講義2回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第6回	臨床講義2回目	グループでのレポート作成
第7回	臨床講義3回目	セッションの準備
第8回	臨床講義3回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第9回	臨床講義3回目	グループでのレポート作成
第10回	臨床講義4回目	セッションの準備
第11回	臨床講義4回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第12回	臨床講義4回目	グループでのレポート作成
第13回	臨床講義5回目	セッションの準備
第14回	臨床講義5回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第15回	臨床講義5回目	グループでのレポート作成

■ 評 価 方 法

出席50% レポート50%

■ 教 科 書

失語症者の実用コミュニケーション臨床ガイド 竹内愛子編集 協同医書出版社

■ 参 考 書

失語症臨床ガイド 症状別－理論と42症例による訓練・治療の実際 竹内愛子編集 協同医書出版
言語聴覚士のための失語症訓練ガイダンス 日本言語療法士協会編集 医学書院

■ 留 意 事 項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

授業科目	高次脳機能障害 1	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、中枢神経系の解剖機能を理解し、高次脳機能障害の各障害の症状についての基本的知識を習得し、評価結果の分析と障害機序に基づいた考え方を学ぶ。

■ 目 標

高次脳機能障害の各障害について基礎的知識を習得し、評価・鑑別により、障害機序に基づいて症状を捉えることができるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 高次脳機能障害の概要
大脳がどのように情報を処理しているのかを学び、損傷によって生じる障害の概要を理解する。
- 第2回 脳と高次脳機能
高次脳機能に関わる大脳の各領域の名称および脳の構造を理解する。
- 第3回 注意障害 注意障害の特性について学び、高次脳機能全体への影響を理解する。
- 第4回 記憶障害 (1) 記憶の種類、記憶のメカニズムを理解する。
- 第5回 記憶障害 (2) 記憶障害の種類を学び、各記憶障害の症状を理解する。
- 第6回 失行 失行の種類と症状、および失行の生じるメカニズムをよく理解する。
- 第7回 失認 失認の種類と症状、および失認の生じるメカニズムを理解する。
- 第8回 半側空間無視 (1) 半側空間無視の症状について理解する。
- 第9回 半側空間無視 (2) 半側空間無視の生じるメカニズムと、障害発現の仮説を理解する。
- 第10回 認知症
認知症の評価を学び、正しく施行し、結果をもとに評価できるようになる。
- 第11回 遂行機能障害
遂行機能障害が生じる障害メカニズムおよびその症状を理解する。
- 第12回 高次脳機能障害のまとめと評価演習 (1)
記憶機能全般の評価方法を学び、正しく実施し、結果をもとに評価できるようになる。
- 第13回 高次脳機能障害のまとめと評価演習 (2)
記憶機能全般の評価方法を学び、正しく実施し、結果をもとに評価できるようになる。
- 第14回 高次脳機能障害のまとめと評価演習 (3)
記憶機能全般の評価方法を学び、正しく実施し、結果をもとに評価できるようになる。
- 第15回 脳外傷による高次脳機能障害
脳外傷による高次脳機能障害の特徴を学び、社会的復帰後の問題についても考察を深める。

■ 評 価 方 法

定期試験70%、小テスト20%、出席点10%とする。

■ 教 科 書

石合純夫著 「高次脳機能障害学」 医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	高次脳機能障害 2	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前期で学んだ高次脳機能障害の知識を基に、さらに各障害と辺縁症状についての知識を深め、適切な評価方法と画像診断方法について学ぶ。また主な介入法について学ぶ。

■ 目 標

高次脳機能障害の各障害について、症状、評価・鑑別方法などを習得し、典型例においては画像から症状を推察できるようになる。また障害機序を基に介入方法を考察できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 視空間障害
地誌的見当識障害・バリント症候群について、症状と簡易な評価方法を学ぶ。
- 第2回 聴覚認知の障害
皮質聾・純粹語聾・環境音失認・失音楽について、症状と簡易な評価方法を学ぶ。
- 第3回 触覚認知の障害
触覚失認、その他の触覚が関わる障害について、症状と簡易な評価方法を学ぶ。
- 第4回 身体意識・病態認知の障害
ゲルストマン症候群・病態失認について、症状と簡易な評価方法を学ぶ。
- 第5回 行為の障害
習熟運動の解放現象・運動維持障害・運動無視・運動保続についての症状を学ぶ。
- 第6回 脳梁離断症状
左半球優位症状、右半球優位症状、半球間連合症状、脳梁内機能局在についての症状を学ぶ。
- 第7回 高次脳機能障害の評価
認知機能のモジュールと階層性、評価の原則と各種検査について学ぶ。
- 第8回 認知リハビリテーション
認知リハビリテーションの基本原則、訓練と援助のあり方、社会参加についての考え方を学ぶ。
- 第9回 認知リハビリテーション
注意障害、記憶障害、遂行機能障害に対する認知リハビリテーションについて学ぶ。
- 第10回 画像診断学 (1) 脳画像検査の種類と特徴を学ぶ。
- 第11回 画像診断学 (2) 水平断の同定：中心溝、シルビウス溝、大脳基底核、脳梁の同定を学ぶ。
- 第12回 画像診断学 (3) 水平断の同定：ブローカ野、ウェルニッケ野、角回、縁上回の同定の方法を学ぶ。
- 第13回 画像診断学 (4) 冠状断の見かた、矢状断の見方を学ぶ。
- 第14回 画像診断学 (5) 画像から症状を推測する。
- 第15回 画像診断学 (6) 画像から症状を推測する。

■ 評 価 方 法

定期試験70%、小テスト20%、出席点10%とする。

■ 教 科 書

藤田郁代 監修 「標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学」 医学書院
三村將、ほか著 「高次脳機能障害マエストロシリーズ②画像の見かた使い方」 医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害Ⅰ - 1	担当者	齋藤 典昭・ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

対人援助職として必要とされる基本的な知識や技術について学びます

■ 目 標

1. 面談ができるようになる.
2. 患児・者さまの様子を観察できるようになる.
3. 観察内容を記述できるようになる.

■ 授 業 計 画

- 第1回 導入
- 第2回 上手なコミュニケーションについて考える その1
- 第3回 上手なコミュニケーションについて考える その2
- 第4回 上手なコミュニケーションについて考える その3
- 第5回 上手なコミュニケーションについて考える その4
- 第6回 上手なコミュニケーションについて考える その5
- 第7回 ロールプレイ その1
- 第8回 ロールプレイ その2
- 第9回 観察する・記述する その1
- 第10回 観察する・記述する その2
- 第11回 観察する・記述する その3
- 第12回 脳性麻痺児の評価とアプローチ法 その1 (姿勢・運動・コミュニケーション・摂食)
- 第13回 脳性麻痺児の評価とアプローチ法 その2 (姿勢・運動・コミュニケーション・摂食)
- 第14回 脳性麻痺児の評価とアプローチ法 その3 (姿勢・運動・コミュニケーション・摂食)
- 第15回 脳性麻痺児の評価とアプローチ法 その4 (姿勢・運動・コミュニケーション・摂食)

■ 評 価 方 法

試験で評価95%, 授業参加の様子で評価5%

■ 教 科 書

「24の臨床シーンでわかるコミュニケーションの上手な方法」 照林社 「絵でわかる言語障害」 学研

■ 参 考 書

「インリアルアプローチ」 竹田・里見 日本文化科学社

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害Ⅰ-Ⅱ	担当者	齋藤 典昭・井崎 基博・ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

様々な言語発達障害の概念，評価，援助について学びます。後期には保育所を訪問し見学学習をおこないます。また，ATAC プレカンファレンスに参加します。

■ 目 標

1. 様々な言語発達障害の鑑別ができる。
2. 障害の特性に応じた適切な援助が考えられる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 知的障害
- 第2回 定型運動発達
- 第3回 脳性麻痺
- 第4回 広汎性発達障害 その1
- 第5回 広汎性発達障害 その2
- 第6回 注意欠陥・多動性障害
- 第7回 学習障害・発達性読み書き障害
- 第8回 特異性言語発達遅滞
- 第9回 虐待の概念，評価，援助 その1
- 第10回 虐待の概念，評価，援助 その2
- 第11回 虐待の概念，評価，援助 その3
- 第12回 虐待の概念，評価，援助 その4
- 第13回 発達障害とライフステージ
- 第14回 保育所見学
- 第15回 ATAC カンファレンス2011参加

■ 評 価 方 法

試験による評価85%，レポートによる評価15%

■ 教 科 書

「よくわかる障害児保育」 ミネルヴァ書房
「AAC 入門」中邑賢龍 こころリソースブック出版会
「子ども虐待という第4の発達障害」杉山登志郎 学研

■ 参 考 書

「よくわかる発達障害」 ミネルヴァ書房

■ 留 意 事 項

児童精神科医による「発達障害児・者ライフステージと援助」という講義が追加される場合があります

授業科目	言語発達障害Ⅰ - 3	担当者	齋藤 典昭・井崎 基博 岡 美代子・赤尾 清子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

各種の発達検査，知能検査，言語検査について見学や演習をととして学びます。

■ 目 標

1. 目的や実施手順など，検査の内容を識る．
2. 結果を分析する能力を獲得する．

■ 授 業 計 画

- 第1回 新版 K 式発達検査 2001
- 第2回 新版 K 式発達検査 2001
- 第3回 新版 K 式発達検査 2001
- 第4回 新版 K 式発達検査 2001
- 第5回 WISC-Ⅲ その1
- 第6回 WISC-Ⅲ その1
- 第7回 WISC-Ⅲ その1
- 第8回 WISC-Ⅲ その1
- 第9回 ITPA その1
- 第10回 ITPA その1
- 第11回 ITPA その1
- 第12回 ITPA その1
- 第13回 WISC-Ⅲ その2
- 第14回 WISC-Ⅲ その2
- 第15回 WISC-Ⅲ その2
- 第16回 WISC-Ⅲ その2
- 第17回 ITPA その2
- 第18回 ITPA その2
- 第19回 ITPA その2
- 第20回 ITPA その2
- 第21回 K-ABC
- 第22回 K-ABC
- 第23回 K-ABC
- 第24回 K-ABC
- 第25回 K-ABC
- 第26回 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査
- 第27回 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査
- 第28回 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査
- 第29回 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査
- 第30回 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査 質問—応答関係検査

■ 評価方法

試験で評価100%

■ 教科書

「言語発達障害学」 医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

成人領域も含め学ぶ検査の数が多いので、検査で使う物品に触れる機会を時間外などに自ら作り出すよう努力してください。

授業科目	言語発達障害Ⅱ	担当者	齋藤 典昭・吉田 くすほみ 藤澤 和子・井崎 基博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語発達障害児に対する多様な支援プログラムの在り方について学ぶ。また、AAC(補助代替コミュニケーション) による言語・コミュニケーション指導として PIC, マカトンサインなどの実際を知る。

■ 目 標

言語発達障害児の指導計画の立案ができるようになることを目標とする。また、各種 AAC に関する特徴や指導方法を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 広汎性発達障害の定義
- 第2回 広汎性発達障害の行動・認知特性
- 第3回 高機能広汎性発達障害（アスペルガー障害、高機能自閉症を中心に）
- 第4回 自閉症をめぐる諸理論
- 第5回 広汎性発達障害の特性に合わせた支援
- 第6回 学習障害の定義と原因
- 第7回 学習障害をめぐる諸理論
- 第8回 学習障害の特性に合わせた支援
- 第9回 特異的言語発達障害をめぐる理論と支援
- 第10回 注意欠陥多動性障害をめぐる理論と支援
- 第11回 様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える
- 第12回 様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える
- 第13回 様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える
- 第14回 様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える
- 第15回 様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える
- 第16回 様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える
- 第17回 様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える
- 第18回 AAC 導入の実際
- 第19回 AAC 導入の実際
- 第20回 AAC と視覚シンボルとは
- 第21回 PIC シンボルの特徴、指導方法
- 第22回 知的障害、自閉症、失語症への活用事例
- 第23回 PIC シンボルを使ったメールシステムの研究、アニメーションの効果
- 第24回 マカトンサイン、サウンズ&シンボル
- 第25回 マカトンサイン、サウンズ&シンボル
- 第26回 マカトンサイン、サウンズ&シンボル
- 第27回 マカトンサイン、サウンズ&シンボル
- 第28回 マカトンサイン、サウンズ&シンボル
- 第29回 マカトンサイン、サウンズ&シンボル
- 第30回 マカトンサイン、サウンズ&シンボル

■ 評価方法

試験50%、グループワーク50%

■ 教科書

よくわかる発達障害 小野次朗、上野一彦、藤田継道 ミネルヴァ書房

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	音声障害	担当者	藤田 邦子・ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声障害の種類と治療法、音声治療の手技

■ 目 標

音声障害の種類と治療法、音声治療の手技を学ぶ

■ 授 業 計 画

- 第1回 音声障害とは 発声のしくみ
第2回 解剖、呼吸
第3回 音声障害の評価方法
第4回 音声障害を来す疾患Ⅰ 声帯の器質的疾患（声帯ポリープ、声帯結節、ポリープ様声帯等）
第5回 音声障害を来す疾患Ⅱ 喉頭麻痺
第6回 音声障害を来す疾患Ⅲ 声帯に著変認めない音声障害（変声障害、痙攣性発声障害、機能性発声障害等）
第7回 声帯結節の音声治療
第8回 喉頭麻痺の音声治療
第9回 声帯に著変を認めない音声障害に対する音声障害
第10回 腹式呼吸に関する演習
第11回 喉頭全摘出後の代用音声
第12回 復習
第13回 食道発声法教室の見学（大阪成人病センター）
第14回 食道発声法教室の見学（大阪成人病センター）
第15回 まとめ
第16回 音声障害の発現機序と分類
第17回 音声障害の診療の流れ 音声障害の治療法 1. 薬物治療 2. 音声外科 3. 音声治療
第18回 声の衛生指導
第19回 音声治療の手技Ⅰ
第20回 音声治療の手技Ⅱ
第21回 音声治療の手技Ⅲ
第22回 音声治療の手技Ⅳ
第23回 まとめ

■ 評価方法

試験100%

■ 教 科 書

「言語聴覚療法シリーズ14 音声障害」 荻安 誠 建帛社

■ 参 考 書

「STのための音声障害診療マニュアル」 廣瀬 肇 監修 城本 修 ほか 著 インテルナ出版

■ 留 意 事 項

食道発声法教室の見学は2グループに分かれて実施する。（引率：ST 職員）
定期的に GRBAS 尺度の演習を行う。

授業科目	構音障害Ⅰ－Ⅰ	担当者	松本 治雄		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

話しことばの3要素である「音声」「構音」「パタン」のうち、構音の障害はコミュニケーション機能のもつとも中核となる障害要因である。言語聴覚士の仕事の主たるものは構音の指導であると言える。構音指導の内容を理解し、そのメカニズムの基本を体得することが必要不可欠である。

■ 目 標

本講義は言語聴覚士が構音指導上、基本として体得しておくべき内容を演習的に習得することを目指している。

■ 授 業 計 画

- 第1回 障害児音声の聞き取りと構音障害の定義
- 第2回 発声発語の仕組みと各器官の機能、名称
- 第3回 日本語音声の成り立ち（母音）
- 第4回 日本語音声の成り立ち（子音）
- 第5回 日本語音声の成り立ち（五十音表の音声学的検討）
- 第6回 構音障害児の評価1（構音障害に関わる要因）
- 第7回 構音障害児の評価2（構音検査の種類と目的）
- 第8回 構音障害児の評価3（異常構音の種類と聞き取り演習）
- 第9回 構音障害児の評価4（情報のまとめと分析）
- 第10回 構音障害児の指導1（指導の段階1）
- 第11回 構音障害児の指導2（指導の段階2）
- 第12回 構音障害児の指導3（事例による演習1）
- 第13回 構音障害児の指導4（事例による演習2）
- 第14回 構音障害児の指導5（事例による演習3）
- 第15回 構音障害指導に関する総まとめ

■ 評価方法

平常点とレポート（10%）、期末テスト（90%）を加味して評価する予定

■ 教 科 書

機能性構音障害 本間慎治編著 建帛社

■ 参 考 書

言語障害（事例による用語解説）松本治雄他編著 ナカニシヤ出版

■ 留 意 事 項

受講に際しては知識として頭で覚えるのではなく、聴覚、視覚、触覚、筋運動覚を駆使して身体で身につけてもらうこと目指している。

授業科目	構音障害Ⅰ－Ⅱ	担当者	吉田 紀子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

構音動態、構音発達および機能性構音障害の評価・指導法を学ぶ。また、音声の聴取や指導方法について演習をおこなう。

■ 目 標

機能性構音障害の基礎知識を学び、音声を聴き取り評価する力を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 構音障害 概論
- 第2回 日本語の音声
- 第3回 構音発達
- 第4回 構音の聴取練習
- 第5回 機能性構音障害および関連疾患について
- 第6回 構音の誤り
- 第7回 機能性構音障害 評価・指導の流れ
- 第8回 機能性構音障害の評価①
- 第9回 機能性構音障害の評価②
- 第10回 機能性構音障害の指導①
- 第11回 機能性構音障害の指導②
- 第12回 ケーススタディ①
- 第13回 ケーススタディ②
- 第14回 ケーススタディ③
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

『日本言語聴覚療法シリーズ7 改訂 機能性構音障害』, 本間 慎治 編著, 建帛社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害学Ⅰ－Ⅲ	担当者	藤原 百合		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

口蓋裂言語の評価および訓練について学ぶ。さらに授乳、聴覚、発達、心理社会的問題についても理解する。

■ 目 標

口蓋裂に関する基礎的な知識と、口蓋裂治療チームのなかで言語聴覚士が果たす役割を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 ことばの生成、発話のプロセス
- 第2回 口蓋裂に関する基礎的な知識
- 第3回 口蓋裂言語の特徴
- 第4回 評価：口腔顔面の形態・機能
- 第5回 評価：発話の聴覚的印象
- 第6回 評価：鼻咽腔閉鎖機能
- 第7回 医学的治療（外科的・補綴的）
- 第8回 言語治療、口蓋裂治療チームにおける言語聴覚士の役割
- 第9回 訓練：機能的訓練
- 第10回 訓練：構音訓練
- 第11回 訓練：機器を用いた構音訓練
- 第12回 口蓋裂にともなうその他の問題（授乳、発達、聴覚、心理社会的問題）
- 第13回 症例検討（演習）
- 第14回 症例検討（演習）
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

演習（10％） 試験（90％）

■ 教 科 書

標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 医学書院

■ 参 考 書

目で見える日本語音の産生 エレクトロパラドグラフィを用いて エスコアール

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害Ⅰ - 4	担当者	熊倉 勇美		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動障害性構音障害と成人の後天性の器質性構音障害について、広く定義、症状、鑑別診断、評価、訓練について学習し、それらを十分に理解した上で臨床技術を習得する

■ 目 標

観察、検査などから得られる情報を整理・分析し、具体的に訓練目標の設定、訓練の実施が出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 運動障害性構音障害とは、何が問題なのか、定義、患者・家族の訴え
- 第2回 原因疾患と発話症状（症例紹介①）
- 第3回 原因疾患と発話症状（症例紹介②）
- 第4回 原因疾患と発話症状（症例紹介③）
- 第5回 原因疾患と発話症状（症例紹介④）
- 第6回 評価・鑑別診断
- 第7回 さまざまな検査法（紹介と演習）①
- 第8回 さまざまな検査法（紹介と演習）②
- 第9回 治療訓練の考え方（機能訓練と発話訓練）
- 第10回 補助手段（AAC）
- 第11回 がんの基礎知識
- 第12回 口腔がん・中咽頭がんの特性と治療
- 第13回 患者の抱える問題と ST の果たす役割
- 第14回 発話の評価と分析（演習）
- 第15回 発話訓練と補綴治療

■ 評 価 方 法

筆記試験（100％）

■ 教 科 書

「改訂 運動障害性構音障害」、「口腔・中咽頭がんのリハビリテーションー構音障害、摂食嚥下障害ー」

■ 参 考 書

「標準言語聴覚障害学シリーズ 発音発語障害学」、「改訂 -AAC」、「ベッドサイドの神経の診かた」、「器質性構音障害」

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害Ⅱ	担当者	福永真哉・山本一郎・福山智子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	選択

■ 内 容

ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた訓練法、口唇口蓋裂の言語治療および吸引に関する講義を行う。

■ 目 標

- ・ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリアの検査の評価データから総合的な分析を適切に行ない、訓練立案が出来るようにする。
- ・器質性構音障害（口蓋裂）の言語治療に関する知識を得る。
- ・吸引に関する知識を得る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について（福永）
- 第2回 呼吸機能の治療アプローチ（福永）
- 第3回 発声機能の治療アプローチ（福永）
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ（福永）
- 第5回 口腔構音機能の治療アプローチ（福永）
- 第6回 発話速度の調節法1（福永）
- 第7回 発話速度の調節法2、構音訓練、プロソディ訓練など（福永）
- 第8回 まとめ（福永）
- 第9回 器質性構音障害 ―口蓋裂の病態と言語症状―（山本）
- 第10回 器質性構音障害 ―口蓋裂の評価方法―（山本）
- 第11回 器質性構音障害 ―口蓋裂の言語治療とその考え方―（山本）
- 第12回 吸引について 解剖学的知識の整理（福山）
- 第13回 吸引について 手技の実際（福山）
- 第14回 吸引について 演習①（福山）
- 第15回 吸引について 演習②（福山）

■ 評価方法

試験100%

■ 教 科 書

福永：西尾正輝著 「ディサースリア臨床標準テキスト」（医歯薬出版）

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	嚥下障害Ⅰ－１	担当者	前田 留美子・高木 卓司		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

正常嚥下のメカニズムや嚥下障害の評価など基本的な事柄について学ぶ
臨床の場で、患者さまの身体の状態や動き、食事と嚥下の様子を実地に学ぶ

■ 目 標

嚥下障害の基礎的な知識を理解する
検査を実施できる
健常者と高齢者の身体や食事、嚥下の違いについて理解する

■ 授 業 計 画

第1回 嚥下障害総論（前田留美子）
第2回 摂食・嚥下のメカニズム①（前田留美子）
第3回 摂食・嚥下のメカニズム②（前田留美子）
第4回 情報収集（前田留美子）
第5回 問診と観察（前田留美子）
第6回 各部位の評価①（前田留美子）
第7回 各部位の評価②（前田留美子）
第8回 各部位の評価③（前田留美子）
第9回 嚥下障害のスクリーニングテスト①（前田留美子）
第10回 嚥下障害のスクリーニングテスト②（前田留美子）
第11回 実技演習（前田留美子）
第12回 引率実習ガイダンス①（高木卓司）
第13回 引率実習ガイダンス②（高木卓司）
第14回 引率実習①（高木卓司、前田留美子）
第15回 引率実習②（高木卓司、前田留美子）

■ 評 価 方 法

試験（100％）に引率実習の出席（欠席は減点）を加味する

■ 教 科 書

藤島一郎、柴本勇監修、「動画でわかる摂食・嚥下リハビリテーション」、中山書店

■ 参 考 書

聖隷三方原病院嚥下チーム、「嚥下障害ポケットマニュアル」、医歯薬出版株式会社
藤島一郎著「脳卒中の摂食・嚥下障害 第2版」、医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

授業科目	嚥下障害Ⅰ－Ⅱ	担当者	田上恵美子・戸倉晶子・前田留美子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

嚥下訓練の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える

嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の目的、手順、解析方法について学習し、実際の画像を用いて症例検討を行う

■ 目 標

嚥下訓練の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える

VF・VE の評価方法を習得し、嚥下障害の症状を理解できるようになる

■ 授 業 計 画

- 第1回 間接訓練①（田上恵美子）
- 第2回 間接訓練②（田上恵美子）
- 第3回 間接訓練③（田上恵美子）
- 第4回 直接訓練①（田上恵美子）
- 第5回 直接訓練②（田上恵美子）
- 第6回 直接訓練③（田上恵美子）
- 第7回 訓練計画（田上恵美子）
- 第8回 実技演習（前田留美子）
- 第9回 嚥下造影検査の目的・手順について（戸倉晶子）
- 第10回 嚥下造影検査の解析①（戸倉晶子）
- 第11回 嚥下造影検査の解析②（戸倉晶子）
- 第12回 症例検討①（戸倉晶子）
- 第13回 症例検討②（戸倉晶子）
- 第14回 嚥下内視鏡検査による評価①（戸倉晶子）
- 第15回 嚥下内視鏡検査による評価②（戸倉晶子）

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

才藤栄一著、「摂食・嚥下リハビリテーション 第2版」、医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

藤島一郎著、「脳卒中の摂食・嚥下障害 第2版」、医歯薬出版株式会社

藤島一郎著、「目で見える嚥下障害～嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として～」、医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

授業科目	嚥下障害Ⅱ	担当者	田上恵美子・糸田昌隆・前田留美子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実践について学ぶ

VF 検査画像を用いた正常嚥下像に関する生理・解剖・機能の理解を求め、摂食・嚥下障害に関する評価法と対応法、その手技を学習する。それらを理解したうえで症例別の具体的な対応法を理解・習得する。

■ 目 標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる

個別の摂食・嚥下障害症例に関する患者観察および各種評価から得られる情報を理解・検討し、適切な対応法を選択できること。あわせて対応法において全人的評価を加味した対応が行えるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 他職種業務とチームアプローチ（田上恵美子）
- 第2回 在宅訪問での ST の役割および仕事内容①（田上恵美子）
- 第3回 在宅訪問での ST の役割および仕事内容②（田上恵美子）
- 第4回 在宅訪問での ST の役割および仕事内容③（田上恵美子）
- 第5回 事例による嚥下リハの進め方①変性疾患（田上恵美子）
- 第6回 事例による嚥下リハの進め方②変性疾患（田上恵美子）
- 第7回 事例による嚥下リハの進め方③脳血管障害（前田留美子）
- 第8回 事例による嚥下リハの進め方④脳血管障害（前田留美子）
- 第9回 摂食・嚥下リハビリテーションの概念と意義。医療周辺事項の理解と、正常嚥下画像（VF）を用いた嚥下機能の理解と考察（糸田昌隆）
- 第10回 前回講義の振り返り、再度正常嚥下の生理学的、機能的理解（糸田昌隆）
- 第11回 （摂食・嚥下）リハビリテーションに必要な臨床栄養の理解と対応法（糸田昌隆）
- 第12回 摂食・嚥下障害の評価の実際と訓練・対応法の実際について（糸田昌隆）
- 第13回 症例別嚥下障害の考え方と具体的な対応法について（糸田昌隆）
- 第14回 咀嚼と嚥下機能の関わりと臨床的意義。高次脳機能について（時間があれば国家試験解説）（糸田昌隆）
- 第15回 症例検討（グループワーク）と発表（糸田昌隆）

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

里宇明元、藤原俊之監修「ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション in DVD ～50症例から学ぶ実践的アプローチ～」、医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	吃音	担当者	福永 真哉・ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・吃音の症状の特徴から訓練法の概要を学ぶ。
- ・ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた評価法について解説する。

■ 目 標

- ・吃音の基礎知識を習得する。
- ・ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた適切な評価法である標準ディサースリア検査を適切に実施できるようにする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 吃音の定義、進展
- 第2回 吃音の症状（獲得性吃音の症状も含む）
- 第3回 吃音の原因論
- 第4回 指導・訓練法（直接法）
- 第5回 指導・訓練法（環境調整法）
- 第6回 指導・訓練法（間接法）
- 第7回 指導・訓練法（間接法）
- 第8回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した評価について
- 第9回 発話の聴覚的評価
- 第10回 呼吸機能の評価
- 第11回 発声機能の評価
- 第12回 鼻咽腔閉鎖機能の評価
- 第13回 口腔構音機能の評価（舌・口唇）
- 第14回 口腔構音機能の評価（交互反復運動、筋力）
- 第15回 症例報告書の作成とまとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

第1回～7回 「言語聴覚療法シリーズ13 改訂吃音」
福永担当：第8回～15回 西尾正輝著 「標準ディサースリア検査」（インテルナ出版）

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	小児聴覚障害	担当者	矢吹 裕栄・田村 薫・野田 祥子 長 知子・福田 章一郎・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚の検査法とその評価、及び聴覚発達を中心とした援助について学ぶ

■ 目 標

聴覚障害を有する対象者に、基本的な検査が実施でき、その結果を評価するとともに、発達を含めた援助を提案することができるようになる

■ 授 業 計 画

- 第1回 乳幼児の難聴の基礎と聴覚に関する全般について解説する（福田）
- 第2回 聴覚障害児の早期発見と新生児聴覚スクリーニングの目的と意義について解説する（福田）
- 第3回 難聴の原因やリスクファクターと遺伝および症候性難聴の特徴について解説する（福田）
- 第4回 乳幼児の聴覚検査の種類とその特徴ならびにそれぞれの方法および留意点について解説する（福田）
- 第5回 乳幼児の補聴の必要性とその方法および評価法ならびに補聴手段の種類と特徴や補聴補助システムについて解説する（福田）
- 第6回 聴覚障害児への初期介入および療育法の種類と内容について聴力程度、発達などを考慮しながら解説する（福田）
- 第7回 前期の復習 難聴の原因となる疾患（矢吹）
- 第8回 疾患と難聴の関連の確認（矢吹）
- 第9回 人工内耳の原理（矢吹）
- 第10回 人工内耳の原理（矢吹）
- 第11回 マスキングの考え方（矢吹）
- 第12回 マスキングの計算方法（矢吹）
- 第13回 マスキングの計算方法（演習）（矢吹）
- 第14回 標準聴力検査について（野田または田村）
- 第15回 標準聴力検査の検査演習（野田または田村）
- 第16回 Bekesy 検査について（野田または田村）
- 第17回 Bekesy 検査の演習（野田または田村）
- 第18回 閾値上聴覚検査について（野田または田村）
- 第19回 閾値上聴覚検査の演習（野田または田村）
- 第20回 聴性脳幹反応の測定方法（野田または田村）
- 第21回 聴性脳幹反応の検査演習（野田または田村）
- 第22回 インピーダンスオーディオメータについて（野田または田村）
- 第23回 語音聴力検査について（野田または田村）
- 第24回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示①（長）
- 第25回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示②（長）
- 第26回 幼小児の聴力検査（山口）
- 第27回 幼小児の聴力検査（山口）
- 第28回 臨床の実際 ― 発達遅滞の聴力評価 ―（山口）
- 第29回 臨床の実際 ― 補聴器のフィッティング ―（山口）
- 第30回 まとめ（山口）

■ 評価方法

試験100%

■ 教科書

聴覚検査の実際（改訂3版） 南山堂
言語聴覚士のための聴覚障害学 医歯薬出版
言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 医学書院
聴覚活用の実例 聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	成人聴覚障害 I	担当者	矢吹 裕栄・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

成人聴覚障害の病態を知り、検査及び評価について学ぶ

■ 目 標

聴覚障害をきたす疾患を知り、必要な検査の選択と評価を理解する

■ 授 業 計 画

- 第1回 音の性質、これから出てくる基本用語の確認（矢吹）
- 第2回 聴覚器の解剖と機能 外耳・中耳（矢吹）
- 第3回 聴覚器の解剖と機能 内耳・後迷路（矢吹）
- 第4回 難聴の種類（矢吹）
- 第5回 難聴の種類と疾患（矢吹）
- 第6回 聴力検査法（矢吹）
- 第7回 聴力検査法（矢吹）
- 第8回 まとめと復習（矢吹）
- 第9回 聴覚障害の実態（山口）
- 第10回 聴覚障害をきたす疾患（山口）
- 第11回 聴覚障害への対応（山口）
- 第12回 補聴器の仕組みと適応（山口）
- 第13回 人工内耳の仕組みと適応（山口）
- 第14回 聴力検査の復習と結果の見方（山口）
- 第15回 まとめ（山口）

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

聴覚検査の実際（改訂3版） 南山堂
 言語聴覚士のための聴覚障害学 医歯薬出版
 言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 医学書院
 聴覚活用の実例 聴覚障害者教育福祉協会

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	成人聴覚障害Ⅱ	担当者	大森千代美・箕谷健三・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚障害の臨床の目的と実際について学ぶ

■ 目 標

聴覚障害児・者の適切な援助について、検査結果を踏まえ適切な援助について提案できるようになる

■ 授 業 計 画

- 第1回 乳児の聴覚発達と難聴の発見（大森）
- 第2回 ことばの獲得の基盤について（大森）
- 第3回 難聴幼児の療育の実際①（大森）
- 第4回 難聴幼児の療育の実際②（大森）
- 第5回 聴覚障害教育（聴覚障害教育の歴史、聴覚学習、言語指導を含む）（箕谷）
- 第6回 聴覚障害児の補聴器フィッティングと装用指導（箕谷）
- 第7回 聴覚管理と補聴器管理（耳型、ダンパー等のアクセサリーを含む）
聴覚障害児を取り巻く環境変化と保護者支援（箕谷）
- 第8回 人間における聴覚機能（山口）
- 第9回 聴能とその発達（山口）
- 第10回 聴覚障害の援助1（山口）
- 第11回 聴覚障害の援助2（山口）
- 第12回 聴覚障害の援助3（山口）
- 第13回 聴覚障害の遺伝子診断（山口）
- 第14回 聴覚障害の検査と評価1
- 第15回 聴覚障害の検査と評価2（山口）
- 第16回 聴覚障害の検査と評価3
- 第17回 聴覚障害の検査と評価（山口）
- 第18回 聴覚障害のケースワーク1（山口）
- 第19回 聴覚障害のケースワーク2（山口）
- 第20回 聴覚障害のケースワーク3
- 第21回 聴覚障害のケースワーク4（山口）
- 第22回 聴覚障害のケースワーク5（山口）
- 第23回 聴覚障害のケースワーク6（山口）
- 第24回 人工内耳装用児の幼児期における実態（山口）
- 第25回 人工内耳装用児の幼児期における実態（山口）
- 第26回 人工内耳装用児の学童期における実態（山口）
- 第27回 人工内耳装用児の学童期における実態（山口）
- 第28回 人工内耳装用者の実態（山口）
- 第29回 視覚聴覚二重障害（山口）
- 第30回 視覚聴覚二重障害（山口）

■ 評価方法

試験100%

■ 教科書

聴覚検査の実際（改訂3版） 南山堂

言語聴覚士のための聴覚障害学 医歯薬出版

言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 医学書院

聴覚活用の実例 聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	補聴器・人工内耳	担当者	伊藤恭子・竹田利一・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

補聴器領域：補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択、イヤモールドの採形についての講義と実習
人工内耳領域：人工内耳の仕組みや適応、マッピングについて学ぶ

■ 目 標

補聴器・人工内耳人工内耳の原理を知り、その適応と装着の手順について、説明ができる。装用者に適切なかわりができ、適切な調整を提案することができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 補聴器の種類、仕組み（竹田）
- 第2回 補聴器の性能（補聴器における最新のデジタル技術）（竹田）
- 第3回 補聴器に関する測定、JIS、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
- 第4回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味と実測（竹田）
- 第5回 イヤモールドに関する講義（竹田）
- 第6回 イヤモールドの採形実習（竹田）
- 第7回 補聴器のフィッティングの考え方（リニア・ノンリニア）（竹田）
- 第8回 補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の解説（竹田）
- 第9回 人工内耳の仕組み（伊藤）
- 第10回 人工内耳の音声処理方式について（伊藤）
- 第11回 成人人工内耳装用者のリハビリテーションの進め方（伊藤）
- 第12回 小児人工内耳装用児のリハビリテーション、支援体制（伊藤）
- 第13回 聴覚障害総復習（山口）
- 第14回 聴覚障害総復習（山口）
- 第15回 聴覚障害総復習（山口）

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

伊藤：言語聴覚士テキスト
言語聴覚士のための聴覚障害学
竹田：補聴器フィッティングの考え方（改訂第2版） 診断と治療社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	視覚聴覚二重障害	担当者	ST 教員		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

視覚障害、聴覚障害関連施設の見学及び講義

■ 目 標

視覚障害者、聴覚障害者を取りまく現状を知り、理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 聴覚障害者を取りまく環境について（京都市聴覚言語障害センター）
- 第2回 聴覚障害者福祉の歴史について（京都市聴覚言語障害センター）
- 第3回 聴覚障害者福祉の歴史について（京都市聴覚言語障害センター）
- 第4回 視覚障害者福祉の歴史について（日本ライトハウス）
- 第5回 視覚障害者福祉の歴史について（日本ライトハウス）
- 第6回 視覚障害者福祉の歴史について（日本ライトハウス）
- 第7回 国家試験対策
- 第8回 国家試験対策

■ 評 価 方 法

出席点100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床実習Ⅰ	担当者	吉機 俊雄・齋藤 典昭・大西 環 前田 留美子・井崎 基博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

I 期臨床実習（見学実習）

期間：1 週間

■ 目 標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授 業 計 画

実習協力施設、病院様にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。

毎日実習日誌を作成し、SV の添削を適宜頂く。

SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。

実習のまとめを作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評 価 方 法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SV からの種々の情報
 - ③ SV 記載の成績表・所見
 - ④ 症例報告書
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
 - ⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
- を総合し、専攻科教員が評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅱ	担当者	吉機 俊雄・齋藤 典昭・大西 環 前田 留美子・井崎 基博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	5 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅱ期臨床実習（評価実習）

期間：5 週間

■ 目 標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、言語聴覚療法における検査、及び評価を実際に行い、指導援助プログラムの立案までが指導を受けながら可能となる。

■ 授 業 計 画

実習協力施設、病院様にて、ご指導いただく SV の指示、監督のもと、患者（児）様に検査を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。

実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などを作成する。

実習のまとめとして、症例報告書を作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評 価 方 法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SV からの種々の情報
 - ③ SV 記載の成績表・所見
 - ④ 症例報告書
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
 - ⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
- を総合し、専攻科教員が評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の 4 / 5 に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅲ	担当者	吉機 俊雄・齋藤 典昭・大西 環 前田 留美子・井崎 基博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	6 単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅲ期臨床実習
期間：8 週間

■ 目 標

検査および評価に基づき指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。言語聴覚士としての役割を理解し、言語聴覚療法の臨床に於いて必要な知識と技術を習得する。また、職務に対する倫理や基本的な姿勢など、言語聴覚士としての適性を養う。

■ 授 業 計 画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導、監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案から、実際の言語聴覚療法を経験する。
実習日誌を毎日作成してSVのご指導を頂くと共に、SV から与えられるレポート課題などに取り組む。
実習のまとめとして、症例報告書を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評 価 方 法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SV からの種々の情報
 - ③ SV 記載の成績表・所見
 - ④ 症例報告書
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
 - ⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
- を総合し、専攻科教員が評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

